

幻影の魔族

オーク初心者

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

不知火マツマとの愛欲の日々を書きたかった。

※対魔忍RPGから入ったオークなので、設定はごちゃ混ぜかつガバガバ。

※日常回もある。

※サブ的ヒロインもいたりいなかったり。

※不定期更新

目次

治療という名の何か	2
人間界での温泉旅行	13
眷属化されど違和感はなく	32
対価を払う者	46
再会	57
即落ちくつコロの見本とは	71
プレイの一環	92
お風呂場にて	102
やり直し	114
天体観測	128
少女の葛藤	139
転換点	151

凛花という女	168
砕かれる自尊心	181
この部屋はしっかり監視されています	194
悪だくみの時間のようです	207
義父の影響を強く受けた母娘の行動結果	222

治療という名の何か

ゆつたりと包み込んでくれる柔肉はしとどに濡れて、挿入されている肉棒が自分だけのモノであると強く主張するがごとく、体液を休むことなく吐き出しては熱と硬さを維持するモノへと塗りたくり、蠕動を繰り返して舐め上げるに似た刺激を絶え間なく与えながら、絞り上げるように締め付けを適切に加えてくる。

経験が浅ければ、この結合状態だけで彼女の女陰が望むままに精を枯れ果てるまで吐き続けるところに、さらに彼女は対面座位の姿勢で臀部と見間違えかねない質量の双乳を揺らしつつ、繋がっている亀頭で自らの子宮口を強く押し上げては、先走りから一滴たりとも逃すまいと多数の髪全てで絡みつくように、貪るように腰を上下に動かしていた。

「ああっ、いいのおっ、貴方の逞しいおちんぼが私の子宮を突き上げてくれるのぉ！」

元は『幻影の対魔忍』と称されていた彼女——水城不知火は長年にわたる虜囚の中、身体改造や魔界技術を交えた洗脳を伴う調教により、極上の娼婦として仕上がってしまった。

彼女の家族への強い思い、母親としての愛情が、時に正気を取り戻させることもあつ

う、いやとまらな、またイツて、熱いのまだ出て、しゅごい、イギツばなし、イグイグまたイグうウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウ!!!」

全身を激しく痙攣させる激しいアクメの中にありながらも、性奴として身体に叩き込まれた習慣により、自ら腰の動きを止めることはない。まして、無意識下でも肉体が求め欲するまでに躡けられて、己にとつて甘美なご馳走そのものである子種を少しでも多く吸い上げようと、理性の制御を外れた身体が動き続ける。

「……不知火、一旦動き止めて。流石に戻つてこれなくなるぞ。」

だが、同時にご主人様の命は絶対的なもの。あくまで動きを止めるのもご主人様の命によつて行う。彼女が意識を飛ばした場合はこの限りでないが、そこまで濃厚な性交の場合は、その相手もたいてい意識を飛ばしているため然程問題にはならなかった。

指示により激しい情交がいったん落ち着き、繋がり合つたままではあるが、互いの身体を抱きしめ合う格好で荒い息を整えつつ少しの時間が流れれば、どこか虚ろだった不知火の瞳に光が戻ってくる。

「あつ……わ、私また、理性を失っていたのね……」

「気にしない。長年にわたつて植えつけられていた擬似的な人格みたいなものだ。自分の制御下に置くのは時間がかかるつていつも言うだろ？」

性奴隷としての思考が表立ってしまう原因となる強い発情が沸き起こる周期の間隔

は少しずつ長くなってきている。彼に抱かれた当初は一、二週間周期だったものが、調子が良い日は数時間おきのものとなっていた。とはいえ、半日は持たないということもあり、不知火はこの男の保護下で心身の回復を図りつつ、火照ればこうして抱かれる毎日を通してしている。

「……………あ、んんっ……………もう、本当におっぱいが好きなのね……………ふふ、すごく張ってしまっているし、たくさん飲んでちょうだいね」

男が言葉を止めて、目の前にある視界を埋め尽くすほどの乳房の突端に吸い付く。どこかむず痒く、それでいてじわりと身体の芯へと染みていくような悦楽を感じながら、不知火は自らの母乳を吸い上げていく男の頭を愛おしげに撫でる。出産をしてから随分と年数が経過している自分が授乳が可能な状態にあるのも身体改造の一環ではあったが、なにせ胸の張りというのは放っておけば痛みにも繋がるため、悦楽を兼ねた授乳プレイを不知火も積極的に受け入れてしまっている部分がある。

「ん。不知火の母乳、実際美味しいしな。あと、量は必要だけど血を吸う代わりになるから、俺も助かるし」

そう言いつつ、勢い良く吸い出していく彼の口の動きに不知火は甘い吐息を漏らしながら、胸の張りが軽くなるのを感じていた。そして、こういう時に決まって思い出すのだ、彼との共同生活が始まった出来事。

あの時に彼の助けが無かったならば、自分が自分で無くなっていたに違いないと、不知火は確信している。

数年にわたる凄惨な調教生活の中、自らの心を折るために夫が任務中に命を落としたことや、ゆきかぜが喪主として葬儀を行う映像を突きつけられ、気丈に振舞いながらも意識を失う時以外は常に襲い掛かる暴力的な快楽の波に、不知火は半ば堕ちかけていた。身体は完全に堕ちており、後は擦り切れそうになっている精神だけ。娘であるゆきかぜへの想いだけが最後の一線だが、確実に限界が近づいていた。

そんな折だ、不知火に転機が訪れたのは。目の前で自分を抱えている若き魔族の男による虜囚拠点への襲撃が発生し、その際に男の手により救出をされたのだった。

『俺の姉代わりになつてくれている人……じゃない、魔族を狙ってきたんだ。姉さんは誇り高いんだけど、ちよつと気が短いんでね。その辺りを利用して浚われかけたものだから、お礼参りと警告を兼ねてね』

後にそんな襲撃理由を聞かされた不知火ではあったが、対魔忍として任務についていた時期の鍛錬を欠かさなかつた自分であっても、襲撃時の男が振るつた力の暴風を前にすれば命を落としていた可能性が高いと推測している。

対魔忍としては失格、裏切りとも言える思考だろうが、それでも不知火はこの若き魔族の男に関する事柄を対魔忍側に告げるつもりはない。このまま自分が苛烈な調教の

影響からの回復が進み、本来あるべき場所に戻れたとしても。

彼がどこか亡き夫を思わせる雰囲気があるからか？——それもある。平時の瞳の穏やかさの奥に秘める強い意思の光を見ると、若い頃の夫を見ているかのようで。

正気を保つていられる時間に限りのある自分に付き添い、性奴隷や娼婦としての擬似人格が表立つ時も粗暴な振る舞いをせず、不知火という個を見て抱くからか？——女として、身体だけを目的とせず、自分自身を求めて抱かれるというのは、抑えがたい喜びを覚えるのを否定できない。

回復すれば必ず人間界に戻り、娘に会えるチャンスを作ると約束をしてくれているからか？——笑いながら、心配なら血の誓約を結んでも構わないとあつけらかんと言い放った彼の言葉を、不知火は信じようと思えたから。

聖人君子などでは決して無い。襲撃の際には敵意を見せる相手を人も魔も関係なく容赦なく屠っていた。囚われの身の振りをして襲い掛かってきた女魔人も、不味い血の香りがしたから予想通りだと、敵意を見せた途端に首が刈り取られていた。

——彼の言葉通りであるならば、彼は吸血鬼と淫魔の間に生まれた魔族。ゆえに、乾くほどの吸血衝動もなく、精気を定期的に取り入れなければ干からびて死ぬということもない。そして、双方の特性を持って生まれたがゆえに、彼には強力な異能を持っていた。

吸血、あるいは性交渉を行った相手から、相手の特性や特殊能力を模写できる力。とはいえ、模写した力をそのまま振るえるわけではなく、自分の力として馴染ませるため鍛錬の必要はあると言うが、彼は魔族としては変り種ではあるが、勤勉で鍛錬を厭わない性質であった。なにせ、長年の虜囚生活で体力が落ち込んでいた不知火を毎日一緒に体力づくりに連れ出し、不知火の望みを受け入れ、戦いの勘を取り戻すための立ち合いまで付き合っているのだから。なお、彼はほとんど攻撃を行わず、受ける避けるのが主で、反撃する際にも寸止めであつたり、あるいは不知火の攻撃の勢いを利用して投げたり、腕を固めて動けなくするような場合が多かつた。

年下に思える風貌の彼に手玉に取られるのは情けなさや悔しさが入り混じるものではあつたが、長年のブランクは大きいことは十分に分かつていたし、何より彼が回復途上にある自分に負担を掛け過ぎないようにしようとしているのを無碍にするつもりもなかつたため、今は己む無しとしていた。

自分が得意とする水遁の術すら徐々に我が物にしつつある彼の成長速度には舌を巻く思いだし、人にとっては本来脅威でしかない危険度の高い魔族の一人と言えるのは確かだ。それでも、不知火は――。

「えつと……(´Д`)馳走さん？」

「ふふ、お粗末さまでした。ありがとう、今日も随分と軽くなつたわ。それに……」

それなりの時間を必要とした授乳が終わり、不知火の中にある彼の分身も再び雄々しい硬さを取り戻している。吸血に準ずる行為でもあったのだ。理性が半ば飛んでいた一回目よりも硬さは上かもしれない。

「ごめん、血を吸った後はどうにもこうなるっていうか……」

申し訳なさそうに言いながら、自分の怒張を引き抜こうとする男の動きを不知火は男の上半身を押し倒すことで留める。理性が吹き飛ぶあの発情は収まっているものの、自分の子宮はさらなる精を求めて膣内は自然と蠢き始めていたし、自分の思考を取り戻した不知火は自らの意思で彼を受け入れ求めている。

「抜くのはダメ。私もまだ足りないんだから……ね？」

彼に抱く感情を言葉にはしないし、彼も求めているわけではない。口にしてしまえば、ゆきかぜの元に戻れなくなる自分になってしまふ予感もある。ただ、今はまだこの居心地のいい彼の傍で心穏やかでいられる時間を過ごしていたかった。

「ちゃんと貴方を感じながら、気持ち良くなりたいの」

「……分かった。俺も不知火が欲しい」

手を重ね合つて互いの指を絡め合い、不知火は微笑すら浮かべながら、それを支えにゆつくりと腰を動かし始める。一度放出した白濁液と不知火の分泌液が混ざり合い、じゅぶ、じゅぶ、と音を立てながら潤滑剤の代わりを果たし、二人の動きは滑らかなも

のとなっていた。

「あ、あつ、いい、激しくないのに、とても、とても気持ちいいの、これえ……」

不知火が腰を下ろすのに合わせて、男も腰を持ち上げること、激しい動きでなくても子宮をぐぐつと押し上げる感触に思わず唇から甘い声が漏れていく。互いの形や熱を強く感じながら、唇を貪り合って唾液を飲み干し合い、男が気持ち良くなれているかを問いかけ、彼女はその答えに満足しながら妖艶に微笑む。

「今の私は貴方だけの女だもの……貴方がちゃんと私で気持ち良くなってくれているのなら、私もとても嬉しいわ」

「……こない女を他に抱かせて喜ぶ野郎の考えは分からないな。蕩ける表情や乱れる姿を自分以外の男に見られるだなんて考えられない」

魔族に属しながらも、凶暴性や破壊欲、支配欲を強く見せることが無い男が不意に見せる一面が独占欲。そんな一面に、愛おしさと求められる満足感や充足感を覚えてしまう。

自分自身を強く求められ、丁寧に慈しむように身体中を愛撫されて、欲しくて堪らなくなつた頃に熱く太い剛直で貫かれる。調教師のように弱点を的確に突き止める手管は無いにしても、自分の反応を見ながら動き、時には教えを請うことも躊躇わない。今でも十分にいい男だと認められる存在だが、女が自分が抱かれることを望み、憧れるぐ

らしいの男に成り得る。そんな飛びつきりの男になり得る素材を導き、育てる過程は、一人の女として心が震える喜びがあった。

「リーズ、もつと深く私を貴方のモノにしたいのよ。その代わりに、さらに素敵な男性になつてちょうだいな」

彼の名は、リヴァイス・グレイ。愛称をリーズ。彼の育ての母や姉代わりの存在、そして不知火だけが今はその呼び方を許されている。

「勘違いするから止めてくれ。本気で俺の眷属にして、長い時を共に生きれるようにしてしまいそうだな」

冗談めいた言い方であるものの、瞳の色に本音が見え隠れしていた。不知火が迷うように、彼もまた惑いの中にある。いつそ強引にそうされてしまえば、二人とも迷うことは無くなるのかも知れない。けれど、そうしないのが彼であり、そういう彼だからこそ不知火もこうして身を委ねることが出来ているのだ。

「ふふ、そんな未来もあるのかもしれないわ。どちらにせよ、今はこの変貌してしまつた体質を私の制御下に戻してからの話になるもの……だから、たくさん感じさせて、そして、たくさん私の中に……出して頂戴？」

彼の精にはかつて取り込んだ力の一環で癒しの力が込められている。不知火の発情周期が徐々に伸びているのはそのお陰でもあり――。

「私はリーズに救われたのよ。どのような形であれ、私は貴方の力になるために、力を取り戻してみせる」

一番素直に気持ちを表していたのは、挿入されているペニスの突端へと懸命に吸い付き、先走りを熱心に吸い上げている子宮口であったのかもしれない。やがて来た絶頂の波に、不知火は彼の頭を自らの胸に強く抱き寄せながら吐精を受け入れ、二人は共にどこか穏やかながら長く続くオーガズムへとその身を一緒に預けていた。

人間界での温泉旅行

「うーん、味噌がそろそろなくなりそうだ……」

不知火が来てからというものの、彼らの主食は和食となっていた。元々、リヴァイスは自炊が基本である。生まれの兼ね合いから狙われやすい身の上であり、外食はいつ何を混入されるか分かったものではない。多少の毒や薬には耐性があるし、中和できる術も自分で持っているが、自分で栽培したり狩ったものを自分で調理して食べるというのがあくまで基本。まして、今は不知火が一緒だ。用心するに越したことはない。

長期巡業中の育ての母とそれに同行している義姉に調味料などを仕入れてもらい、直接受け取りに行き、不知火に和食の基本を学び、二人で台所に立って、それぞれ一品か二品ずつ作るのがここ最近の流れである。

「あとはお米かしらね。こればかりは栽培となると手間がかかり過ぎるもの」

つまり、調味料や米が無くなると、今の二人にとつてわりと死活問題であった。生きることには問題はないが、ただ、心の安寧は何事にも変え難いことである。

「だね。よし、買出しに行く。あと、温泉にも入りたいから、一緒に泊りがけで行こう」
「リイズがいいなら私は構わないけれど……どこで温泉なんて知ったの？」

「その辺りはまだ秘密。あ、でも、魔界にもあるんだよ。ただ、無防備に浸かるには危険過ぎてちよつとなあ。あと、地味に遠いんだ」

安心して浸かれない温泉など、臭いのするただの熱いお湯じゃないか。そうリヴァイスは言い切った。

「不知火も数時間は普通に動けるようになってきたし、情報屋にたまには直接顔を出した方がいいから、ちよつどいいかと思つて」

不知火が驚くほどにリヴァイスは日本文化に理解があるし、正座もお手の物だし、甚平姿で緑茶やほうじ茶を啜る姿も見慣れたものだ。最初は違和感があつたが、親しみやすさに繋がつたことを思えば、変わり者の魔族で良かったと思える。なお、この住居の風呂は檜風呂であり、その辺りにもこだわりが表れていた。

「あと、甚平の裾がほつれてきたからついでに新調するとして、あと、寝間着用に浴衣も手に入れたいし。不知火も浴衣買わない？」

不知火の普段着は洋装であるが、嗜みの一つとして自分で着付けは出来るし、部屋着としてならば下着を身に着けなくてもいいため楽という利点がある。だらしない肢体にならないように普段から気をつけているとはいえ、時には気を緩めたい夜もあるのだから。

「一、二着はあつてもいいかと思うけれど……出してもらつてばかりじゃない、私。これ

以上はどうかと思うのよ」

ここ最近になりリハビリを兼ねて、一緒に短期間の傭兵や護衛稼業を手伝って、多少は生活費を稼ぐようにはなったものの、この数ヶ月の生活費は全てリヴァイスから出ている。人間界という家賃収入に近いものがあり、普通に暮らすには収入に困ることは無いというのだが……。

「俺の目の保養になる、それじゃ駄目か？」

「……もう、ズルい言い方を覚えて。悪い子ね。ふふ、いいわ。じゃあ、何巻か反物を買ってくれる？」

「自分で仕立てるのか？ うわあ、流石に俺はそこまでは出来ないな……」

「嫌いじゃないのよ、元々。ゆきかぜの着る物も自分で縫ったりしていたし」

「おおう、不知火ほんと家事万能だよなあ……あ、どうする？ 日程は長く取れるから、娘さんに会いたいのなら出来るように手配するけど……」

不意に問われた一言に不知火は言葉に詰まってしまふ。ゆきかぜに会うということとは、この生活を続けるかどうかの分岐点になるということでもある。

「いや、困らせるつもりで言ったんじゃないんだ。……不知火が望めば、すぐに動けるようにはしてるからさ。今回じゃなくても、心積もりが出来たらいつでも伝えてくれ」

「……ええ、ありがとう」

申し訳なきように、答えを先延ばしにするようにしてくれるリヴァイスに、不知火はお礼を返す。五年余りも離れていた自分が、ゆきかぜに会う——受け入れてくれるか分からない不安や怖さに、今の生活の穏やかさに、不知火は未だ惑いの中にあつた。

いつまでも優しさに甘えているわけには行かないという自分と、五年近くにもわたる自身に刻み付けられた陵辱の傷が癒えたわけではなく、まだ安らぎと優しさを強く欲している心の内と。何より、毎日彼と身体を重ね合うことで、彼に愛される時間を待ち侘びている身体と、それに確実に引つ張られている心。

優しく甘美な洗脳を受けているのと同じなのだと不知火は自覚している。緩やかに堕ちていく自分が分かつていて止められない。まして、堕ちたとしても決して不幸ではなく、心と身体は乖離することなく、日々幸せを感じる毎日を過ごすことが出来るだろう。おそらくだが、ゆきかぜに定期的に逢うことを否定することは無いだろうし、条件さえ調整できれば、共に暮らすことも考えてくれる——その確信もある。

身勝手な考えだが、いつそ愛の言葉を囁いて、自分の全てを奪ってくれればいいのにと、そんな不満を覚える夜もある。そんな自分に自己嫌悪するのも一連の流れではあるが。避妊具なしで毎晩身体を重ね合っても、淫魔の血を引く彼であることから、その辺りの対策は抜かりないため、強引なきっかけも生まれることが無い。

「本当に……狡い男よ、貴方は」

不意にリヴァイスを抱き寄せて、彼の肩に頭を預ける動きと囁いた声は言葉の内容とは違って、どこか甘えが交じり親しみに満ちている。急な不知火の行動に何を言わず、静かに抱き止めて髪を撫でてくれる男に彼女は唇を押し付け、台所で一戦を交えてしまふのだった。

「へえ？ 温泉宿ですかい。あつしは温泉はよくわかりませんが、そそる女との二人旅つてのは楽しいもんですからなあ」

そして数日後、東京キングダムの上に二人の姿はあつた。リヴァイスに抱えられる格好で、水遁の術で自分達の身体に添うように水の幕を張り、高度による寒さや風の問題を緩和しながら、人間界に通じるゲートまでは空の旅。荷物はしつかり不知火が抱えて、その不知火をお姫様抱っこしつつ翼を広げたりヴァイスが移動するというやり方だった。

この移動手段が取れることに、こればかりは吸血鬼と淫魔のハーフである自分に感謝だとリヴァイスは軽口を叩いていたが、寒暖対策を取っていた空の旅は思った以上に快適で、まして憎からず思う男の腕の中だ。見える景色についても彼の解説つきであり、なかなか楽しく心弾む空の旅であつた。

そして、キングダムの高級宿で一泊の後、翌日から三泊の予定で温泉宿に泊まりながら、反物や調味料の調達に勤しむ計画である。買出しによって増える荷物については、

リヴァイスの使い魔を召還して一緒に運んでもらう予定としていた。

不知火が得意とする幻影陣の応用で、重量そのものを誤認させられないかというテストも行ったのだが、人や魔族の感覚に干渉するのは違い、物質そのものを騙すのは困難だったのだ。増えた荷物を抱えるリヴァイスや不知火の感覚を誤認させるのは難しくないが、実際には重量物を抱えて空を飛ぶことを考えると、後で身体へのダメージが来そうだということも踏まえて、ひとまず取り止めとしていた。そういう発想と試行までしようとする辺り、やはり変わり者の男だと不知火が感じたのは無理もないことである。

「しかし、旦那の女の好みは広いですなあ。年端もいかない少女に若い女ときて、今回は大人の色気たっぷりな女ときている」

宿に荷物を置いて、念のため幻影の罫を二重に仕掛けてから、二人は寂れたバーの片隅で情報屋——奴隷商人ゾクトの縁戚だという——との会合に臨んでいた。金さえしつかり払えば、人であろうと魔であろうと確実な仕事をするという評判の男オークだ。なお、彼は片目に眼帯をしており、ゾクトとの差別化であると嘯いている。

彼とは定期契約を結んでいて、今回は気になる情報をつかんでおり、現在裏取りをしているため、帰りにもう一度寄ってくれと伝えた彼は、リヴァイスが差し入れた年季モノのウイスキーをロックで少しずつ口にしながら、不知火が聞き流せない言葉を口にし

た。

「へっへっへ、女の顔色が変わりましたね、旦那？」

「おい……少女や若い女性の格好をした長寿の魔族、だろうか？」

「いい女ばかり連れてる旦那はやつかみの対象ですからねえ。爆発しろ、でしたか。人間界のスラングじゃあ」

「ねえ、リイズ。一体、誰のことなのかしら？」

自分でも信じられないほどに冷たい声が出ていた。自分はこんなに面倒な女だっただろうかとの心の中で自虐しつつも、実際には自分の恋人でも夫でもない癖に、嫉妬の炎が燃え盛るのを止められない。

「お袋と姉。話したことがあるだろ？」

自分が幼少期に両親を失いながら生き延びられたのは、育ての母と姉の存在がいたからだ。しかも、聞かされた名前は魔族の支配階級として、対魔忍の頃に聞き及んでいた名前だった。

「あ……」

「旦那あ……老婆心ながら、いつか女に刺されませうぜ」

「ブ男じゃないとは自認してるけど、色恋沙汰になるほどモテちゃいないよ」

リヴァイスのそっけない口ぶり。対して、情報屋の男の溜息混じりの助言。それだけ

でも、不知火が察するには充分だった。

義母や義姉のような存在は成長したリヴァイスを息子や弟としてではなく、今や一人の男として見ているのだ。周りから見れば一目瞭然なものなのに、彼だけが家族愛がそう見えるだけだと受け取っている。

リヴァイスの風貌は確かに道行く者が振り返るような圧倒的な美貌ではないが、西洋系の外見をベースに各部のパーツは整っており、やや切れ目でありながら穏やかな瞳の奥にある強い意思の光を見てしまえば、やられてしまう女は一定数いるはずと予想出来てしまう。それなのに、自分が女性を惹きつける強い要素など無いと思いついてる節がどこかにあるのだ。生まれの母親を早くに失ったことにより、愛情に関する感覚がどこか鈍いのか、あるいは歪んでしまったのか。

「それより、仕事は引き続きしつかり頼むよ。対魔忍の戦闘部隊の動きは押さえておかないと、魔界の環境破壊も御構い無しだからな」

「そこは抜かりなくやりますよ。アイツらが暴れたら草一本残らねえ。更地にするには便利ですがね」

ゆきかぜが実戦部隊に組み込まれかねない年齢に達しており、不知火の懸念を払うためにも、リヴァイスは情報屋であるゼキナにその辺りも探るようにはしてもらっていた。

しかし、話を聞いているだけでも、組織のやり方がパワープレイ一辺倒で搦め手に弱

そうなのは相変わらずのようだと分かる。力づくで何とか出来るのは頭領たるアサギの実力が隔絶した強さであるからであって、情報収集や下準備を軽視する風潮が強まっていることに不知火は密かに溜息をついた。

今の情報屋とのやり取りの中でも、不知火は幻影で顔つきを変えているし、またシーラと偽名を使うように言われていた。情報屋にしても依頼人であるリヴァイスの名を呼ぶことはなく、旦那の呼び方で通している。信用が出来る取引相手であっても互いに最低限、保険は掛けておくものだ。そういう用心は、対魔忍を含めて裏に近い稼業に関わる者には本来、必須と言われるはずなのだが……。

「ねえ、リイズ。私、本気で身の振りを考えたほうがいいのかしら……」

「そのまま戻ったら過労死待ったなしって感じがするよ、正直」

その後、宿に着いた二人は山と海の幸に舌鼓を打ち、部屋つきの源泉掛け流しである露天風呂に身を任せていた。会話の内容は情報屋のところへ出た対魔忍の組織そのものである。

「不知火のことがある前でもさ、傭兵とかの仕事でもあつさり罠にかかって捕まって騷けられてるのをよく見かけたしな。不知火みたいに意思も強くなくてすぐに壊れていたし、助ける気にもならなかった」

同じ組織の者達の末路に何も思わないということではない。ただ、確かな実力と慎重

さと多少の運、それを軽視した者としなかった者の差でもある。同情はすれど、リヴァイスの判断に異を唱える気にもならない。

「対魔忍の戦闘力の高さについて、俺のような魔の血が混じっていることが大きいって話したことがあるだろ？ 人によってその濃さは違うものの、その影響で基本的に頑強な人が多くて、奴隷として重宝するから逆に狙われやすいって」

彼の杯にお酌をして自分も返杯を受けながら、温泉で月見酒という風流な楽しみ方をしながらも、会話の内容はどうにも色が無い話をしている。とはいえ、二人の影は一部重なるほどに寄り添っており、不知火は彼の腕に自らの腕を絡めて身体を預けているし、時に互いの口を杯の代わりとしてそのままお互いの舌を絡めて吸い合ったりもしているのだから、しっかりと楽しんでもいた。ただ、急ぐ必要もなく、のんびりと会話と愛撫を織り交ぜながらの湯治と洒落込んでいる。

「魔族の支配階級ならば誰でも知っているってことも合わせて、聞かされた最初はすごくショックだったのよ？ 長い陵辱や身体改造に自分を保てたのも、私自身が魔族との混血だったお陰なのかもって……」

「あくまで一つの要因でしかないよ、代を重ねて随分と薄まっているだろうから。不知火が擦り切れそうになっても、家族への想いを失わなかったのは不知火の意思の強さがあってこそだ。少なくとも俺はそう思ってる」

「……ありがとう」

そして再び唇を重ね合い、不知火は徐々に身体の疼きが強まっていくのを自覚する。強制的なあの理性を焼き尽くす発情が近づいてきていた。

「不知火、随分と瞳が潤んできて……せつかくの温泉宿だ。自分が飛んでしまう前に……おいで」

「……ええ」

岩風呂の中にいるなど問題にならないほど既に膣内はしとどに濡れており、彼に股がる体勢となった不知火は割れ目に位置を合わせ腰を下ろすだけで、リヴァイスの逸物を滑らかに飲み込んでいく。

「は、ああああつ、んんんっ……!」

この数ヶ月で下腹部の内側はリヴァイスの形を完全に記憶し、彼をより受け入れやすくなるように子宮へと至る媚肉の柔らかさを増していた。結果、彼と繋がるのがより強い快楽を生み出す循環を生み出している。

あまりにスムーズに受け入れ過ぎたのか、子宮へと繋がる入口を自分で押し上げることになり、不知火の視界は早速真っ白に染まり、星々が瞬く錯覚を覚えることとなった。「やあ……リイズのおちゃんぽ挿れただけでイっちゃってるの……」

「ああ、最初からすごい締め付けだ。俺もとても気持ちいいよ、不知火」

「深い、深いのお……簡単に私、リイズのおちんぼ全部飲み込んでる……完全に覚えちゃってるの、この遅いおちんぼ、私のおまんこ完全に覚えちゃってるのよ……」

口元が緩み溢れそうになる唾液を啜るように、リヴァイスはまた不知火の唇を奪い、口内を舌でかき回す。懸命に不知火もその動きに応えるように自分の舌を彼の舌に絡ませていく。

もう随分と亡き夫の顔に霏がかかるようになってしまっている。ああ、なんて薄情な女だと自分を罵りつつも、自分が名実共にリヴァイスの女になっていつているのだという意識が芽生え、彼を悦ばせることが自分の悦びとなり、彼に従属することを強く望む自分がいることを不知火は否定も出来ず、どこかで肯定してしまっていた。

長年の調教により、身体は男に従属する悦びを完全に覚えてしまっており、娼婦や性奴隷としての振る舞いや技術も無意識下のレベルで染み付いている。自分の制御下に完全に置くことも出来ずに、強制的な発情の周期はやってきて、その度にリヴァイスに鎮めてもらおう始末。

心だけだ。自分が男の慰み者になるしかない惨めな存在ではなく、一人の母として、ゆきかぜを守るために戦うのだと叫び続けている。

でも、どこかで疲れ果てていた。一度、擦り切れかけた心だ。立て直しはしたが、深

い絶望は相変わらず自分に纏わりついてきている。お前の身体はもう性奴隷でしかない、それ以外の生き方など出来るわけも無いのだと。おまけに、自分には寄りかかれる存在が出来てしまっていた。不知火の個を尊重し、一人の女性として接してくれる魔族の男が。

自分の一番深い場所にある器官が日々訴えてかけてきていた。従属を誓い、この男の子種で孕ませてもらえばいいと。早く孕んで、完全にこの男のモノになってしまえば、もう孤独な戦いに心を傷つけなくてもいい。調教によつて植え付けられた男の精への飢餓感を、一人の逞しい男の存在で埋め尽くしてしまえと。その代わり、自らの全てでその男を愛し、尽くす。それは女の幸せの形の一つなはずだと。

「ねえ、リーズ……?」

「ん?」

ゆつたりと腰の動きは止めず、じんわりと染み渡るような悦楽の波に身をたゆたわせながら、不知火はとうとう自分から問いかけていた。

「……私達、周りから見れば夫婦に見えるのかしら」

「仲睦まじいって前置詞がついた上でね」

アサギには申し訳ない気持ちはあるが、そもそも不知火にとつての優先順位は夫が亡き今、第一に愛娘のゆきかぜ。ほぼ同列に近い第二にリヴァイスとなっている。対魔忍

に戻る利点が甚だ見えないのが正直なところだった。

幸せは小さく手に届く範囲で十分に満足できるのが、元来の不知火の性質だ。煌びやかな財宝や衣装も、豪勢な食事も、大きな屋敷もいらぬ。あり合わせのものでご飯を作る自分を密かに誇って、服が足りなければ縫えば良く、家に少しの庭があれば面白い。亡き夫もリヴァイスも日々の頑張りをしっかりと認めて褒めてくれる、そういう男である。

あなた……恨んでくれていいわ。私は、私は……狂気の淵から救い上げてくれて、私を慈しんでくれているこの男性と共に歩んでいきたい。その想いがもう、止められそうにないの。

不知火は瞳を閉じて、心の内で夫へと別れを告げる。娼婦として、性奴隷として扱われる未来として、リヴァイスは選べたはずだ。だがこの数ヶ月を経て、今の自分の扱いは妻または恋人、それ以外の何者でもない。

リヴァイスはそれでも強要はせず、不知火へ判断を委ねていた。身体の均衡、今後の方向性、心の向く先……彼女の中で整理がつくまで待ち、その結論を尊重する。それが不知火に対するリヴァイスの姿勢だった。

「二つだけ、聞かせて?」

「なに、不知火」

新しい夫と、眷属として魔族化し夫が好んでくれる今の外見を維持したままの自分と、愛しいゆきかぜと、彼との間に生まれる新たな子ども……そんな風景を夢想する。ゆきかぜにはいずれ独立して人間界で暮らすか、魔族化するか選んでもらう選択肢も取れるはずだと。

もちろん、ゆきかぜが亡き夫を忘れ、魔族の男に寄り添うことを認めてくれるかなど分かるはずも無い。それこそ、裏切り者として敵意を向けてくる可能性も十分にあった。それでも、不知火はもう止まらない。

「……私が望めばずっとリーズの傍においてくれる？」

「不知火、それは」

「ええ。ゆきかぜにどう言われるかは分からないけれど。私は貴方から、リーズからもう離れられない。離れたく、ないのよ。ずっと傍にいたい。……愛してしまつたのよ、リーズ、貴方を」

男は一度だけ目を伏せ、そして目を見開いた。覚悟を決めた、不知火が惹かれる強い瞳の色がそこにはある。

「不知火の気持ちには分かつた。俺もどこかでそれを強く望んでいたし、喜んで受け入れたい。ただ、平穏な生とは行かないぞ。それは承知の上？　今みたいな出来るだけ穏やかな生活を過ごさせてあげたいけど、そうもいかない事情もある」

「教えて。ただ、結論は変わらないけど」

繋がったまま彼から聞かされた、彼自身の抱える事情。確かに大変な驚きが伴うものではあったし、逆に彼自身の年不相応の実力について腑に落ちたところも大きい。あとは平穏な生活をずっと続けるのは難しいということも。

「こんな俺でも不知火は、本当に付いてきてくれるの？ もちろん全力で守るつもりだし、大事にする。俺の愛する妻になつてくれるんだから。ただ、不知火が望む平穏な生活を長くは過ごさせてあげられないだろうから……」

自分が日々の何気ない生活に幸せを探して喜べる性格であるのは見ていれば良く分かったからと。重たい事実不知火に戸惑いかけた心を、その一言が一気に洗い流して行く。

リーズは自分不知火をちゃんと見て理解しようと既に努めてくれていて——それは歓喜の福音。長き時を共に歩んで行くのに、自分をしっかりと見て心に寄り添ってくれる伴侶であるならば、妻として恐れることは何があるのか。一番必要なピースがそこにあるのだから、困難が襲い来るのなら、隣で支え抜けばいいだけの話だと。

孤独を拭い去ってくれた彼を、孤独にしてなるものか。彼から懇願されても、金輪際きっぱりと独りにはなれないと思ひ知つてもらう。

女として今一度覚悟が定まれば、心が一気に熱を持つ。力が満ちてくるように感じる。私とリーズの幸せを壊そうとする輩は永遠の幻影に閉じ込める。そして、彼以外の

者にこの身を二度と好きにさせてなるものか。そのために、私も力を、さらなる高みへと自分を鍛え抜いてやる――。

「分かったわ。眷属化してもらえば私も魔族になれるわけだし、子どもを産むのは急がなくてもいいわよね？」

「へ？」

なんて気の抜けた声を出すのか。ただ、それもやむを得ないかとも思い、不知火はそつと彼の頭を腕の中に包み抱く。覚悟を決めた女は愛する男が傍にいれば、どこまでもしなやかに強くなれる。そのことはこれから時間をかけて分かつて貰えばいいのだから。

「私、リーズの子供を産むもの。出来れば何人でも。人のままなら焦らないといけないかなと思っていたけれど、数百年単位で生きる魔族ならばその辺りは余裕が出来るものね。赤子を抱えてしまうと貴方の足手まといになってしまうから、しばらくはお預けになるのが残念だけど……まあ、煩い連中を黙らせないと、子供達の生活環境にも良くないから。まずは、強くなることに注力するわ」

そこまで考えるぐらいには、悩んでいたんだから。耳元に囁いた最後にそう告げれば、『ありがとう』と消え入りそうな声が届く。どこか愛に飢えていた頑張り屋の男の子を、まずは溺れさせるぐらいの勢いで愛するところから始めましょう――。

そう決めた不知火は、その後の交わりにおいても自分の意思で激しく乱れた。身体と心が同じ方向を向いた情交の多幸福感を味わうのは本当に久方ぶりであり……まして、魔族の強い身体に彼自身の能力を合わせれば、それこそ何度でも彼の精を子宮に浴びることが叶う。

露天風呂の中で湯に漬かったまま、立ち上がって岩風呂の縁に手をつけて後ろから、浴槽の傍のタイルの上で真正面から、幾度も幾度も不知火はレイズの愛を一身に受けた。受ける合間には必ず管に残る精を吸い出すお掃除奉仕を欠かさず行い、彼の一物が完全に硬さを取り戻すまでの短い間であるが、口で、胸で彼を楽しませる。

「愛してる、愛しているの、レイズっ、ああ、ずつと伝えたかった。もう我慢しなくても、何度でも言えるのっ、大好き、ずつと愛するの、レイズ！ 私は貴方を愛してるのおー！」

オーガズムの間際にも愛の言葉を口にし続ける。何度精を受け、どれだけ愛情を伝え続けたらどうか。夜闇の向こうから薄っすらと陽が登り始める頃、とうとう不知火の体力が尽き、気を半ば失うこととなった。

「レイズ……好き……愛してるのお……」

部屋に戻る前に身体を清められる間も、不知火はほとんど夢の中。その夢の中ですら愛を囁き続ける不知火に、レイズは照れ臭そうな笑みを浮かべながら、自分も愛していると、必ず不知火が望む幸せを手にしてみせると、眠りの中の彼女に告げ、同じ掛け布

団の中へと包まるのだった。

眷属化されど違和感はなく

「不知火、身体の調子とかは大丈夫？」

「ええ、問題ないわ。てつきり翼や犬歯が生えたりするのかと思っていたけど、傍目には特に変わっていないもの」

ほぼ夜明けまで盛り上がった二人は仮眠を取った後、部屋での朝食配膳の時間を最終梓にお願いし、再度目覚ましのための入浴を行った。切り替えはしつかり行える二人でもあり、朝食をしつかり頂いた後は食後のお茶を口にしながら、眷属化して数時間が経過した不知火の状態確認に入っている。

眷属化にはリヴァイスの牙を直接血管に刺して、放出される特殊な分泌液を一定量、不知火の体内に取り込ませる必要があったため、昨晚の営みの途中で吸血しながら繋がり、不知火の感度が一時的に跳ね上がってしまう局面があった。血を吸われることが気持ちいいと思わせるため、分泌液には快楽中枢を強く刺激する物質が含まれている副作用のせいである。

昨晚の記憶が一部曖昧なのはその吸血しながらの一回戦の間であったため、理性を吹き飛ばすほどの快楽を生み出すものであったのだ。即効性、短時間のみ有効な媚薬を打

ち込まれたのに等しい。

「首筋に痕は残っているから、ちゃんと眷属化出来たんだって安心してはいるのよ？
ただ、翼や犬歯のオンオフがすぐに上手くできるか分からなかったから、かえって良かったのかも」

「不知火は俺の力がある程度馴染んでいたから、反動があまり無い感じなのかな。ただ、違和感がないように良かったよ」

リヴァイスの体液というならば、確かに毎日飲み干していたようなものだ。上か下か、唾液か精液かの違いはあったが。親和性が高まり、自然な形で馴染んだのだろうと。「翼や牙の出し方や仕舞い方、あとは魔の気配を抑える方法は鍛錬のメニューに組み入れるとしてだ……気配については当面、水遁の幻影を使えるしね。実は不知火が正式に俺の眷属になったことで、便利なことが一つ出来るようになったんだ」

「便利なこと？」

『「こういうこと。俺は唇を全く動かしてないのに、俺の声、聞こえるだろう？」』

それはテレパシーや念話と呼ばれる類のものだ。特殊能力でも持つていない限り、主人と眷属のように確固たる繋がりが出ていないとそもそも受信できないもの。ただ、少しの練習ですぐに使えるようになる辺り、素養が出来てしまえば種族の基本能力に近いものようだった。

『確かに便利ね、これは。とても重宝しそう。ちなみに距離とかの制約はあるの?』

『世界を跨いだりすると、魔力の消費が大きくなるしノイズが混じるようになるけど、多少の距離なら問題はないよ』

『なるほど……あ、例えばこういうこともできるのかしら』

不知火は一つ思いついたことがあるのか、一度言葉を止め、何故かリイズの耳元に唇を寄せる。

『愛しているわ、リイズ』

二重音声で真つ直ぐな愛の言葉を贈られたリイズの頬は紅く染まり、思わず口元を手で覆うことになった。勝手に緩む口元を流石に見られたくはなかつたから。

『だあめ、リイズの嬉しそうな顔、ちゃんと私に見せてちょうだい』

想いを告げ、心身ともに結ばれたことにより、不知火の精神状態が一気に上向いたことで、今の彼女には年下の彼の反応を楽しむ程度の余裕が生まれていた。男女の機敏においては圧倒的に不知火の方が上であり、こうして手玉に取られるのも仕方のないことかもしれない。

「あんつ、もうつ、そんな怒らないのつ。でも、調子に乗ったのも本当だから、ちゃんと私はリイズのものだと躡けて……ね?」

胸をわしづかみにしながら、自分を押し倒してとうとう反撃に出た彼を不知火は喜ん

で受け入れ……散策を兼ねた反物探しの出発がさらに遅くなったのは言うまでもない。「パワフルだなあ、不知火は」

「ふふ、実際に身体の調子はいいのよ？　こんな風に二人で旅行に来て、街を一緒に歩けるだなんて思わなかったもの。元気な心に身体が引つ張られているのね、きつと」

そして、宿泊先のサーブिसでレンタル浴衣を借りた二人は、温泉街の中にある呉服屋に向かつて歩みを進めていた。昼食は宿に勧められた蕎麦屋で舌鼓を打ち、蕎麦の噉り方も堂に入っているリヴァイスに不知火がなぜか喜んでいたり、定食についていた互いの天ぷらを交換し合ったりと、旅行先での二人の時間を満喫している。

店の給仕をしていた年配の女性からは、新婚さんはいいわねと揶揄られたりもしたのだが、不知火が臆面もなく『最高の夫ですから』と返したことにより、ご馳走様ねと苦笑いと共に黒蜜をかけた葛切りをサーブिसしてもらった一幕もあった。

宿を出てからというもの、不知火の表情はころころと変わるものの、一貫して楽しくて仕方のないといった様子だった。陰りのない表情で微笑む不知火の笑顔は、結構な時間と共に過ごしているはずのリヴァイスがそれでも思わず見蕩れてしまうもの。この彼女の笑顔を引き出せたのなら、自分の選択は少なくとも間違いではなかったのだと信じられる。

「のんびりとした時間をこうして愛する貴方と過ごせる。私にとってはとても贅沢な時

間だわ」

「ん、こういう時間を長く続けていけるように、この休暇が終わったら俺もまた頑張らな
いとな」

「少し違うわよ、リイズ。『二人で』頑張るの。一人だけで頑張っても、いずれ無理が来
て疲れ果ててしまうわ。それでは意味が無いのよ?」

「そうだった。もう俺には、不知火がいてくれるんだよな」

履き慣れない下駄でどこかおぼつかない足元を二人で腕を取り合い寄り添うことで
支え合う。歩幅も普段より小さく、ゆったりとした早さで二人は呉服屋や御土産屋の店
巡りを楽しむのだった。

「反物とかも宿に届けてくれるのはありがたいわね。結構買っちゃったから、持って帰
るにはこの足元だとちよつと苦労したかも」

「茶葉もいいのがあったからね、思わず買い占めてしまったしなあ」

明日は調味料や米の買い付けに行くというのに、既に結構な荷物と化している。魔界
の奥地に居を構えているため、機会を逃すまいと自重を忘れた結果ではあるが、二人と
も伴侶の誓いを立てた翌日でどこか浮かれてしまっていたのは否めない。

そう、二人に関連のある人物の接近に気づいた頃には、見通しのいい通りで隠れる場
所も時間もなく、水遁による幻影で不知火の顔と声をリヴァイスの風貌に合わせて変え

て、シーラという偽名の再登板を決めるところまでが限界だったのだ。

「珍しいな、随分と気が緩んでいるようじゃないか」

浴衣の上からでも筋肉隆々とした肉体が見て取れる、男性の対魔忍、頭領アサギの腹心たる八津九郎……ではなく、その九郎隊副官の姿がそこにはあった。不知火は失踪前からの九郎の腹心である彼を見知っているし、リヴァイスはリヴァイスで別の接点を持つっていた。

「げっ、なんでアンタがここにいるんだよ」

「湯治だ、悪かったな。しっかしお前こそ女連れで温泉とか、お前は本当にあちら側なのか？ 行動パターンが完全におっさんのソレだぞ」

「アンタらには言われたくないよ、おじさん。ただ、過労死はしていないように何よりだ」

「隊長に隊員全員が強制的に休みを取らされてな。この後、最低でも一年は休みを取れる見通しが無いかららしいが、全くままならん。お前に依頼を出すことも増えるだろうさ。隊長がガチで引き抜きたいって嘆いてたぞ」

不知火は念話で、傭兵稼業の際に幾度か共闘する機会があつたのだと、九郎たちと顔見知りである背景を教えられた。元軍人で現実主義の九郎からすると、リヴァイスは魔族としての強さを過信せず、慎重かつ堅実な仕事をする、確実に計算出来る傭兵といっ

た評価であるようだ。魔の者であろうと無駄な殺戮を好むわけでもなく、下調べや情報収集を怠ることもなく、普段より仕事がり易いという隊全体からも好印象をもたれている。

魔界の奥地に住んでおり連絡が取りづらいのがたまにキズだが、日本文化にも明るくツマミも作れる器用さもあって、九郎隊と野営で酒を酌み交わしたこともある。外見では一番年下に見えることもあり、どこか息子を見るような目で見られている部分もあった。

「しっかし、別嬪さんだなあ、おい。歩いてくる様子も見ただけどよ、歩く早さからして息もびったりだし、楽しそうで何よりだぜ、けっ」

「だからさあ、いい加減引退しろって。こ人間界つちにはいられないけど、家族を引つくるめて隠遁先ぐらいい世話してやるって言っただろ？」

「それだと、俺らしか救われんじやないか。そういうわけにはいかないさ」

「知ってる。ただ、俺の気持ちは変わりないって言っただけだ」

「へっ、若造は自分の女の面倒をしっかり見てろってんだ」

九郎と共に仕事の経験があるとなれば、彼の話はアサギの耳にも入っているかもしれない。ただ、この気安さを思えば、九郎だけでなく九郎隊の皆がリーズを認めているのが伝わってくる。そのことが不知火にとっても嬉しく誇らしくすら思えた。

「ま、いずれ会うこともあるだろうよ。『誰か』さんが数ヶ月前にヨミハラで派手に暴れたみたいだが、残党どもがまだ蠢いてる話もある。復帰明け早々、激務続きの予感しかないのがなあ」

「……ふーん、大変だな。ただ、調子に乗れば、また誰かさんが暴れたりするんじゃないか?」

言葉の軽さとは裏腹に、リヴァイスの身からは怒気と殺意が表立ち、灰色の瞳はどす黒い暴の色を宿す。真正面で受ける形になった、歴戦の副官の額に冷たい汗が浮かぶが、横に並び立つ不知火は震えることも動じることもなく――。

「リイズ……一人で血に塗れるなんて許さないわよ。隣で支えると言ったのは、プライベートに限ったことじゃないのだから。ちゃんと分かってる?」

並んで歩く時のように自然と腕を絡ませて、空いた手をリヴァイスの頬に当てながら、まるで子供に言い聞かせるような柔らかな声色で、剥き出しの刃をそつと抱きしめるように不知火は言葉を紡ぐ。

「いや、だけど、これは俺の個人的な……」

「私は必ずもつと高みへと、さらなる強さを手に入れると、貴方の前で誓ったはずよ。だって貴方の敵は私の敵。そうでしょ?」

「あ、いや、それは……」

「そうなの、分かりなさい」

あ、これは面白い奴だ。副官は冷や汗を拭いながら、目の前の急展開に口角を上げる。殺意の波動などどこへやら、肝っ玉が大きい姉さん女房からすれば、夫の可愛い痲癩をあやすようなものなのか。どう見てもがちり尻に引かれているリヴァイスの姿は、隊の皆のいい肴になるだろう。

まして、戦場に共に立つと言い切る女だ。自然な振る舞いに見え隠れする形ではあるが無駄な気負いは無く、実のところ立ち振る舞いにも隙がない。リヴァイスの足を引つ張るどころか、二人で常にバディを組むとなれば、決して敵に回してはいけないと心が警鐘を鳴らす。これは仕事を頼んだ際に、自分達の任務がやりやすくなるという希望的な予断すら過ぎってしまうではないか。

「いやあ奥さんがしつかりこいつの手綱を握ってくれるとなると、俺達もより仕事が頼みやすいつてもんです」

「ええ、その辺りは抜かりなく。今後とも宜しくお願いしますわ」

あのどこかふてぶてしいとすら感じていたリヴァイスが妖艶な年上の妻に完全に手玉に取られている。これは最高のアテになりそうだと、副官は二人と別れたあと隊長を含めた隊の皆にすぐメッセージを飛ばすのであった……。

「うん、やっぱり身体の基本能力が向上しているみたい……」

「ああ、軽い手合わせでも動きが今までと違うのが分かるよ。突きや蹴りの鋭さがずいぶん増していると思う」

「これからは武器なしの戦い方も鍛錬に毎日組み入れたいわ。リーズ、付き合ってくれるかしら」

「もちろん。さて、夕食前に手早く汗を流してしまおうか」

思わぬ相手との再会の後、宿に戻った二人は短い鍛錬がてら、部屋風呂の湯船側にある石タイルの上で軽く打ち合いを行っていた。本来は滑りやすい場所であるが、水遁が使える二人にとっては普通の足場と相違ない。

といつても相手の指示に合わせて、上中下段、突きか蹴りを行い、相手もそれに合わせて捌く、型練習に似たようなもの。ただ、二人とも浴衣姿であったため、不知火が蹴りを行うたびに裾がはだけていき、最後の辺りには汗が滲んだシヨーツが見え隠れしてしまつて、変則的なストリップショー状態になつてしまつてはいたのだが。

汗で額に張り付いた髪をかきあげる仕草も、肌には赤みが刺している不知火の色香も相まつて、なんとも刺激的に映る。手合わせ中は二人とも意識のスイツチを切り替えて真摯に取り組んでいたため、特段意識をしないわけだが、終わつてしまえば見る側見られる側それぞれに思う感じるところはあるわけだ。

「ふふ、お背中流すわね？」

浴衣を脱ぎ、リヴァイスの浴衣も合わせて畳み、脱衣カゴに入れた不知火は肢体を隠すことなく、露天風呂と外を分ける仕切りの上部から差し込む夕日によりその身を照らしていた。

「……頼むよ」

どこか照れのある彼に対し、惜しげも無く身を晒す不知火。覚悟を決めて肝が据わった彼女にしてみれば、愛しい男に自分の肢体を隠す必要などない。石鹸を泡立てれば豊かな乳房を含めて自分の身体の前面に塗りたい、滑りが良くなつた肢体をリヴァイスの背中へと擦り付けていく。

「リイズ、痒いところがあれば言つてね？」

自分の身体を擦り付けながら、彼の髪を泡だてて両手で洗っていくという器用なことをしてみせる不知火。基本的に器用だよなと感心しながら、不知火の普段の手入れによる一定の張りを維持しつつも、授乳経験のある経産婦特有の双乳の柔らかさは、張りとは弾力で勝負する若い娘とはまた違う良さがある。年上女性を好む男にとってはものすごくたまらない熟れ頃のおっぱいであり、リヴァイスもその感触に感嘆の息を漏らしていた。

「うふふ、とても気持ち良いのね。私もやり甲斐があるわ」

リヴァイスの吐息の意味は勘違いして解釈した不知火だが、強制的なものではなく自

分の意思で男の世話をすること、奉仕することに彼女自身も確かな喜びを覚えている。元より世話焼きで情の深い性質の彼女が尽くすべき相手を見出し、真心を込めて尽くすことで相手が喜んでくれる、そのこと自体に自分も満たされるのだ。

「〜♪」

鼻歌を歌いながらリヴァイスの身体を清めていく不知火だが、自分の身体をタオル代わりにする必要は無いのは承知の上で。背中だけでなく前側も有無を言わず、身体を摺り合わせて行く彼女の胸の先端は既に隆起し硬くなっている。

身体はリヴァイスの雄々しさと逞しさに完全に陥落しており、無意識レベルで彼の性愛を求める行動を積極的に起こしているのだ。高級娼婦、男の奴隷としての習慣が染み付いてしまった後遺症であり、ある程度周期が安定し、毎回心行くまで犯し、もとい、満たしてもらえらることどころか楽しみにしている余裕が生まれているものの、襲いくる定期的な強制発情は無くなった訳でもない。

「一回だけな、不知火。夕食が食べられなくなってしまうからさ。あとで改めてゆっくりと……しよう?」

その理由が俺も我慢できなくなるから……なんて言われてしまえば、不知火はもう止まれない。自分の発情を鎮め切れる彼の寵愛を受け続けることが、心身の調和を図ることに繋がるのだ。一回で我慢してもらわない、リヴァイスの心ゆくまで自らの子

宮へと精液でマーキングしてもらうのが、むしろこちらも望むことでワインワインではないか。

「ご主人さまあ、心の赴くままに何度でもあなた専用娼婦のおまんこを逞しいおちんぼで貫いて、この雌奴隷の子宮へ大好物のザーメンミルクを好きなだけ注いでくださあい」

「だから、不知火、飯抜きはまずいって……って、ぐあつ、くそつ、まだ周期じゃないはずなのに、飛んでしまってるのか!？」

数ヶ月前とは違い、不知火は理性を完全に飛ばしてなどいない。されどその振りは容易いことであるし、口に行っている言葉は決して演技でもなく、真実味が込められていた。

夜の営みの時間、あるいは朝も昼も無く彼が私の身体を求めるときは、自分はリーズの専用娼婦であり彼の性奴隷であり、喜んでそうなりたい。出産経験もあるとうが立った身体を持つ、壊れかけていた精神状態の私をここまで引き上げて、変わらず愛し続けてくれる。

ならば、自分の忌むべき経験も関係なく全てを尽くして、彼を癒し、慈しみ、寄り添い支える。これほど身も心も満たしてくれる男性に出会うことはもう無いし、あつたとしてもこちらから願い下げ。とつくに彼専用になっているし、暮らしぶりや食事の嗜好までしつくりくるパートナーがそう簡単に見つかるはずもない。

「私が満足するまでえ、何度でも貫いてえ、濃いザーメンをあふれるほど注いでくれる逞しいご主人様あ！ それなのにキスもすぐく優しくてえ、料理も上手で一緒に作ってくれるしい、私の料理も美味しいって毎日褒めてくれるのお！ 好き、もう好き過ぎて、貴方専用なら娼婦でも奴隷でも幸せになっちゃうのよお！」

「うおい！ 意識あるだろ不知火！ ぐあ、まず、吸い取られっ」

「うふふつ、何百回と抱いてもらって弱点も分かってるんだからあ♪ ご主人様、ううん、リイズう……短い時間でも腰が砕けるほどの……濃厚な気持ちいいセックスを楽しみましよう、ね♪」

本当に嫌なら結合を無理やり解けるはずのリヴァイスに心の中で感謝しながら、不知火は夕食までの僅かな時間を心身ともに彼の熱を浴び続けて、非常に満たされるひと時として過ごしたのだった。

対価を払う者

「えらい大荷物になりましたね、旦那。荷台に荷物いっぱいにして小型トラックで帰ってくるから何事かと思いましたよ」

「いや、良い機会だから欲しい調味料とか米を全部補充したらこうなってしまうて……あはは」

温泉とショッピングの旅を終えて、キングダムまで大荷物と共に戻ってきていた二人は情報屋のゼキナに連絡し、再び戻ったことと荷物の運搬について相談を持ちかけている。

「半年か、もしくは一年も余裕でしょうな、この量だと。流石に旦那の使い魔を活用しても、抱えていくのはしんどいでしょう。二、三日頂きますが、大型のワイバーンを手配しましょう。旦那も一度乗ったことのあるやつです。トラックの処分もこつちでやりましょう。……で、次月の定期支払いにこれぐらい乗せて頂けますかね」

「しつかりしてるよな。でも、助かるよ。うん、上乘せで届けに行かせるから」

「へい、宜しくお願ひしますぜ。これからもご鼻屑に頼みます。定期で現金か貴金属できつちり払ってくれる旦那は本当にありがたいお客様でさあ。支払いを済ったあげく、

しまいにや鉛玉や火の玉をくれてやるって奴も多いもんで……」

「身体を厭ってくれよ、ゼキナ。質の高い情報を仕入れてくれるアンタのことは頼りにしてるんだからさ」

ゼキナは情報屋だけではなく、その伝手の広さを生かし便利屋的な仕事も行っている。命に関わるようなことであれば断ることもあれど、受けた仕事についての遂行率はリヴァイスが一定の信を置くほどの高さを持っている。

「そりゃあつしにも家族がいますからね、そうそう死ぬませんさ。あとはお伝えしたい情報の裏が取れたんで、一杯やりながらどうですかね？」

「買ってきた日本酒を一本開ける。あと、七輪を前に使ってそっちの事務所に預けてた。炭もまだ余ってたはずだ。干物はあるから、あとはキノコやネギはないか？」

「へへっ、旦那は話が分かるっ。すぐに準備しまさあ！」

リヴァイスが時折、急におじさんめいた行動を取ることにそろそろ慣れてきた感のある不知火である。路地裏で七輪を囲みながら、瓶ケースをひっくり返して座って呑む体験は初めてだったが、これはこれで面白いと思う程度の余裕が持っていた。

「こんな小さいフライパンも役に立つもんですなあ……」

「炭に油や水分が落ちないから煙も出ないしな。干物は網で焼くけど、ネギとかキノコ類はこっちの方が便利だったりする。まあ形に拘るよりはとにかく食べられるのが第

「だろ」

リヴァイスと不知火は交代で酒が入った紙コップ片手にトングを持って、焼けたつまみを各自の紙皿に分けていく。ゼキナはもっぱら飲み食い専任だが、がつつくことはなく、酒とツمامミをゆつたりと楽しんでた。

「旦那とお連れさん、なんだかわかりましたな。より自然な感じになったっていうか」「ん……これから長い付き合いになるが宜しくってことになったよ」

不知火は隣でリヴァイスの言葉に一つ頷くだけだ。ゼキナの問いかけに躊躇うことなく答えてくれることに心が温かくなる。それで幸せを感じるのだから、彼女にとって十分な言葉だった。

「それはようござんした。では、そんなお二人につかんだ内容をお渡ししましょう」

ゼキナから手渡された報告書。その内容は二人の次の動きを即座に決めるほどのものだった。リヴァイスが不知火を救出することになった、ヨミハラに潜む人身売買組織の再暗躍、そして――。

「……俺が潰した連中の残党が再び蠢いてることと、この対魔忍一族の名前。裏が取れたんだな」

「へい。ヨミハラでまた派手に始めているようです。新たな出資先を確保したようで。そこで旦那が警戒している対魔忍の名字を持つ者が働いていると……潜入任務という

線もありやすが、客からの聞き取り内容を見る限り、可能性は薄いかと」

不知火が声を発するのを押し止められたのは、リヴァイスの手が自分の手を強く握ってくれたからだ。なぜ、その組織の店で働くことになったのか。理由は分からずとも、最愛の娘が娼婦に身をやつしている……！

『ゆきかぜ、どうして……！』

『不知火、行こう。残党どもを潰す前に、まずは兎にも角にも娘さんをそこから連れ出す。対魔忍の任務であろうが関係ない。そうだよな？』

視界が暗転し思考がまとまらない中でも、ハッキリしているのはゆきかぜを自らが囚われていた組織から取り戻す。だからこそ、リヴァイスの言に迷わず首を縦に振っていた。

『リーズ、お願い。力を貸してっ』

『当たり前だ。不知火の娘だ、助ける以外の選択肢なんてあるか』

迷いのない強い気持ちで頭に直接伝わる。その力強さにどこか泣きそうになりながら、不知火は乱れていた心を強引に立て直す。支えるのだろう、寄りかかるために隣にいるわけではないのだからと。

『ありがとう、リーズ。それにゆきかぜだけじゃない。この子の名前までどうして……』

『まとめて助け出してから理由は聞けばいいさ。ただ、不知火の娘さん達がいるとなれ

ば、建物ごとぶつ潰す強攻策というわけにはいかない。辛いだろが、洗脳状態にあるかも含めて娘さんの状態確認からだ。すまないが、堪えてくれ」

不知火とて分かっている。苛烈で人の尊厳を奪い尽くす壮絶な調教は、容易くゆきかぜの理性を塗り潰し、自ら性奴隷であることを誓い、率先して組織の手先として動いている可能性を捨てるわけには行かないのだと。

『……ええ、そうね。その通りだわ』

念話を一度打ち切り、リヴァイスが短く瞑目し、眼を見開く。彼の正面に座るゼキナも隣に寄り添う不知火も、思わず身を正すほどの覇気が放たれていた。自分自身をしつかり持っていない者ならば、思わず頭を垂れてしまいそうになる。その覇気は繋がりを知る者ならば、彼の血縁上の父親をどこか想起させるものだった。

「ゼキナ、仕事を一つ追加だ」

「へい、承りやす」

「偽名でその店の予約をしてくれ。どこぞの魔族の放蕩息子が自分の娼婦と若き対魔忍達を抱き比べるために長時間貸し切りたい、とな。ああ、淫魔とのハーフという話は使つて構わない」

「若い盛りっ放しのガキ……そんな風に伝えてよろしいので？」

「目的のためなら、安い誇りなど邪魔でしかない。侮つてもらうなら、なおさら動きやす

い話じゃないか。資金はかかっても構わない。ただ、急いでくれ」

中肉中背の身体からは考えにくい、軽快な動きで立ち上がったゼキナはにかつと口角を上げて笑う。先程、垣間見た覇気はリヴァイスの身体からはもう霧散していたが、それなりに長い付き合いであるがゆえか、その指示に従い動くこと自体に利害以外の意義を感じ取っている部分がある。

「承知しました。少し外しますが、酒は残しておいてくださいよう。」

「ああ。つまみを焼きながら待っているさ」

普段は飄々としてどこか天然な若者といった風情であるが、『魔界の踊り子』や『血の君主』が後見となる男である。ただの魔族がその庇護を受けられるわけもないのだから。

「失礼するわね、貴女が水城不知火？ 私はメイア・ブラッドロード。リイズの姉みみたいなものよ。ゼキナから今日は此方に宿を取ったと聞いてね、寄らせてもらったわ」

「こうして会うのは初めてね。私はナディア。えつと、一応育ての親になるのかな。ごめんなさいね、大事な仕事の前とは聞いたのだけけど……」

そう、潜入の手配が整うまでの一兩日程度、キングダムに留まることになった二人の元に、その後見魔族達が突然訪ねてくる出来事が起こるぐらいには。

「リイズは……ああ、なるほど。自分の内側へと集中しているのね」

「不知火さんの世界で『メイソー』だったかしら？ あの子、前から日本の文化に妙に詳しいのよ」

客室に招き入れられた二人と不知火の先には座禅を組んだ格好のまま微動だにしないリーズの姿がある。不知火には夕食は不要と告げ、万全に力を引き出すために自分と向き合う作業をするが、明朝には戻るから周りのことは任せたと言い残し、既に数時間あの体勢のままである。

突然、客室を訪ねてきた女の二人組に、不知火はリーズをすぐに揺り起こそうとしたものの、ナディアの『リーズ、いるんでしよう？ 開けて〜』とどこか間延びした声に來客者を確認したところ、訪問者は彼の身内と言える二人だったのだ。

「あの子に本当に信じられているのね、貴女。なにかの術まで使って目と耳を殺して、完全に内側に集中しているわ。ひよっとしたら……触覚まで切っているわね、これは」

不知火の得意とする水遁の幻影陣、そのバリエーションの中の一つ。リヴァイスはそれを自分に使用し、一部の五感を遮断していた。その間、不知火が自分を守り、いざとなれば現実へすぐに連れ戻してくれる信頼があるからこそだ。

詫びの言葉と共にリヴァイスの肩にそっと触れたメイアは、彼の反応が全く返らないことに得心がいったとばかりに一つ小さく頷いてみせる。

「リーズは万全を期するための下準備だって、そう言っていたわ……」

「ねえ、不知火さん。ゼキナさんは目的は知らないって言っていたけど、レイズがここま
で集中するって相当のことよ？ 余程の難しい仕事か、あるいは絶対に失敗が許されな
い案件ぐらいのものだと思う」

「口惜しいけれど……不知火、貴女はレイズが選んだ眷属。長き時を共に歩むと決めた
存在。言いたいことや聞きたいことはたくさんあるけれど、それは後よ。今、重要な
はレイズと貴女は何をしようとしているのかということ。さあ、偽り無く答えなさい
？」

ナディアは疑問を呈し、年端も行かない容姿であるのに、何百年と『血の君主』とし
て君臨しているメИАの有無を言わさぬという魔力が目の前で膨れ上がっていく。

不知火はその力の強大さに身体が凍てつくような感覚を覚えながらも、同時に視界の
隅で動く存在を確認し、慌てることなく自然体を装うことが出来ていた。

「ちよつと、メИА？」

「ナディア、止めないで。貴女だつて気になつては……わぷつ」

「はい、そこまで。メИА姉さん、その物騒な魔力を抑えてくれよ？」

そう、瞑想を終えたリヴァイスが後ろから抱え込む形で、小柄なメИАを腕の中に包
んでいた。漏れ出る魔力を気に留めずに、メИАの黄金色の長い髪を手で梳いていく
と、あら不思議。手櫛が入るごとに魔力はみるみる小さくなっていき、メИАは自分か

ら振り返りリヴァアイスの胸に顔を埋めてされるがままになり始める。『ふわあ……』と
気の抜けた言葉や吐息が漏れ出しているし、メイアもメイアで自分から腕を回して抱き
ついているのはご愛嬌といったところだろうか。

「ただいま、不知火。それにナディア母……」

「ナディアって呼んでって、前に約束したはずよ?」

「長年の呼び方だからさ、なかなか抜けないんだよ。……ナディア、久しぶり。どうした
のさ、巡業の真つ最中だったはずじゃなかったっけ」

名前呼びを強要するあたり、ナディア側としては母親としての立場から既に変化を求
めているようで、ナディア達に対するリヴァアイスの目は節穴で情報屋の目の方が確かだ
ということのようだった。

「中止したのよ、リイズが不知火さんを眷属化したって聞いて。呑気に踊っていられな
いわ。リイズの結論は尊重するけど、ちゃんと直接理由を聞きたいって思ったから」

話に聞いてはいたが、実際にこうして高位魔族であるナディアや、年端も行かない容
姿であっても、何百年と血の君主として君臨しているメイア・ブラックロードに対して
砕けた話し方をしているリヴァイスを前にすると、家族として過ごしていたのは本当
だったのだという驚きが先に立つ。

「ああ、ちゃんと説明はするけどさ。ただ、明日大事なヤマが控えてるんだ。その後にし

てくれないか」

「あ、それなんだけど……私達も手伝っちゃダメ、かな？」

「え？」

「リイズが内に籠もるぐらいの案件なんでしょ？ だから……」

ナディアが意を決した様子で申し出た内容に、リヴァイスは不知火に一度目を向ける。首が縦に動くのを確認し、リヴァイスはナディアに説明を始めていく。腕の中でなぜか身悶えしていたメイアもピタリと動きが止まり——抱きついたままなのは変わらなかったが——リヴァイスの説明に耳を傾けていた。

「なるほど、不知火さんのお嬢さんとお友達を救出するために潜入するのね。自意識を保っていたらそのまま救出して、娼館ごと地ならしすると」

「保つていなくても意識を奪えるなら同じことね。連れ出してから考えればいいのだから。リイズ、お姉さんに任せておきなさいな」

物騒な発言を事も無げに口にするナディアに、リヴァイスの腕の中にすっぽり包まれたままでは威厳も何もないが、えらく得意げなメイア。鉄火場なら数え切れないほどに経験しているがゆえの余裕だった。

「しかし、客として行くのに付いてくるってどうするつもりなのさ、姉さん」

「そうね。ナディアのマネージャーみたいなのをする内に、男装は慣れっこになって

しまったのだけど……せつかくだから、幻影の対魔忍改め、『幻影の魔族』としての力を
見せてもらおうかしら？ それとリーズ、情報屋にお盛んな魔族の若者と専用娼婦の組
み合わせが二組で行く、と伝えて頂戴な？」

再会

「なんだか楽しいわ……こほん、楽しいな、こういうのも！」

不知火の水遁による幻影効果は他人の認識に干渉する。自分よりも絶対的な強者にはその限りでは無いが、リヴァイスの眷属化を経て、その効果の範囲も干渉レベルも数段上のものへと進化していた。さらに、不知火の力を取り込んでいるリヴァイスが術の補助に回っており、どちらかが気を失っても幻影は維持されるという寸法である。

「あれが今日、あの二人を貸し切るっていう魔族の若造達か……？」

「あんだけいいオンナ連れてケツを撫で回しながら、男同士でも胸や尻を撫で合っているやがる。やべえな、揃って両刀かよ……。あの金髪の男、普段はきつとオネエ言葉なんじゃねえか？」

その結果、潜入先の娼館の者達には男も女もどちらでもイケてしまうという男魔族二人組に映るようで、対応する職員からしてやけに腰が引けているような、臀部を無意識に守るような動きを見せている。

『すっごくカオスだなあ……アイツらが見えてる絵面を想像したくないぞ』

『同意するわ、リイズ。こちらに都合の良い幻想を見てもらってるけど、メイアさんが小

柄な男性に見えている分、変わった嗜好を持つている人達が喜びそうな状況に映っているわね……』

なお、四名の間では互いは普段の姿に見えている。とはいえ、幻影が監視カメラ等の機械類まで誤魔化しは出来ないため、メイアは男装の麗人となっているし、不知火とナディアは背中が大きく開きスリットが深く入った丈が短めのノースリーブワンピースにニーハイブーツという分かりやすい出で立ちにファー付きのコートを羽織っていた。

その上で、リヴァイスとメイアがそれぞれ不知火とナディアの腰に手を回し、メイアがりヴァイスの腕に絡む姿勢で歩いているのだが、幻想の影響を受けている周りの者から見ると、どうもあまり想像したくない絵に見えるようだ。メイアは口調を変えているが、普段どおりの言葉遣いが見え隠れしているため、周りの幻影による誤解はより顕著になってしまっている。

「こつ、こちらのVIPプレイルームにご注文の二人を待たせておりますつ。今から半日の貸切でございますので、ルームサービスなどは室内の内線電話で……」

「ああ、キッチンはあると聞いていますから、こちらで食材や調味料は持ち込んでいますよ。勝手にやらせてもらう」

ゼキナへの報酬も含めて、かなりの出費ではあったが、初訪問に関わらず別格の扱いである。また、ナディアやメイアが今回の一件に関わることで一緒に金銭面を負担して

くれたため、実のところそこまで懐に寒波が吹いていることは無い。ただ、この案件が片付き次第、手稼ぎに出なければと考えるぐらいには重たい出費ではあった。

ただ今はこの扉の向こうにいる、不知火に深く関係する二人を保護するために状態の確認をするのが最優先。リヴァイス達は扉を開けて部屋の中へと入っていく――。

「ご主人様あ、ようこそいらつしやいましたあ♪ 元対魔忍で今は雌豚奴隷娼婦のゆきかぜで〜す♪」

「お、同じく元対魔忍、奴隷娼婦の……あ、秋山凜子です。ほ、本日はよろしくお願い致します……」

部屋に入るや否や、目的の二人が対魔忍装束に身を包んだ姿で頭の後ろで両腕を組み、M字開脚の格好でリヴァイス達を出迎えた。ゆきかぜは完全に男に媚びる声色で瞳も潤んでおり、既に発情している様子だった。彼女の装束がレオタードタイプということもあり、局部の形がスーツ上からくつきり見て取れるほどに見事なM字開脚を披露している。

一方、凜子はいくらか正気を保っているのか、羞恥心に顔を赤くしながらの口上となっていた。本来の装束はボディスーツの彼女だが、局部にジッパーが付くように改造されており、そこを全開にした状態でのお出迎えを強要されていたため、局部を露出する格好を強いられている。

「……………うわぁ」

メイアが思わず声を漏らすのも無理は無い。……………これは酷い。まして、不知火の娘のゆきかぜは完全に洗脳まで完了しているのではないか。

だが、まずは部屋に監視カメラや盗聴器の類が無いか確認するのが先である。ある程度覚悟はしていたものの、少なからずショックを受けた不知火は迅速には動けない。その代わりではないが、ナディアが部屋の設備を見物するふりをしながら、シヨーツの中に潜めていた小型の検知器を作動させて、手早くチェックを終えていく。

「とりあえず、その格好のままこちらが良いというまで動くなよ？　しかし、まだ触られてもいけないのに、もうレオタードやボディスーツの上からでもこんな乳首尖らせて……………随分と身体を弄られてるのかな？」

「あふう♪」

「あぁん♪」

時間稼ぎを兼ねてメイアが身体の状態を確認するように、ゆきかぜと凜子の肩口や乳房に指を這わせれば、さらにだらしなく口元を緩ませながら、二人の唇から容易く嬌声がかぼれだす。

「ふーん、いろいろ設備も揃っているし、羨もちやんと出来てるみたい。これなら私達のご主人様を少しは満足させられるかもね」

ナディアがリヴァイスにしな垂れかかりながら、わざと軽薄そうな口調で吐き捨て、そのまま彼の耳元に唇を寄せた。

『大丈夫。VIPルームに仕掛けるほど愚かではないみたい』

ナディアの耳打ちに小さく息を吐きながら、リヴァイスは気付け代わりに不知火の肩を軽く叩いた。メリアにも頷いてみせて、本来の潜入目的を果たすために動き出す。

「呆けてる場合じゃないぞ、シーラ」

「ごめんなさい、リイズ。そうね、今は為すべきことを」

「ああ」

ゆきかぜと凜子は、身体改造についてはほぼ確実に、そして高確率で洗脳を受けている状態と推測される。まずは詳細の状態確認が第一だった。ゆえに、まだ不知火の無事は明かさずに、自分とナディアとメリアの幻影だけを解く。

「え、あれ？」

「男装した、女の子？」

「失礼ね、これでも数百年を生きている魔族よ。さて、体勢は崩していいわ。そして、スーツの貴女はファスナーを閉めて頂戴。その上で、とりあえずそちらのベッドにでも座りなさいな」

ゆきかぜと凜子が驚きから多少の理性を取り戻し、声に張りが戻るが、知らない相手

であればそんな感じで言われるのはいつものこと。ただし、メイアは普段ならば子供扱いされたことに怒りを上げ、二人の首を搔つ切りかねない短気な性質をしているのだが……。

「姉さん、ありがと。抑えてくれて」

リヴァイスが近くにいれば別の話である。彼の前では出来るお姉さんでいたいメイアは自分の気質を少しづつ制御できるように変わってきていた。

「ふふん、私もいつまでも短慮な女王などと呼ばれるのは心外だもの。私はリイズのお姉さんなんだから」

なお、リヴァイスに頭を撫でられて胸を張る様子がそのまま背伸びしている子供に見えるというのは言わぬが花である。

「シーラ、リイズが調べを進める間にハーブティーでも淹れましょ。せつかく持つてきたのだから。メイアはリイズのフォローをお願いね」

まだ動揺が残る不知火の手を引き、ナディアは仕切りで区画分けされたキッチンへと移動していく。そして、リヴァイスとメイアは改めて、ベッドに腰を下ろした二人の前に移動した。

「いろいろな戸惑いや驚きもあると思うけれど、まずは説明を聞いて欲しい。その後で質問は受け付けるよ、カメラや盗聴器の類が無いのは確認できているしね。それと、説明

を聞きながらでいいんだけど、二人とも俺の手を包むように持つてもらってもいいかな？」

困惑はあれど敵意も感じず、少なくとも半日間は彼の指示に従うように命令も受けている。火照り疼く身体に一つ息を吐いてから、ゆきかぜと凜子はリヴァイスの手を取っていく。

「ふわあ……なに、とつてもあつたかい？」

「これは魔力か？　しかし、こんな安らぐような力が……」

「魔力も術も使いようつてのが信条でね。絶対的な力が無い者にとつちや、試せることは何でも試さないと生き残れもしないから。この力については近くにいい見本がいたからね」

ナディアの力を取り込んでいる彼は、魔力を癒しの力に使うための素養が根付いている。ただ、ナディアのように踊りにその力を込めるのではなく、気功のイメージで使う方が馴染みやすかったのだ。昨日のうちに自らの内側に潜り、使える力を見つめ直す工程を経ていることで、より効果を齎すのも早い。

とはいえ、一緒に踊ってくれないのかと彼女の悲しそうな顔を一度見てしまつてからは、ペアで踊れる程度にはしつかり練習も続けてはいた。

「今は一時的に衝動を抑えるぐらいしか出来ないだろうけど、魔力を治療に転換できる

とこういうことも出来るって話。さて、そのまま聞いていてね」

自己紹介、そして同行者の紹介。ただし、不知火については偽名を告げ、自らの眷属であることを伝えていく。二人の表情が驚きの連続で豊かに変わっていくことに、リヴァイスはこれならば間に合うという手応えを感じていた。

この間、メイアも黙ったまま、二人の頭や肩など色んな箇所の手を当てては何かを探ろうとしている。血液を自在に操る異能を持つ彼女は、服の上からであっても、他者の血液の流れを診るのはそう難しいことではなかった。

「貴方が、そうか貴方が、アンダーエデンを単騎で崩壊に追い込んだという——リヴァイスⅡグレイ。魔界の踊り子と血の女王の薫陶を受けた、若き魔族の実力者……」

「ねえ、ねえ、貴方は！ 貴方はお母さんの居場所を知ってるんじゃないの!? アンダーエデンにお母さんが囚われている可能性が高いつて聞いてから、それが崩壊した後、お母さんは未だ行方不明のままだって——!」

「落ち着いて、水城さん」

「私を好きにしてくれていいから！ 肉体改造されて、男の人が近くに来ればすぐに発情しちゃう奴隷娼婦で、簡単に壊れなくなってるから、ねえ、何か知っていれば教え……あたっ！」

「落ち着いてって言ったよ？ はい、もう一度手を持って。まだ収まってるはずだ」

威力を弱めたデコピンで、身を思わず乗り出していたゆきかぜの動きが止まる。必死になった時の押し強さが何とも不知火そっくりで、やはり母娘なのだと、リヴァイスは柔らかな笑みを浮かべる。その朗らかな笑みに、ゆきかぜと凜子はそれぞれ、想い人あるいは倒錯した感情を抱く実弟、達郎の笑顔を想起してしまった。

「ああ……」

二人から一筋の涙がこぼれる。それは後悔の涙。そして――。

「辛い想いをしたね、よく頑張った。もう大丈夫だ、俺達が必要助け出す」

安堵の涙へと変わる。涙を流す自分達の頭を胸の内に包み込むこの魔族の青年は、今も優しい力を自分達へと注いでくれている。

「うわああああああああああああああああ、辛かった、辛かったのお!」

「あああああ、もう駄目だと、どこまでも堕ちるしかないよ、あああああ……!」

しばらく、二人はリヴァイスの胸を借りて、ただただ感情の高ぶるままに泣き続けた。その間も彼の力は二人の身体だけでなく、心に少しずつ力を与えていく。

「行方知れずのままのお母さんの消息をつかむために、残党達が再び娼館経営を始めた」と聞いて、この任務に志願して……でも、全然お母さんの行方は分からないまま、身体だけが作り変えられて、そしてどんな男に抱かれても気持ち良くなつて、すぐに何にも考えられなくなるようになつちやつて……。先輩まで巻き込んだのに、一日中おちんぼ

のことしか考えられなくなっていたのよお……!」

「ゆきかぜには平気だと言いながら、私も大差なくてな……犯されて、子宮にザーメンを注がれるためにどうすればいいのか、そんなことばかりを考える毎日になっていた……。ゆきかぜのことを心配する気持ちがどんどん薄れていつて……」

「そうしなければ心が完全に壊れてしまう。それは自分の心を最後の一线で守るためだ。ほら、今はこうして他の事をちゃんと考えられる。ちゃんと互いを思っている。だから、大丈夫だ。時間はかかっても君達はまた元に戻る。君達は家族みたいなものだろう?」

なぜだろう、疑いなく信じていいと思えて——。心が弱っていたから? 久方ぶりに欲しかった安らぎを感じる事が出来ているから?

「家族は俺にとっても抛り所だからさ。他の家族が崩れていくのを見るのは、いい気分じゃないんだよ。崩れるべき家族なら別だけどね」

ああ、人でなくても、この魔族の男性は家族が大切で、家族を守るためならきつと自分の手を躊躇無く汚す。伝わってくる、家族という形に対する熱が。自分達と同じように。だから、出会って間もないのに、言葉に嘘が無いって信じられる。涙で瞼を晴らしながらも、顔を上げた二人は本当に久し振りに自然に笑顔が戻っていた。

「リーズがアンダーエデンを一度崩壊させたのは、私に手を出したからよ。私自身の強

さへの過信や傲慢さを利用して囚われ、感度が跳ね上がる媚薬を打たれて——。そこに悪鬼羅刹の修羅と化したリイズが、私をギリギリで救い出してくれたのよ……」

メイアは語る。そこから狂いそうになる自分が彼に抱かれ、一人の女になったのだと。リイズは知る由も無いが、義姉としてではなく、メイアは彼の女としてこれからの時を歩むと決め、いずれ彼の子を産むと決めていた。

「うわー、お兄さんが急に鬼畜外道に見えてきたよ？　だって、ブラッドロードさんがお兄さんのモノを受け入れれるとなると……ないわー」

「ただ、ブラッドロード殿は既に一人の女性だった。容姿など関係なく、な。ふふ、人と違い、力のある魔族は複数の妻を持つのは別におかしいことではないと聞くしな」

幾分余裕が出てきたのか、二人の口調も普段の話し方に戻りつつある。この程度で勘気を被る男では無いと、相手を見る余力も出てきていた。

「俺はね、ある人の依頼を受けて、君達を連れ出すためにここに来た」
「もしかして、校長先生とか？」

「いや、ゆきかぜ。その線は薄いだろうさ。なんせ、接点が無い」
「紹介するよ。さあ、二人とも前を向いて、心をしっかりと持ち持てね？」

自分の位置を横へとずらし、リヴァイスはキッチンの方向を指し示す。ゆきかぜも凜子も自分の目を疑う。そこにいるのは紛れも無く、ずっと探し続けていた——。

「おかあ、さん?」

「不知火さん、なのか?」

ティーポットとカップが載ったトレイをナディアに預けて、幻影の効果を解いた不知火はゆつくりと二人の前へと歩み寄ってくる。既に瞳には涙があふれ、頬に一筋の線が出来ていたが、それでも不知火は微笑んでいた。

「ただいま、ゆきかぜ、凜子ちゃん。辛い思いをさせて、本当にごめんなさい」

真正面から数年分の想いを込めて、ぎゅうつと強く二人を抱き締める。その抱擁を行つた不知火は震えていた。もう一度、こうして愛する娘と娘のように可愛がつてきた子を抱き締められるとは、一年前にはもう諦めかけていた瞬間だ。

「お母さん、本当にお母さん、なの?」

「ええ、ゆきかぜ。五年も帰れなくて、ごめんね。お母さん、囚われてる間もずっとお父さんと貴女のことだけは忘れなかった。ああ、本当に大きくなって、もう立派な女の子ね……」

「不知火さん、無事だったの、ですか……!」

「アンダーエデンへの襲撃の際にリーズに救われて、でも、捕まっていた数年の間に負つた後遺症が酷くて、日常生活がある程度問題なく送れるようになったのが、つい最近だったの……。ありがとう、ずっとゆきかぜの力になってくれたのね」

「いえ、私は、私は貴女が無事で十分で、あああ……」

「お母さん、お母さん、ずっと、ずっと会いたかった！ お母さんっ！」

母と娘たちの抱擁はしばらくの間続き、リーズとナディア、メイアはハーブティーで喉を潤した後、キツチンへと入って行き、再会の時間を少しでも噛み締められるようにと気を回すのだった。

「それでね、訓練中にその子が……ん、あれ？ なんだかいい匂い？」

ゆきかぜと凜子が過ごした五年間の話は尽きない。やっと会えた不知火は柔らかかな微笑を浮かべたまま、ゆきかぜの話に耳を傾け相槌を打ち、その様子を隣で見ている凜子も想いが報われた喜びに満ちていた。

ただ、一時的にであれ身体の発情が落ち着き、精神状態が落ち着けば……鼻をくすぐる美味しそうな匂いに、久し振りに感じる空腹感。そう、食欲が戻ってきていたのだ。

「うむ、グレイ殿達の気配が薄くなったのはこちらへ気を使ってくれたのだろうが、なんともこれは……うむ、お腹にくるな」

「お、話もひと段落したかな？ ちょうど出来上がったよ、飯食いながら話の続きといかないか？」

キツチンから顔を見せるリヴァイス達。その手には魚の味噌煮、野菜炒めなどの大皿料理やら汁物が入ったお鍋、そしてガラスボールに入った炊きたての白米などがある。

「相変わらずの手際よね。私はお米研いで、あとは殆ど見てるだけだったもの」

「私も火の加減を見ているのが殆どだったわ。電子レンジでご飯が炊けるなんて知らなかったもの。あと、温泉卵まで出来るなんてね」

最低でも三十分以上、可能なら一時間ほど水に漬ければ炊くのは炊飯器よりも早し、十分美味しく出来る。その辺りのノウハウを教えたのは不知火だが、しっかりと生かす教え子に思わず嬉しくなってしまう。

「炊飯器が無くてもお米は食べたいからさ。不知火、お椀とか取皿、箸などを頼むよ。あと、小皿用に白和えも作ったんだけど、分けるところまではいってないんだ」

「分かったわ、リイズ。ゆきかぜ、凜子ちゃんも手伝ってちょうだいな」

リヴァイスと不知火の距離感が異様に近い気がする、今更ながら違和感を抱くゆきかぜや凜子であったが、通常の思考が戻って間もないこともあり、まずは目の前の料理に舌鼓を打つことにするのであった。

即墮ちくつコロの見本とは

「あ、んんっ、やだ、これ美味しい！ お母さんの味つけそっくり！」

「俺の和食の先生は不知火だからね、優秀な先生だもの。あと、味つけも俺好みだったから、そのまま覚えるようにしたんだ」

「ふふ、教え甲斐のある生徒さんだもの。今度は二人で作りましたよ。ゆきかぜにどちらが作ったのか当ててもらおうのもいいかもね？」

調子が戻ってきたゆきかぜがどこか艶混じりの感嘆したような声を上げれば、リヴァイスが不知火を持ち上げ、不知火も軽口で返す余裕を取り戻している。

「くっ、これはっ！ しかし負けるわけには、でも美味しいと認めるしか……くう、これは女として危機感を覚えてしまうな……」

「私は諦めたクチね。そのかわり、私が経済面を担えば問題ないと割り切ることにしたわ」

「お味噌汁慣れると毎日飲みたくなる……巡業出るのがやめようかなあ。里芋の煮っころがし美味しい……」

一方、真剣に唸る凜子に白旗を既にかけているメイア。そして、少しはズレた感覚の

ナディアである。ちなみに、魔界の娯楽が一つなくなるかならないかの瀬戸際にあることに気づく者は不幸なことにこの場にはいなかった。

なお、料理の基礎はナディアがリヴァイスに教えた内容であり、巡業の多さからキッチンに立つ回数が増えているだけで、元々彼女は出来る側の女性である。

「ふーっ、食べた食べたあ！ っ馳走さまあ！」

「っ馳走さまです。いや、つついっ食べ過ぎてしまったか」

元々運動量の多いゆきかぜに、厳しい自己鍛錬が常の凜子である。大皿料理も順調に消化していき、しつかり食べるリヴァイスと合わせてお残しもなくテーブルの上の料理は片付いていた。

「おまけに食後のお茶が緑茶か焙じ茶って、ほんとに 그레이さんって魔族なの……？」

「ほら、尻尾や角も出るよ。普段は引っ込めてるけど」

「自宅でのリイズは作務衣や甚平を着てることも多いのよ？」

「髪色が黒だったら日本人と言われても普通に信じてしまうかもしれない……」

「日本かぶれなの否定できないかな。温泉とか大好きだし。えっと、これでどうかな？」

「幻影陣の何という無駄使い！ でも、これはハーフっぽい感じかも」

「髪色だけ変えるとか器用なのだな、 그레이殿は」

はてさて落ち着いてくれば、母親と再会させてくれた恩人の関係がどうにもキナ臭い。母のこの五年間もかいつまんで聞いたが、自分も経験した凌辱生活を数年間も受けて、さらに父の死を知らされ、絶望と共に半ば魔の手先へと堕ちかけていた。そのギリギリで救い出した、母にとつての恩人がリヴァイスである。

食事の途中だつてそうだ。声も掛け合っていないのに目を合わせるだけで、醤油や小皿などをすつと差し出したり、それもどちらかが一方じゃなくて、両方ともそれが出来ている。そのお礼の伝え方にしたつて短い言葉や目配せになつていて、受ける方も笑みを浮かべるような感じのために、普段からこの二人はこんなやり取りをしているのが分かつてしまう。さらに、軽口を叩き合つたりもしているのに相手を落とすような発言は一つもなく、互いを尊重しているのが傍から見ても伝わってくるのだ。

あの母の目は、父に向けていた目と一緒だ。いや、その目に強く熱が上乘せされているのが正しい——ゆきかぜだからこそ、実の娘だからこそ悟つてしまう。母は、あの若き魔族に強く惹かれている。そして、相手も恐らくは同じような感情を持っているのだと。

ゆきかぜからすれば複雑なものだ。父を失つた母は確かに新たな男を見つけてもおかしくないし、あの凄惨な凌辱の日々が数年間も続いていたことを思えば、そこから掬い上げ、日常生活を送れるまでに支えとなつたりリヴァイスに敬愛を抱くこともあり得る

だろう。だけど、納得が行くかは別の話で。

今だって髪色を変えるために写し取られた幻影陣を彼が使用しても、母が顔色一つ変えないし、どこか表情の奥で喜んでる節すら感じられるのだ。ゆきかぜは理屈じやない苛立ちや危機感を覚えて、それがどうにも押さえられなくなりつつあった。

「あ、ぐっ、はあ……はあ……」

結果、強い感情に引き摺られるようにあの発情が帰ってくる。

全てを性欲で塗り潰す、男のペニスが、ザーメンが欲しい、それしか考えられなくなる、身体と脳に刻み込まれた奴隷娼婦としてのゆきかぜに引き戻されていく。

不知火と同様、脳幹に取り付けられた、性的調教に否定的な感情を抱けば頭を抱えて暴れてしまうほどの激痛が走るチップの影響で、ゆきかぜの思考はいかに男の性器に貫かれるために、自分を正当化するか、歪んだものに捻じ曲げられていた。

リヴァイスはメイアの血流スキヤンの結果、ゆきかぜや凜子の脳幹付近に血液の流れが激む腫瘍らしき反応があると調理中に報告を受けており、腫瘍の正体に検討をつけている。だが、無効化するにも摘出するにも、この場から救出し当面の安全を確保してからだと、自分に言い聞かせていたのだが……。

「ゆきかぜ？」

「これは……！」

「どうやら衝動が戻ってきてしまったようね、これは」

母の心配そうな声も、凜子の声が一気に厳しさを増したのも、メイアの指摘も内なる衝動にかき消されて、何を言っているのか分からない。ただそれでも、リヴァイスへの八つ当たりには似た怒りは消えたわけではなく、脳が沸き立ったゆきかぜは浅はかな選択肢を選んでしまう。

「しよ、しよ……」

「醤油？」

「ちつがーうっ！ ボケて欲しいわけじゃないわよ！ 勝負よ、私をこれから抱きなさいー！」

突然荒れ出して突拍子も無いことを言い出すゆきかぜに、皆が制止をするがそんなもので彼女が止まるわけも無く、一気にリヴァイスへと詰め寄っていく。

「なぜ、水城さんを抱くことが勝負になるのさ」

「私の身体に溺れたらアンタの負け！ 私がアンタに屈服したらアンタの勝ち！ 負けたらお母さんを返してもらおうわ！ もしアンタが勝ったら、私はアンタの女なり眷属なり好きなように扱えばいい！ ここから脱出する手助けをしてくれることには感謝するけど、お母さんのことは別よっ!!!」

勝負に勝とうが負けようが男のチンポに犯してもらえることに変わりはない。そん

な昏い悦びにゆきかぜは舌なめずりすらしてみせるのだった。理屈が半ば破綻している、そんな不合理にも気づけない。それが彼女の洗脳が進んでしまっている証明にもなってしまうている。

「ゆきかぜ！」

「どうしたの凜子先輩、私は今の本分を思い出しただけだよ。私達は奴隷娼婦なんだから。魔族の男一人、満足させるなんてワケないでしょ？」

ぐにゆん、きゅつ。なぜ、自分の味方であるはずの凜子が裏切るような発言をするのか。許せない、そんな感情から、ゆきかぜは言うが早いか凜子のおっぱいをおもむろにつかみ、さらにツンと尖っている乳首をつまみ捻り上げる。

「ひゃつ、あああああんんんっ！」

「ほら、こんなに凜子先輩ももう敏感になってる。食欲が満たされたら、次は性欲だよね？」

突如齎された軽いアクメにゆきかぜの匂い立つような淫臭に当てられ、凜子は腰が砕けてその場に座り込んでしまう。

「どうせ弱ったお母さんに優しくして、強く否定できない状態なのをいいことに付け込んだんでしょ？ でも私はそうはいかない。骨抜きにしてあげるんだからっ！ 凜子先輩、一緒にこの男を吸い尽くしてやりましょう？」

「ゆきかぜっ!」

「大丈夫だよお母さん。私達はまた一緒に暮らせる。あとは任せておいてよ、あははっ!」

性格が入れ替わり豹変したかの態度を見せるゆきかぜに、悲痛な声を上げてしまう不知火に、急激に呼び戻された衝動を強く自身を抱き締めることで堪える凜子。その前に表情を無に変えたリヴァイスが立つ。

「俺を憎むのは勝手だ。君にはその権利もある。が、大切な人を穢すようなことはするなよ。自分が惨めになるだけだ」

次の瞬間、ゆきかぜは荒縄でぐるぐる巻きになった格好でボールギャグをかまされたあげく、床に投げ出されている自分を認識する羽目になった。

「ん、むぐう!」

こんな早さでこちらを拘束など出来るはずが無く、幻影陣の効果だと察するものの、今の自分は海老のように床で跳ねることしかできない。ならば、いつそ――。

「二つ言っておくけど、雷遁の術とかで縄を焼き切ろうとすると、身体全体に電流が流れて発動を阻害するからね。大人しくすることだ」

「ふぐうううう!」

容易な選択肢は自らの醜態を晒す結果となる。全身発情状態となっているゆきかぜ

にとつて、程よい電流の刺激は全身をくまなく愛撫されるのに等しい。

チヨロ、チヨロ……。躡けられた身体は望んでもいないのに、失禁アクメをしつかり決めてしまうのだった。

「不知火。まずは秋山さんが先だ。いいね」

「……はい、リヴァイス様」

娘が全身を細かく震わせて無残な姿を晒している。幻影の影響下にあるだけで、ゆきかぜは実際には拘束などされていなくても、ぐるぐる巻きになったあげく、口枷をされていると認識していると分かるには容易なことだった。自分とてそういう忌々しい思いの経験者だ。経験があるからこそ、ゆきかぜもリヴァイスの拘束を想起させる幻影にあれだけ見事にハマってしまっている。

そして自分も新たな主の命には逆らえない。いや、逆らう気が起こらないのだ。返事すら自然に畏まったものへと変わる。彼に命令されること自体が、不知火の甘い疼きすら呼び起こす。さらに言うならば、自分の主は理不尽な命を下す男ではないという強い信頼もある。

『不知火はそのまま、娘さんのフォローをしてやってくれ。それと……俺は今から不知火の娘とその大切な友人を抱く。こうなってしまうえば、子宮に精を浴びないと収まらないはずだ。恨んでくれてもいいよ、すまない、不知火』

指示の直後に伝わる念話の声は苦渋の色が滲み出ていた。ああ、リーズはやはり自分を捧げるに値する愛しい主、愛する男だと不知火は再認識する。覚悟をしていても、娘の変貌ぶりに動揺を隠せない自分を叱ることなく、こうして氣遣つてくれる主がどこにいるものか。まして、眷属として繋がりが出来たからこそ、彼の言葉と心情に嘘偽りが無いことが念話から伝わつてきて、不知火は自分の迷いを振り払らんと左右に首を振る。

自分を救出するためという理由はあれど、この纏の任務に志願した時点で娘たちなりの覚悟を決めていたはずだ。親として辛い目に遭つてゐる姿を見せつけられるのは予想できていたことではないか。

すっかりしなさい、不知火！　いつまでリーズの重荷になるつもりなの！

自らを心の中で強く叱咤激励しながら、不知火は力強く想いを込めて、返事を返す。眷属でありながら殆ど眷属扱いをせず、パートナーとして接してくれる親愛なる主へ。『恨むなどあり得ないわ、リーズ。ゆきかぜも含めて、軽率な判断であれ彼女達が選んだ任務よ。リーズ、貴方が気に病み過ぎる必要は無いし、それに』

——貴方ならば、セックスは本来、憂いなく心と身体も氣持ち良くなれる、素敵なひと時なのだと感じさせてあげられるでしょう？

愛する男を後押ししてみせた不知火は信じている。私の主は自分にとって最高の男

であり、かつ、まだまだ発展途上でこれからも自分をさらに魅了し、また多くの女性を虜にして止まないだろうと。

狭量な女になるつもりはなく、また変な男に捕まるぐらいならという母としての計算もある。どうにも直情型のまま育ってしまった娘に、武人として全てに正々堂々を貫くあまりに搦め手に脆すぎる娘に等しい存在。達郎が理想通りに育っていれば娘を任せられる可能性はあつたが、いま娘がこうして娼婦に身を落としているということは、今の達郎の現状を示してもいた。

『ただ、貴方の正妻の座はナディアさんであろうとメイアさんであろうと、譲るつもりは一切ありませんからね』

『うん、これからも俺を夢中にさせてね、不知火』

こんな嬉しい言葉をかけてくれるのだ、女冥利に尽きるではないか。気を入れ直した不知火は簀巻き状態と思い込まされているゆきかぜを助け起こし、それでも幻影は解くことなく、彼女の粗相の始末を優しく行うのだった。

「お母さん、どうしてよ……!」

「いい加減になさい、ゆきかぜ。人であろうと魔であろうと、貴女を助けようと手を伸ばした相手に、貴女は唾を吐きかけるような行動をしたの。私がリーズの女であるのかどうか、それとは全く違う話よ」

それは対魔忍、不知火としての顔だった。今まで憧れ続けている母であり先達としての彼女。

「ゆきかぜが今のような矛盾だらけの行動に出るのも、感覚的に理解は出来るのよ。身体の内を走り回る、狂おしいほどの性衝動に身をただ焼かれるのではなく、うまく乗りこなし手綱を取れなければ、本当に奴隷娼婦に身を墮とすだけ。一度覚悟を決めたのなら、自分を容易く見失つてはならない。……私も未だに難しく向き合い続けているけれど、一つはつきりしているのは、自分が自分であるための何かをしつかり持つて、そのことを決して忘れないこと——」

「お母さんにとって、それは何なの？」

身を焼く衝動は消えない。それでも実の母に教えを請えるまたとない機会をゆきかぜは必死につかもうと足掻く。

「あなたよ、ゆきかぜ。リーズに救い出されるあの時まで、壊れかけてもまだ私が私でいられたのは、あなたの存在があったからよ」

そして、ゆきかぜは母の腕の中でまた、歡喜の涙を流す。一方、凜子にも救いの手は差し伸べられつつあった。

「水城さんはしばらく不知火に任せておけばいいが……秋山さんはそろそろ限界だろう。怒っても恨んでもいい、ただ、それでも俺は君を抱くよ」

「あ、ああ、すまない、もう、もう耐えられそうに、ない」

思考すらままならないほど、既に全身が性感帯のように過敏になっていく凜子をリヴァイスは静かに丁寧に抱き上げる。その所作の丁寧さに凜子は思わず熱い吐息を吐いた。

「あ、ふう、ふう……ふふつ、こんな風に扱われるなど、初めてかも、しれん。グレイ殿、貴方は本当に紳士なのだな」

「内側には獣を買っているけどね。さて、抱く間は呼び方を変えるから、そのつもりで」
「あ、ああ、本当だあ、もうケモノの目つきだあ……♪ その獣欲を普段は内に鎮めていくのだな♪」

それなのに手つきは優しく、ベッドへの横たえ方も自分への配慮が感じられて、まるで自分が今から男娼を相手取るような錯覚に駆られる。

「さて、凜子。今だけはお前の望むように抱いてやれる。どんな風に抱かれない？」

「私の、望み？」

「俺が考える本物のセックスってさ、やり方はいろいろあっても、互いにもものすごく気持ち良くて幸せな気持ちで心も身体も蕩けて、その後にくっくると熱の余韻が覚めた後に疲労感の中にも活力が湧いてくる、そういうものだと思ってる。実際にそういう経験もありたいことにさせてもらってきた」

「分からない、今は考えがもうまとまらない、んだ……ただ、つらくて」

「分かった、ではまず俺のやり方で始めてみよう。ただ、もしやり方が受け付けなれないと思えば『劇の終わり』と伝えてくれ。それが制止のキーワードだよ」

本来はSMプレイなどに互いに役に入り込んでしまつて、本気で止めて欲しい時の意思を伝えられないのを防ぐため、取り決めをするのだとリヴァイスは口にする。

彼が隣に身を横たえながら、膝までほどの長い髪を丁寧な手で梳く仕草を繰り返すだけで、全身が性感帯に近い凜子は軽いオルガズムの波に包まれていた。

「分かったあ、ああ、髪優しく撫でられるだけで、私もうアクメ頂いてしまつてるぅ」
奴隷娼婦として徹底的に仕込まれた躰が、勝手に凜子の口から既に絶頂の波に襲われていることを告げる。続けて口づけの雨が、髪に、額に、頬に、首に、肩に、背中に、腕に、足に降り注いでいく。

「ひゃあ、あああ、宝物みたいに扱ってもらつてるぅ、キスの雨でメスイキ止まらないのおお……！　しよ、しよれに、指と指を絡め合つて、手を繋いでるぅ、これえ、これえ！」

「今だけは凜子は俺の恋人だ。嫌なら振り払えばいいからな？」

恋人繋ぎで一方の手を重ね合い、もう一方の手や指で触れるか触れないかぐらいの柔らかな刺激を胸や臀部、下腹部以外に与えられながら、耳元で囁く熱のこもった声。

「ううん、いまは、今だけはあなたがわたしの恋人だあ♪　こんなあ、こんな優しい触れ方が、あなたの愛し方なんだあ♪」

軽めとはいえ波が引かないオーガズムの連続にも少し慣れが出て、たどたどしいながらも思いを口にする凜子は、自分からリヴァイスの唇を奪い、激しく舌を差し入れていく。

もつと、もつと私の身体と心に、あなたの愛し方を教えてくれ——。

調教や肉体改造、性衝動や性的刺激を全肯定するように意識変革の洗脳により、無意識に男性を欲するように書き換えられた凜子ではあるが、生理的な嫌悪感が打ち消されたわけではなかった。自分を商品や娼婦の器としてしか見ず、凜子という個に対しては上書きして自分たちの都合のいい人格を植え付けようとしかしていない。自分を消し去ろうということに躍起な連中への嫌悪や憎悪が全て悦楽への衝動で塗り潰され、彼らにとって都合のいい娼婦として完成するには、この生活をまだ当分続ける必要があっただろう。

弱っている心に染み入る蟲毒のようなものと、凜子とて感じている。それでも、今
は目の前の男の優しさにすがり、溺れたかった。

「はむう、じゆる、ぶちゆ、じゆ、あむ……んんっ、べろ、んうっ」

リヴァイスは決して、超絶的な技巧を持っているわけではない。ただ、結果として、高

級娼婦として完成していた不知火に日々鍛えられることにより、女性の弱点やして欲しいことを探るための感受性に対して、徹底的に磨き上げられている。そして、超絶的なものではないだけで、彼は女性を愛する技術としても高いレベルを得るに至っていた。

まして、毎日不知火と身体を重ねる日々は今も続いている。その度に、不知火はリヴァイスをさらにいい男として磨き上げるべく夜の教導を行っているのだ。

「はあ、はあ……私のキスの味はお気に召しただろうか？」

「うん、凜子の熱を感じられて、とても心地良い。だから、もう一度……」

空いた腕をリヴァイスの首に回して、もう一方の手は指を絡め合ったまま、自分から再度凜子はキスを求めていく。口内のポイントを押さえられてしまったからか、不定期にベッドに伸ばしたままの両足をピンと硬直させ、指を丸めながら、オーガズムの波に勢い良く飲まれているものの、喜んで受け入れている自分がいる。

鼻だけでは必要な空気を取り込み切れずに、時折、唇を離して荒い息を吐いても、熱のこもった瞳が自分を真っ直ぐに見てくれている。娼婦としてではなく、凜子そのものを求めている。そう思えてしまえば女の最奥が蠢き、一刻も早い挿入を待ち望むようにすとんつ、と降りてきてしまう。

「凜子？」

彼とて燃え滾るような欲望の熱が内側で唸りを上げているだろうに、掛けられる声は

気遣いに満ちていて。

「大丈夫、大丈夫だから、でもお、切ない、切ないんだあ……」

自分から下腹部へ直結するファスナーを下ろして、女陰ごと指で押し開く。こぷりと、粘り気の強い分泌液が溢れ出た。

「どうしたらいい、凜子？ 教えて、俺に」

「口づけしながら、口づけしながら貫いてくれ……あなたの熱を中でも感じたいし、キスもまだ足りないんだ……」

望みがあふれ出るように言葉として紡がれる。リヴァイスは微笑みながら頷いて、分かかったと応えるのだった。

「愛するよ、凜子。お前だけを今は、見てる」

唇が重なり、そして、ズボンから取り出された剛直が少しずつ凜子の中へと埋め込まれていく。

「ふ、ふぐうううううっ!？」

愛されている。刹那のひと時であろうと、目の前の男が全力で自分を愛そうとしてくれている。まだ先端を受け入れただけなのに、全身は激しく痙攣し、頭は白い稲光が瞬き続けて、もうマトモな思考すら出来ない。思わず、唇を離すものの、息継ぎすらままならない。

「凜子、息を整えて。ゆっくりと吸って、そう、またゆっくりと吐いて……身体が過敏になり過ぎているんだ。だから、自分の身体を少し落ち着けてあげよう。求めるものももう君の内側で脈打っているだろう？ 焦らなくていいんだ。大丈夫、俺はどこにも行かないから」

癒しの魔力が温かさとなって、凜子の身体を包み込んでいく。その力を借りて何とか脱力を果たし息を整えるその間に、少しずつ進んでくる脈打つ男の熱を感じ取り、肉壁は懸命にメスの本気汁を吹き掛け、締め付けと絡みつきを休むことなく行つて、逃してなるものかと必死に蠢いていた。

「はあ、ああああ……。ああ分かる、あなたが、私の中で逞しく力強く脈打っているのが……。私の身体で気持ち良くなってくれているのだな……」

これだけ熱を持ち、硬くそそり立っているのなら、早く精を吐き出さんとばかりに我慢できずに腰を振ったところで、自分もその激しさに溺れる形で彼を受け止めるといふのに。

最初の宣言通りに凜子本位のセックスを貫く姿勢に、心が自然と解きほぐされていくのを彼女は自覚する。

「もうすぐ奥まで届く。そこでもう一度落ち着こうな」

心が男に向かって開けば、身体もより深く男を受け入れ、感じ入る気持ち良さを大き

なものにしいく。繋がってるだけなのに、粗相をしてしまったかのように凜子は粘度の高まった本気汁を吐き出し続けていた。

……こつん。そして、リヴァイスの亀頭が子宮の入口にたどり着いた時、凜子の意識は彼方へと押し流される。

「おほうううううううううううううううっ!!」

白目を向き、全身を痙攣させて、ただただ激しいオーガズムに狂い叫びながら、必死にリヴァイスと重ねた手に縋るしかない。波が引くどころか、高波が次から次へと襲い掛かり、彼の腰にしがみつかせた両足の踏ん張りが無ければそのまま失神したと確信できるところに。

「しゅ、しゅごい、いいいい……軽く子作り部屋をノックされただけなのにいい、ぶっ飛び白目アクメ頂いちやいましたあ……」

「うん、凜子の中、とても強い締め付けなのに、すごく滑りも良いし、俺のモノ全体が熱心にちゅうちゅう吸い付かれてるんだ。気を抜くとすぐに出てしまいそうだよ」

「きに、きにしにやいで、びやしていい、のに……」

「蹂躪するようなセックスをするために凜子を抱いたわけじゃないから。それにこうして繋がってるだけでもものすごく気持ちいいんだよ?」

「あつるようにならへのはれるだけのソフトキス。続けて、頬に、唇に。両手を繋げてい

るから、手で撫でる代わりにキスで示されている。自分が大切な一人の女として扱われていることに、心が震えて反応を示し、苛烈な調教や娼婦としての生活にひび割れ、壊れかけていた自分が少しずつ傷を塞ぎ、秋山凜子という自意識がゆつくりと力を取り戻そうとしている。

「あなたは……グレイは、悪い男だ。弱った女をこんなに優しく抱いてしまえば、あなたに寄りかかかってしまうに決まっているではないか。私を穢してきた調教師や薄汚い欲望を赤裸々にしている客どもと違って、キスも愛撫も上手とくれば、こんな甘い毒に抗えるわけないだろう……？」

「そうだね、実際に俺はこうして凜子を抱いて、俺自身もいい思いをしてるわけだし。決していい人、いや、魔族では無いだろうさ」

「だが、その程よい俗っぽさが今の私には救いになる。大丈夫、随分と落ち着いてきた。少し体勢を変えたいが、いいか？」

さて、感度が最高潮に高まった状態で、心が開いたところに最奥を一押しされたことで、深いオーガズムを得た凜子は発情も衝動も随分と落ち着きを取り戻したものの、子宮全体にじれったいほどの疼きが広がっているのも自覚できており、最終的には吐精を思い切り子宮か直腸、いや、いつそ両方で浴びない限り、本当の意味で平静に戻れないことは分かっていった。

視界の隅で見える、あれだけ怒りと娼婦としての仄暗い衝動に飲まれていた可愛い後輩は、共に調教を受けていた時に知っていたはずの自分が乱れる姿とのあまりの違いに、唾然とすらしてしまっていた。何があの連中のやり方と違うのか——分かりやすいほどに、瞳が雄弁に語っているではないか。

「ああ、ありがとう。うん、繋がったままでいいから、今度はあなたが仰向けに横になってくれ」

凜子は心の内では出すことなく独白する、ゆきかぜに向かつて。

ゆきかぜ、私達は確かに苛烈で忌々しいあの肉体改造や調教、洗脳じみた意識の変革によつて、男性の性欲を受け止めることに嫌悪感を感じることはなくなり、むしろ悦びを感じ望んで受け入れるように作り変えられてしまった。それでもまだ、悦楽の熱に浮かされていても、私達の身体や心に対して身勝手に乱暴に振舞う連中に落胆なり怒りを覚えていないか？

……私はそうだ。娼婦の身に墮ちたのは確かに自分の選択が招いたことだが、奴らの自慰のための、熱を持った道オナニードール具ではないのだと。

どうせ身体や心に植え付けられた娼婦としての思考が、プログラムのように懸命に媚びて、勝手に昂ぶり、顧客の望むようにザーメンを浴びて絶頂してアクメ顔を晒す。あげく、お礼まで口にするんだ。自分の意思関係なくだぞ？ 心の奥底で軽蔑されている

ことも分からずに、自分のお粗末なモノで心身ともにイキまくったと勘違いして帰っていくんだ。身体への刺激に対する条件反射と変わらないというのにな。私も奴らも惨めなものじゃないか。

だから、身に着けさせられてしまった奴隷娼婦としての性技であれ、自分の意思で熱を入れて尽くしたいという相手ぐらゐは選んでやる。……ちっぽけな抵抗だろうが、私はそう思っていたんだ。

「次は私が動こう。私がグレイ、あなたを気持ち良くさせてあげたいんだ。所詮は仕込まれた、自分では拙いかもと思う性奉仕ではあるが、精一杯務める。どうか、楽しんでくれ」

自分のウリであると教え込まれたヒップを見せ付けるように、凜子はリヴァイスに背中を向ける姿勢を取る。そして、水遁の術で自分の前に水鏡を作るように願うのだった。

プレイの一環

凜子は五車学園では理知的で凜々しい人物として、主に女子後輩達に慕われている。

だが、妹的存在のゆきかぜや実弟の達郎に対しては猫可愛がりしているし、二人の世話を焼くのにやり甲斐を感じ、そんな日常に満足しているところがあつた。気に入つた相手に対してはとことん甘やかせてしまい、朝食から昼の弁当、夕食、洗濯を含めた身の回りのことをせつせと世話を焼いて、それ以外は剣術を磨き上げる自己鍛錬に費やす。そういう狭い世界で満たされる性質であり、他のことには強い興味を引かれないために、結果として後輩からの前述の評価に繋がっていた。どう思われようが特に気にならないため、堂々とした振る舞いを貫いているように見えているに過ぎないと凜子自身は思っていた。

「どうだろう、か、ああ、感触だけでなく、視覚でも楽しんでもらえて、いるだろう、か。あ、ああ、さらに大きく、硬くなっているな……ふふ、もつと私を堪能してくれ、グレイ……」

そんな凜子の、自分が認めた相手には何処までも甘く、また尽くすことで満たされてしまう根っからの奉仕気質。ただ、相手を選ぶからこそ凜子のキャパシティを超えるこ

となく、ゆきかぜや一部の人物だけが知るに留まっていたのだが、その氣質が今、一人の男に集中して向けられている。

「あなたに尽くす雌奴隷のだらしなく緩んだ顔、どうか見ていてくれ……あなたのおちんぽでおまんこや子宮口をかき回してもらって悦んでいるんだあ、また軽いアクメが止まらなくなってるんだぞお……♪」

女の子座りの格好から腰を浮かせて、結合が解ける寸前で腰を沈めていく。その間、内側で適度な締め付けをしっかり行い、また腰をゆったりと円運動して、目の前でお尻を揺らすことも忘れない。

おまんこで奉仕している、いつも通りのことがこんなにも気持ちいい。自分の意思で男に心も体も全て差し出すことで、ここまで感覚が変わるなど、凜子自身も初めての体験である。オーガズムが絶え間なく続き、瞳の裏側では視界が半ば白く染まり、星々が眩しく輝き続けているような状態だ。

「ああ、凜子の腰の動き、俺の目の前でお尻がふるふる揺れて、すごくエツチだ。水鏡に映る凜子の蕩けた顔や揺れるおっぱいも、もつと興奮させてくれる……！」

「ああ、嬉しいぞっ、私の全てでもつと気持ち良くなってくれえ♪ スーツもこうしてたくし上げて、ほら、美味しそうに生乳まんこも揺れているだろお？ 後で挟んで感覚も堪能して欲しいい♪」

難儀な性格ではある。尽くされつ放しというのがどうにも落ち着かない性分なのだ、彼女は。滅私奉公する自分に陶醉出来てしまい、ここに劳いの言葉を掛けられてしまえば強く意気を感じてさらに奉仕への熱を込める女性だった。

「嘘つ、凜子先輩があんなに自分から乱れて、嬉しそうにしてるなんて……！」

二人の情交の様子にショックを受けているゆきかぜのことは、今の凜子は意識に入っていないだろう。オーガズムの強さに身体が震えて、硬直と脱力が入れ替わり立ち替わり襲いくる凜子の体勢が崩れそうになるものの、リヴァイスが上半身を起こして彼女の背中が寄りかかれるようにフォローすると、今度は首と腰を捻り再び唇を重ね合わせながら、上下運動を続けていく。

たまらないっ……！！ 私が動きづらさを感じたのをこうも当たり前のように察してくれる……！！ 気持ち良さに集中出来るように気遣ってもらえるセックスはこんなにもハマってしまうものなのかあ……！！ 気持ちいいのはもちろんだが、こちらだってもっと応えたくなくなってしまおう。あなたももっと私の身体で気持ち良くなって欲しいと願ってしまおう。

ああ、私は、私も、グレイだけの女になっていくんだなっ。腰を動かす度に中の形すら彼の形に変わろうとしているっ、そうなりたいと私の全てが訴えているんだあ。きつと不知火さんもそうだったんだ、分かってしまおう、女そのものがこの男を離すなど叫ん

でいるうう……。

本能的に凜子は察する。不知火はとうにリヴァイスの女なのだ。こんな繋がりを経日繰り返せば、彼が第一で他が二の次になるに決まっている。むしろ、ゆきかぜを思いやる母としての心がしつかり残っていることに感嘆すらしてしまう。

自分の腰回りに動きを遮らない程度に回されたリヴァイスの両腕も支えの一つとなり、力が抜けかけている凜子が体勢の維持を気にせず、腰を動かすことに集中出来るものとなっているのだ。ならば、自分出来ることを精一杯やるだけ。身体は勝手にアクメを決めるのだから、リヴァイスが精を放てるように努めるだけだ。

「ほひい……グレイのザーメンミルクをたっぷりしきゅーにあびながら、さいこーのメスイキアクメしたいんだあ……」

こんな下品なおねだりだって、過剰に喜ぶでもなく引いてしまうことも無く、凜子の望むようにとゆつくりと自分も腰を使い始める男。子宮への刺激で一度深くトンでいるから、まだ凜子は襲いかかる絶え間ない大小のアクメの中でも、自分の指示である程度身体を動かさせている。

「凜子、少しだけ堪えてくれよ……?」

「らいじょうぶ、らあ、たいまにんは、そう簡単に屈し、ないんだ、からなあ。優しくてえ、逞しくてえ、硬くて……女で良かったって、思わせてくれるう、グレイの、おちんぽで

も、おほう♪」

それでも、子宮を突き上げる衝撃に黒目が容易く瞼の奥底へと飛ばされ、白目オルガをキメてしまう。絶頂への嫌悪感が打ち消されている今、凜子の身体はどこまでも貪欲に快楽を貪ろうとする。元より男への服従を誓った上での絶頂に身体は味をしめてしまっていて、今日に限っては精神面まで積極的に隷属を望んでいるのだから、感度も感覚も加速するばかりだ。

少しは余裕があると見せるつもりが、即堕ち対魔忍の模範演技を披露してしまう凜子はあつという間に追い詰められていた。ザーメンぶっかけアクメを頂戴する前に、これでは失神してしまうと。

「いやあ、だあ、気持ち良すぎて、これじゃ一緒にイケないままあ、終わっちゃ……ああ……」

甘えていい相手なのだと認識していることで、凜子はとうとう動きを完全に止めて、子供時代に帰るように泣き出してしまふ。同時にオーガズムに達したのに身体が言うことを聞かない。泣くことじゃないと理解していても、心がそれが嫌なんだと泣き叫んでいた。

「ありがとな、凜子。それほど一緒にイキたいって思ってもらえるって、男冥利につきるっていうか、可愛いやつだなあ、ほんと」

少し強くどこか乱雑に頭を撫でられて、凜子の髪が乱される。次いで、腰を両手で持ち上げられ、お腹の中を埋めていた存在が強引に引き抜かれてしまう。内壁が力りで引っかかる感触に、漏れ出る声は確かに嬌声を上げているのに、寂しさという感情を強く感じさせるものだ。

「後ろ向きなのを前に変えるだけだよ、ほら、もう一度入るぞ。ちゃんと息を吐いて……そう、力抜かないと余計に変にイッてしまうから。よし、言われたことをすぐに出来て偉いぞ、凜子」

悲しいと思って涙がさらに流れかけたところに、対面の姿勢に戻されて、またあの熱が身体の内へと帰ってきた。帰ってくる、と認識するあたり凜子も相当参っているわけだが、リヴァイスにまたガシガシと撫でられて、それがなぜ嬉しくて仕方ない。現金なもので流す涙も嬉しさからにすぐに変わってしまった。いた。

「遠慮は忘れて、気にせず思い切り甘えてきたらいいさ。それこそ凜子が望むなら今日だけに限った話じゃなくな」

「え？ でも、今だけの、関係だとグレイは言って……」

「撤回だ、撤回。そんな捨てられた子犬みたいな目をしてるのに放っておけるか。姉や親代わりの役割ばかりしていて、うまく甘えられる相手がいなくて、心が悲鳴上げてるんだよ、凜子は」

生まれの親の思い出は無くとも、育ての親や姉であるナディアやメイアが愛情を注いでくれていた。十分に甘えさせてもらって、ひとり立ちした今も変わらず愛してくれている。そんな彼から見る凜子は愛情に飢えている裏返しとして、ゆきかぜや実弟に過剰なほどの世話を焼いているように思えるのだ。

「少し俺の好きなように動く。あのキーワードは有効なままだから、本気でまずかつたら迷わず口にするんだ。いいな？」

凜子がリヴァイスの身体から魔力が自分に向かって入り込んでくるのを知覚した途端、あれだけ自分の身体を翻弄していた連続アクメの波がすつと遠ざかっていく。

「え、え、あれ？ ゆっくり動いても私の身体、イキっぱなしだったのに、急にイケない？ ……ああつ、でも、とても気持ちいい、そのままなのにつ」

「魔族としての力だよ。凜子の快感を少し吸い取らせてもらって、その分……」

「ああ、まさかつ、 그레이に、 그레이がその分、興奮してくれてるう♪ またおつきくなってるのにい、 しゅごい、こんなに、こんなに硬くなるものなのかあ……♪」

「反則技みたいなものだけど、こういう魔の力も使いようってね。あ、ぐ、凜子相当えぐい感じ方してたんだな、ヤバイ、全然もちそうにないぞ、これっ」

「ひいつ!!? 그레이のおちんぽ、またおつきくう! ああつ、子宮、子宮ぐいぐい押し上げてくるう!」

リヴァイスが淫魔の血を引いていることを凜子はまだ知る由も無いが、自分の強すぎる悦楽の感覚を彼が受け持ったのは感じ取っていた。余裕を残していた彼が一気に余裕が無くなり、自分の生殖器目掛けて子種を注ぎ込もうとするペニスが一気に膨張しているのだ。まるで肉棒は既に鋼を思わせる硬さで、また火傷したかと錯覚を起こしそうなほどに熱量を発している。

「こつちも持たなくなったら、感覚返すから、なっ！ くうっ、こんなゆつくり動いてるのに、凜子こんなの良く耐えてたなあ、すぐ、すぐ来てしまいそう、だっ」

凜子は自分の腰を支えているリヴァイスの頬に手を当て、蕩けて潤んだ瞳でしつかりと彼の顔を見る。彼の言うとおり、限界はすぐなのだろう。そんな中で自分が褒められたことに心が弾む。性的刺激に対しての忍耐力を褒められたというのに、心が喜んでる。

この場限りの思いであるはずなのに、既に強く惹かれ始めていると自覚する。安直な女だと自分でも思うけれど、彼との逢瀬がこれつきりなど耐えられない。順番は逆になつたけれど、行き擦りの女にすら情を注いでくれる彼をちゃんと知ろうと決める。

「ああ、いつでもいいから……グレイのタイミングで、貴方のザーメンで私を完全に貴方『だけ』の女にしてくれ」

耳元で囁く言葉は凜子の決意でもあった。元々、実弟に並々ならぬ想いを抱いてし

まっている彼女である。どこかで断ち切らなければならないとは常々考えていたことだ。

「ただ、一つだけ頼みを聞いて欲しいんだ……一緒にイク時に……」

「ごめん、なんて言ったの、凜子」

あまりの衝撃にリヴァイスも痛みすら感じる射精への衝動を刹那の間忘れてか動きが止まる。顔を別の意味でなぜか真つ赤に染めた凜子はもう一度同じ願いを告げ――。

「分かった、ただ、俺にはメイア姉さんがいるから……で、いいかな」

リヴァイスの返事に凜子は俯きながら、短く首を縦に一度振る。そんな凜子の頭をそつと彼はまた撫でるのだが、彼女の頬はさらに赤くなるばかりである。

一方、二人の情交をどこかヤキモキしながら眺めているメイアにしてみれば、唐突に話題に出た自分のことにきよんとした顔になってしまう。だが、リヴァイスがどこかバツの悪そうな顔をしながらも笑みを向けてくれたことで、ちゃんと自分のことを常に気にかけているのだと解釈し、余裕のあるお姉さんぶって、気にしていないとのポーズを取った。横でくすくすと笑うナディアにはじと目を向けていたが。

「ああ、そろそろ来そうだった！ 感覚返すよつ、『姉ちゃん』！」

「ええ……もがつ!?!」

ゆきかぜが思わず叫びそうになり、不知火もビツクリしながらもすぐに娘の口を押さ

えたのはファインプレーであるだろう。

「ああ、来てくれ、リーズう！ お前の熱いザーメンで私を、姉さんを孕ませてくれええ！ イグウ、イツデルからあ、出してくれ、子宮に注いでくれええええええええ！ お前の姉じゃなくて、お前の女になりたいんだあ、ああああああ、またイツテルウウウウ!!!」

声が出なかったメイアやナディアにしても啞然呆然。まさかの姉弟プレイであり、しれっと受け入れたリヴァイスの懐の広さにも驚愕するしかない。そんな周りを置いてけぼりに、リヴァイスは迸りを一気に凜子の最奥へと解き放つ。

「ギダアアアアアア、可愛い弟ザーメンう、熱いザーメンはいつてきてるうううううっ！
リーズのザーメンで孕むう、こんな孕むしかないのお、弟に孕ませながら、最高アクメ頂いてるのおおおおお！」

「ああ、姉ちゃん、もつとイツてしまえ！ 弟のザーメン浴びて孕みながら飛んでしまえっ！」

「はいいい！ リーズの言うとおり、お姉ちゃんアクメきめてますううう、おほおおおお おおおお!!!」

人生で一番のオーガズムをキメている凜子を前に、周りの女性陣は完全に置いてけぼりを食らってしまうのだった。

お風呂場にて

「痒いところはないか、グレイ殿？」

「大丈夫だよ、凜子。しかし、髪洗うの上手だなあ。ほんと手慣れてるといっか」

汗やよだれ、互いの体液などで身体がベタついてしまったリヴァイスや凜子は一先ず入浴ということに落ち着いた。

ベッドに染み付いた染みやベタつきに対しては水遁の術が大活躍し、忍術を生活魔術みたく使うリヴァイスと不知火に幻影を解かれたゆきかぜや、力が入らない状態の凜子が唾然としたり、汚れを浮かすには大変便利で固定観念に囚われるのは良くないと不知火が主婦視点で語ったことで、ゆきかぜの瞳のハイライトがさらに消えてしまったりしたが、それはともかく。

VIPルームのバスルームはこの人数で入ろうと十分な広さがあり、浴槽も広く、先に身体を洗われたナディア、メイア、不知火が既に程よい熱さの湯に身を預けている。

凜子も強烈な絶頂の余波で少しの間、身体をまともに動かせず、先程までリヴァイスに髪を、それ以外を不知火に丁寧に洗われていたのだった。今は気怠さがあるけど、上機嫌で鼻唄を口ずさみながら、リヴァイスの世話に勤しんでいた。なお、感極まった際に

リヴァイスを愛称呼びしてしまった呼び方は元に戻している。ただ、リヴァイスからの呼び方は呼び捨てで構わないとも言いきり、彼からの呼び方はそのままだ。

「ゆきかぜはすぐに髪の手入れを適当にしようとするからな。せつかくの綺麗な髪質が痛んでは宝の持ち腐れだろう？ それにそういうグレイ殿も手慣れたものじゃないか。不知火さん、ナディア殿、ブラッドロード殿と三人の髪を洗う手さばきには惚れ惚れしてしまった」

「回数重ねればこれぐらいはね。それにメイア姉さんが家にいる時は手入れは俺の担当だよ」

「そ、外回りの時は私だってちゃんと」

「私がフォローしてるから大丈夫よ、リイズ」

がつくり項垂れたメイアの生活面は色々と残念なようである。ただ、ナディアやリヴァイスの助言や補助もあり、大雑把ではあっても彼女も炊事などが出来ないわけではない。なく、このメンバーでなければ可もなく不可もなくという評になるのかもしれない。

「ちよつと待って！　ほんと色々待ってよ！」

「こら、ゆきかぜ。風呂に入るなら、服は脱いでくるんだ。装束がいくら熱や水、衝撃に強いといつてもな」

「ちつがーうっ！　むしろ凜子先輩はなんでそいつの前で裸を堂々と晒してるのよっ

！」

「グレイ殿に私が隠すことなど今さら無いだろう?」

何を言ってるんだお前はと言いたげな凜子であるが、むしろ凜子の豹変ぶりにゆきかぜが何を言ってるんだお前は状態である。

「やっぱり洗脳よ、洗脳!　なんて外道なやり方を!」

「煩いぞ、ゆきかぜ。そもそも私達は娼婦として彼に時間を買われているのだ。視覚でも楽しんでもらうのは役割の一つだろう。そもそも私は正気だ。久方振りだぞ、こうして靄が晴れたように思考が出来るのも。ああ、そうだ。残り時間はあと九時間ぐらいか、グレイ殿?」

「うん、幸いここは館の最上階だから。天井ぶつ壊して脱出しつつ、あとは暴れるだけかな。いざとなれば地上まで風穴開けるさ。魔力の消費が激しいけどね」

「逃げるだけなら他にも手はあるぞ。私が空蟬の術を使えるから……」

空蟬の術で空間転移が可能だとか、ただ座標の細かい指定が難しく空中に出る可能性があることや、仮に空中に出たら羽を広げてしまえば短時間ならこの人数でも地上までは抱えて降りられることなど、リヴァイスと凜子は脱出案を詰めていく。ゆきかぜはあつという間に蚊帳の外だ。

「洗脳や強制発情の身体面を治すのに一旦俺の自宅に来てもらってその辺りの措置をし

てから、学園に戻る方向で——」

「うがぁ！ 無視するなつての！」

「ゆきかぜ……何を拗ねているんだ。完全な八つ当たりだろう、さつきから」

リヴァイスを庇う位置にすつと身体を割り込ませる凜子にも腹が立つし、そんな凜子を制するリヴァイスにも腹が立つ。盾にはしていないとでもいうつもりなのか。

「凜子先輩を元に戻しなさい、さもないと……！」

「さもないと……？」

「アンタの残弾が枯れ果てて二度とおつ立たないようになるまで絞り取つてやるんだからっ！ ふふつ、きつきつおまんこで入れた途端ザーメン吐き出して奥まで届いたらまたザーメンを放つて、アンタは私の身体に服従するしかないんだからね！」

ゆきかぜは凜子がとても残念な子を見る目になっているのに気づかず、また不知火が頭を抱えてナディアに慰められているのも目に入らない。彼女の思考が基本、セックスに繋がるように誘導されているのは本人を除く他の者は察しがついていたが、同じような環境にあつた凜子とも差が歴然としている。

「ゆきかぜ、お前は何を言っているのか分かっていないのか……？」

「当然よ！ 娼婦として仕込まれた私のテクニクでこの男を骨抜きにやるんだから！」

「いや、グレイ殿は必ずしもお前を抱く必要は無いんだぞ？　そのところは分かっているか？　私が抱かれたのだって、私の強過ぎる発情を見かねたグレイ殿が提案し、私がお願いしたのだからな」

「え？」

ゆきかぜが気づいていないことに、平静を取り戻している凜子は気づいている。抱いて欲しいとお願ひするのは自分達。男性の精を浴びてやつと一時的に収まるぐらいの、意識がある限り強制的な発情を強いられるのはこちら側。ゆきかぜのように高圧的に出るのを望む顧客はもちろんいるだろうが、リヴァイスに関しては逆効果である。

「グレイ殿はセックスの相手に困っていない。まして女を道具のように扱い、悦に入る気質でもない。ゆえに、身体だけが気持ち良くなるセックスなど不要なのだ。既に身体も心も自分に預けてくれる女性がいるのだから」

ゆきかぜの過剰とも取れる自分への自信が、自分を抱きたいとは思わない男などいない——そんな思い込みを生んでいた。

「ともあれ、発情を抑えるのには、グレイ殿の精を子宮に浴びるのが良く効くのも確かだしな……不知火さん、いいだろうか」

「リーズならば大丈夫よ、凜子ちゃんは今もう分かっているとと思うけど」

母親である貴女の目の前でゆきかぜが貴女の愛する男に抱かれるが構わないか？

リーズならばゆきかぜに溺れるどころか、逆に夢中にさせるから大丈夫。貴女はもう体感したことでしょう？

口にしない言葉を付け足せば、二人のやり取りはこんな感じである。不知火も愛娘の想像以上の軽率さに愕然としており、今後の任務で下手を打ち続けるよりは、ここでリヴァイスに心身ともに屈服するのが余程マシという判断を下していた。戦闘力は優れていても罠に安易にハマるようならば同じ結末を繰り返すだけになると。

「グレイ殿、頼む。ゆきかぜを助けてやってくれ」

そう言うとき凜子はリヴァイスの足の間に座り込み、ソープの泡を谷間も含めて入念に、自分の乳房へと塗り込んでいく。続けて、少し前まで自分の身体を貫いていた彼のペニスにそつと手を添え、その豊かな双子山の間へと導いた。

「先程は娼婦でありながら、ご奉仕も何も無かったからな……準備ぐらいは手伝わせてくれ」

「凜子、もうそんなことはしなくていいんだって」

「ふふ、違うぞ？ 確かに忌まわしく、無理やり覚えさせこまされた技術ではあるが、貴方を気持ち良くすることで、それにも意味があったのだと自分で納得したいんだ」

凜子の行為を留めようにも、自分の中で切り替えるための一環だと言われてしまえば、リヴァイスも強く止めることも出来ず、そして、続いた言葉に面食らうことになる

のだ。

「それにな……これからは私も、求められればいつでも身体も心もグレイ殿に捧げる。私はこれから、貴方の専用娼婦になるつもりだからな？」

「……………聞いてないよつ、凜、子、くう……………!？」

「ああ、感じてもらえているようで何よりだ。ゴムまりのようなソレを生かせとしつこく躡けられたからな、ほら、グレイ殿のモノが私の胸の中に飲み込まれて、見る見る間に力を取り戻していつているぞ……………?！」

突然の『貴方専用』宣言で心を揺さぶり、一気に悦楽の刺激と視覚の暴力で追い込んでいく、凜子のご奉仕の一連の流れにリヴァイスの剛直は瞬く間にそそり立つ。

「グレイ殿。私はもう貴方以外の男と身体を重ねるなど考えられないし、考えたくも無いと本気で思っている。だからこそ、私の身体もこの性技術も全て貴方だけに捧げる。もちろん、心もこれからいつも貴方の傍に」

そう言つて微笑む凜子は実弟の達郎を見る時のような慈愛に満ちた微笑みを浮かべていた。だが、その表情はすぐに不安に満ちたものへと変化してしまう。

「……………一度抱かれただけで、こんな女は嫌か? ……ふぐう!?! ふうーつ、あむつ、じゅるう……………」

その答えは奉仕を強引に中断させ、唇を強く奪うことで示した。息継ぎが危うくなる

ほどに長く、口内を蹂躪される激しいキスの後で、彼は告げる。

「俺は魔族だ。俺とこれからを共にするというのなら、凜子もまた人と敵対する側になる」

「……ああ」

「俺の女になるというのなら、いずれ対魔忍の組織は抜けてもらうし、魔族へとその身を転じてもらう。すぐに決めなくてもいい。だが、あまり長い時間はやれないぞ」

「強引にそうしてくれても、今の私は恨みもしないだろうに……貴方という男は」

「生き方をこれまでと変えるんだ、人生の転換点ってやつだな。だからこそ、自分で考え、自分で決断するんだ……凜子」

「ああ、分かった。すっかり考えるさ。ただ、相談には乗ってくれるのだろうか？」

頷くりヴァイスに凜子は先程の微笑みを取り戻し、そして彼をゆきかぜと向き合わせた。敵意を込めてりヴァイスを睨みつけていると本人は認識しているゆきかぜであるが、怒りを浮かべつつも瞳は潤んでおり、内股を擦り合わせ、口元はややだらしなく開き、熱い吐息を漏らし続けている状態となっていた。

———により、目線は屹立したりヴァイスの下半身を注視してしまっているのだから、ゆきかぜの身体は既に限界に近かった。

「ゆきかぜ、私をグレイ殿から取り戻すというのなら———やってみるといいさ」

煽る凜子にあっさり乗ってしまいうきかぜは、バスチェアに腰掛けたリヴァイスに自ら跨り、位置を合わせて腰を勢い良く下ろしていった。勝利への妄想を抱きながら。

……そして、一分が経った。

「あひい、あんつ、や、やるじゃない、私の……おほう♪ キツキツおまんこでまだイかない、やだまたイクイクイクイクウ！」

——三分後。

「やあ、しきゆう、おほう♪ 負けちゃうう、降りっぱなしでイカされっぱなしいい♪ でもお、イクウ！ ……アンタをイカせれば私のお、アクメまたキタア！」

五分後——。

「やあ……、こんな気持ち良さ知らないいい……おほう♪」

白目を剥きながら、連続絶頂を味わうゆきかぜの姿があった。力が抜けてしまった上半身を完全にリヴァイスに支えてもらう形になりながら、辛うじて腰を動かし続けているが、リヴァイスは達するどころか、どこか心配そうにゆきかぜの様子を伺っている始末である。

「おい、ゆきかぜ。あれだけ大きな口を叩いておきながら、グレイ殿の魔族おちんぼ様でアクメをキメまくってるじゃないか？」

「あひい♪ まだあ、まだあなんにやんだからあ♪ アクメするのはしょうがにやい

のお♪ おほおおお、きようせーはつじよー、しちやつてるんだからあ♪ 気持ち良くなるのもしかたにや、おほおお、止まらな、おほお……♪」

下腹部の力まで緩んでしまい、失禁しながらそれでもアクメを繰り返してまで、緩みきったイキ顔で涙を流すゆきかぜは明らかに快楽の悦びを甘受していた。なお、横で凜子はゆきかぜへの怒りを煽りに変えて、ゆきかぜを着々と追い込んでいた。

「まだグレイ殿は動いてもいないのだぞ？ 魔族の力も全く使っていない。彼が精を放つまで耐えられると思うか……？」

「負け、ないんだからあ……♪ 子宮にい、ザーメンミルクたっぷりい、注いでもらうまでえ、アクメずつとしててもう、意識まではあ♪」

「完全に目的が変わってるな。うむ、ある意味ゆきかぜらしい。さて、これは先程のお返しだ」

「ちくつ!! 乳首アクメイグウウウううう!!」

反撃とばかりに、凜子がゆきかぜの両乳首をこねくれば、ゆきかぜはまたもや白目アクメをお披露目する羽目になるのだった。

「予想通り過ぎるわ……はあ」

不知火は頭を手で押さえながら、予想通りのゆきかぜの結果にため息をこぼした。同時に親友であるゆきかぜを追い込む側にこうして回ってしまっている凜子はリヴァイ

スへの傾倒が始まっているのを痛感する。

尊厳を執拗に破壊され心身とも弱っているところに、自分を優しく強く肯定されてしまえば、崇拜の感情へと繋がっていく。一種のマインドコントロールだ。不知火とて分かっているに抗いきれず、また抗うという気持ちも芽生えないのだから、その種の思考法を会得していない凜子は一気に深化が進んでしまっている。

この数ヶ月ずっと彼を見てきた。女を支配することでの悦に入ることもなく、穏やかで平穏な毎日を好むという魔族としては相当な変わり者。発展途上である実力も五年前の力を取り戻しつつある不知火を凌ぐ。そして強者の驕りなく、日々研鑽を重ねる。その研鑽が強さだけでなく、興味が向いた全てに向けられるのが場合により問題になる程度で。管理する畑の土壌改良に夢中になった時期など、相手をしてもらえる時間が減って強引に襲い掛かったことも一度や二度では――。

「不知火さん、大丈夫?」

「大丈夫よ、ナディアさん。ちょっとこの先のことを考えてしまっただけ」

リヴァイスの変な拘りが行き過ぎそうになった場合は、自分を始めとして周りの女性達で軌道修正すればいいのだし、彼の事情を鑑みれば、傍にいるのも最低限自衛が出来る女性であるのが望ましいだろう。惚れた腫れただけで隣で歩んで行くには聊か厳しい事情を持つ男であるには違いないのだ。

「あ、マズい」

「あひいい、入口緩んだあ、魔族おちんぼ赤ちゃんの部屋入ってきちやああああ、先走りしゅごいのおおおおおほおおおおおおおおおおおおおおおお!!!」

そして、ゆきかぜは子宮内に侵入を許した刺激の強烈さにととうとう脳が処理落ちを起こし、意識を手放してしまうのだった。

やり直し

「ん、ゆきかぜ。目が覚めたか」

ゆきかぜが気を失ってから二時間ほどが経過し、寝台で目を覚ましたゆきかぜの側には対魔忍装束に戻った凜子が椅子に腰掛けていた。周りに目をやれば、凜子の奥にある化粧台の前で不知火が濡れた髪の毛を乾かしながら整えている。そういえば、この部屋は宿泊も兼ねられるようにドライヤーやらその辺りの設備も揃えられていると教えられていたことを思い出す。

母である不知火は、五年前にも増して女性としての艶やかさが増していると確信していた。入浴の後だからということではない。今もバスルームからは別の女の嬌声が漏れ聴こえているのだから。

「私も不知火さんもあの後、抱いてもらったのだ」

「なんとなく、そうだと感じてた。二人から満足感というか、表情が違うんだもの」

凜子がどこか上気した顔で二回目はお尻を犯してもらったのだと感慨深げに語るのはスルーしつつ、やはり抱かれていたかとゆきかぜは思った。自分自身も敗北感はあるが、完膚なきまでの敗北だ。逆に清々しくすらある。ただ、負けっぱなしでは終われな

い。まして、下腹部の疼きは未だ身体を侵食していた。

「私、この後もう一度抱いてもらうわ。このままじゃ収まらないもの」

「そうするといいい。まだ時間はある」

こちらを支配する意思は無いのは見て取れた。ただ、結果として墮とした女を囲う程度の性欲や独占欲はあるようだが、それはそれで魔族とすれば温厚な類なのだろう。

今は力を借りよう。だが、このまま借りたままにいるつもりはない。恩も恨みも倍返しだ。ゆきかぜのプライドの高さは与えられるよりも多くを与えなければ気が済まない。

バスルームではナディアとメイアが抱かれているのだという。性欲は底なしかと思いきや、魔族としての力のお陰だそうだ。詳細は凜子も教えてもらっていないのだという。

「お母さんは知っているのね？」

「ええ。教えてもらっているわ」

「お母さんはグレイさんの女になったんだね」

「……その通りよ、ゆきかぜ」

罪悪感を感じた顔でありながらも、不知火はゆきかぜから顔を逸らさず、ゆきかぜの射すくめるような視線に向き合っていた。

まるで自慰をするが如く交わって勝手に気を失った。ただ、思い起こせばあの短い交わりでもあの男はこちらをしきりに氣遣っていた。

あの男はこちらを一人の個として抱く。ポリシーめいたものなのだろう。そのやり方が心身ともに弱っていた母の身体のみならず、心までも完全に陥落せしめたのだ。そして、自分が慕う先輩すら陥落してみせた。

……先輩については少しチョロすぎないかと思わないではないが。というか、プレイ自慢するぐらいにのめり込むとは余程琴線に触れるところがあつたのか。ただ、達郎へのこれまでの可愛がり具合と今日の彼女の乱れぶりを見れば、強烈かつ倒錯した性癖を持つていたのだと分かる。ゆきかぜとしても内心引いてしまうレベルであり、それを表面上は何事もないように受け入れたリヴァイスの懐の深さは認められるポイントだった。

「お父さんにはちゃんと墓前で報告して」

「……ええ、もちろんよ」

疼きはあれど、思考や勤の良さは本来に近いものを取り戻していることで、ゆきかぜは不知火からリヴァイスに極似た気配を感じ取っていた。

五車町の外れに父が眠る集団墓地はあるが、五車町はそもそも魔族の侵入を防ぐための結界が張られているはずだ。母が自分の感じ取る通りの存在へ変わっているのなら、

その辺りもクリアしなければならぬはずだが……母の瞳に迷いはない。手はあるということなのだろう。

「グレイさんも一緒に来るんでしょ、きつと。その辺はうまくやってよね」

母が驚きの表情に変わったのを見て、少しだけ溜飲が下がる。二人の関係性や互いへの自然な気遣いを見れば、それぐらいは感づくというものだ。だからこそ、意識を飛ばす前は苛ついていたのだから。

「すまない、不知火、凜子。手を貸してくれ」

バスルームからヘルプの声が上がる。いつしか声は聞こえなくなっていた。

「身体はこちらで洗ったんだけど、二人ともバテてしまって。フオローを頼みたいんだ」意識はあれど、力が抜けて洗い場の床に座り込み浴槽の縁に身体を預けているナディアと、完全にのぼせてしまって半ば意識がないメイアの身柄を引き取って着替えをさせてほしい——そういうお願いだった。事情を察した不知火と凜子の動きは迅速で、二人の身体の拭き取りや、意識のあるナディアへの水分補給など、テキパキと務めを果たし始める。

「お願いされたからと言って激しくし過ぎるのもどうなのよ」

そして、再びバスルームへ足を踏み入れたゆきかぜは水を差し入れながら問いかける。言葉からは儉が取れており、単純な問いかけがそこにはあった。意識を飛ばすほど

の激しい責めをこの男の望みでやったわけではないことぐらいは予測できる。

母と同じような驚いた顔をしたのには、思わず笑ってしまった。どこか滑稽で、ああ、お似合いだと納得も出来てしまう。

予想したことを言っただけと告げると、手加減されたとなれば逆に後でどれだけ文句を言われるか分からないからと、彼は口にする。

親や姉代わりのはずだった。吸血鬼と淫魔の力を当初は上手く制御出来ずに、破壊的な性衝動に飲まれて暴走しかけた。そんな自分に身体を差し出して、かつ癒しの力で正気を取り戻させてくれたのがナディア。血に飲まれるなど血液を自在に操る方法を教えてくれたメイア。吸血衝動に対しても二人が血を分け与えてくれた。

その二人に関係性を変えてくれと願われ、一人の男として抱いたつもりだが、自分にも動揺が残っていたのかもしれない。

「ややっこしいのね。長く生きると魔族はそういうことも起きるんだ。あ、アンタはアタシと歳はそう変わらないんだっけ」

彼のペニスへ手を添える。渴きが無くなったわけではないため、自分の中へ精を放つてほしいとゆきかぜはつとめて淡々と話した。口調が砕けていても、彼はこういうことで感情を荒げる相手でもない。達郎を除く同級生と比較すれば、リヴァイスは十分に大人だった。

「抱え込み過ぎなんじゃない、アンタ。自分を愛する女が側に置いてくれって言ってるだけでしょ？」

「それが複数いたって、アンタは守るだけの力を持つてるんじゃないの？」

「まして、全員自衛どころか、下手な敵なら一人で殲滅できる女性ばかり。アンタはその気持ちに応えながら、不安ならもっと強くなればいいじゃない？」

「何を深く思い悩んでいるのよ。それよりさっさと私を助けて恩を売りなさいよ。何倍にも利子つけて返してやるから」

叱咤に近い言葉をぶつけながら、ゆきかぜは的確な刺激を加えていく。手だけではなく、舌で睾丸を舐め上げ、口づけの雨を降らす。感情とは別の部分で、手についた技術は望み通りの効果を上げていた。

「私はここを脱出して、学園へ帰る。身体は淫らに作り変えられてしまったけど、アンタやお母さん達のお陰で私は対魔忍としての自分を失わずに、忘れずに済むっ。こんな私でも受け入れてくれるなら、もう一度逢って一緒にいたい人だっているのっ、負けてられないのよ……っ！」

やっっていることは娼婦そのものであっても、必ず達郎の元へ帰るために必要なことだと変に覚悟が決まったゆきかぜはリヴァイスへの奉仕に集中していく。自分もこの疼きを治めるためにリヴァイスを利用するのだ。どうも変に考えすぎるきらいのある彼

を、自分とのセックスで少しでも前に向かせられれば、ちよつとは恩を返すことにもなるだろう。

「……今は私に集中しなさいよ。今だけは私もアンタに時間を買われた娼婦のゆきかぜとして、しっかりと相手をするんだからね」

わざとらしく小陰口を指で開いて既に濡れぼそった自分の膺壁を見せ付けながら、そり立ったりリヴァイスのペニスをゆつくりと入口へと手指で招いた。今日のお相手がゆつたりと互いの温もりを確かめ合うようなやり方が好みなのは見て取れたのだから、その嗜好に応えるべきと思つたし、また、そういう繋がり方は女として憧れないわけではない。

セックスへの嫌悪感を身体改造や洗脳の一環で取り払われてしまったとはいっても、凜子とゆきかぜではまた好みの傾向は違う。二人は互いに知らぬことだが、この娼館の客に多かった『激しく獣のように交わるプレイ』であつても、ゆきかぜは自分からも喜んで乱れたのに対して、凜子は相手が望むからそれに応えて従属してしまう自分に酔い、結果的に乱れていたという差があつた。

凜子先輩はじっくり繋がるのが好きなんだろうけど……私は実際どうなんだろう。ま、確認させてもらうにはちよつどいい相手よね。ここまで回復が早いのがつつかないのは、コイツの性格なんだろうけど。変な魔族よね、ほんと——。

心の内でそんなことを考えながら、ゆつくりと腰を下ろしていく。中が押し広げられていく感覚に、身体は容易く背中から頭へと駆け上がっていく快樂の刺激を伝え、足の力が抜けそうになる。だが、一気に挿入されることはない。リヴアイスが察して、ゆきかぜの腰を支えたからだ。

「心は落ち着いていても身体は限界が近いんだからさ。湯に浸かりながらにしないか、水城さん」

「ふ、うっ……もう、ゆきかぜでいいわよ。アンタ、女相手には基本こういう扱い方でしょ。ほんと、いつか刺されるわよ、たぶん」

「……最近、他の知り合いにもそういうこと言われた」

「じゃあ、よっぼどよ。アンタは絶世の美男子じゃないだろうけど、西洋系の顔立ちで整っちゃいるのよ。魅せ方次第で『あの男なんかイイ感じ』ぐらいに見せられるぐらいには」

「あ、なんかすぐく今の口調、テンプレの女子高生ぽかった」

「現役の女子高生よ、そもそも！　もう、さっさと運びなさいつてのー！」

こんな軽い言葉を言うのに、自分を抱き上げる動きはあまりにスマートなのが女の扱いに慣れているのが分かって、ゆきかぜはどこか面白くなくてリヴアイスのほつぺたを引っ張るのだった。

「あつ、ふう……調子に乗った女はどこまでも付け上がるから、程々に締めないとどこまでも付け上がるわよ？」

「本気で嫌なら突っぱねるよ」

「我慢できる程度の嫌なことでも、きっぱり拒否しなさいってのお……あん、優しいだけじゃ物足りなくなるんだからあ」

足の力が抜けても湯船に浸かっていることでリヴァイスの逸物が突き刺さるような強さで最奥に襲いかかることもなく、結合を果たしたゆきかぜはゆつくりと前後に腰に揺らす。同時に適度な締め付けを加えるわけだが、自分の意思というより身体の勝手な反応で一生懸命に締め付けを行なっている感覚に近い。ずっと潤滑液は吐き出し続けているし、内部がこれだけ無意識に蠢くなど、彼女自身もほとんど経験が無かった。

軽い絶頂は視界が白く染まるのが繰り返されていることで知覚している。それでも身体は勝手に男への肉体奉仕を続けるため、彼の首に腕を回してしがみつき、上半身を預けて襲いくる感覚に耐える。彼の怒張に放出の予兆は感じられない。本日何度目の性交だ。硬さをしつかり維持しているだけでも驚くべき状態だろう、本来ならば。

「なんでえ、こんなにやにいい、タフなのよお……」

繋がっているだけでこれほど気持ちいい経験が彼女にとっても初体験で、奉仕するどころの話では無かった。自分の母親に付きっ切りで仕込まれたリヴァイスの性技はい

つしかプロとして食べていけるほどに仕上がってしまっており、ゆきかぜがメインで動き、リヴァイスは僅かな動きしかしていないのに、ゆきかぜの弱点を的確に擦り当ててくる。

「ご、ごめん。もちろん俺も気持ちいいんだけど、程よい気持ち良さというか……」

「ちゆまり、おかあしやん……お母さんが悪いってことね……。仕込み過ぎでしょ、こんな……」

堪らず強引に動きを止め小休止。持ち込んだ水差しから、二人とも水分を補給する。

今までの顧客を思えば、小柄な身体つきもあり、意識しなくとも締め付けが相当に強いゆきかぜの膈内で長時間耐えられる男はそういなかったが、その辺りも含めて目の前にいるのは段違いの男と認めるしかない。

「どうやったたら、イケるの?」

ゆきかぜは率直に聞いてしまった方が速いと判断。答えはわかりやすく、もつと激しく動きに変えるか、リヴァイス主導で動くか、あとは性感を吸い上げる、などの方法が挙げられた。

一度子宮に精を浴びれば少なからず余裕が持てるのはこれまでの経験からも分かっている。体力が奪い尽くされる前に何とかするべきだった。

「お願い、吸って? 多少吸われたところでいきやすいのに変わりはないし、あんまり動

いてないのに飛んじやうのもそう出来ない経験だと思う。うん、決まり♪」

そこからの交わりはゆきかぜにとつてある意味初体験といえた。繋がったまま腰を押し付けたら、ゆつたり回転してみたりとじゃれ合うような動きなのに、徐々に高まっていく性感。ペニスが入れば飛びつ放しが当たり前だったのに、これが普通の交わりなのだど泣きそうになってしまふ。リヴァイスの微調整も概ねうまく行っているように、彼も徐々に限界が近づいているようだった。

いつか、達郎とこんな風に交わりたい。その予行練習としては申し分ない相手だと思う。このまま溺れるのもアリかなと思うぐらいには悪くないが、対魔忍から魔族に変わることへの嫌悪感も強くあり、母と同じ道を安易に選びはしまいと考えている。

魔族になることで今の容姿を年を重ねても保てるのが本当ならば、ちよつと、いやかなり魅力的なのだが……母の魔族への転生はその辺りの判断もあつてのことだろう。ゆえに、五年か十年ぐらいしてから、達郎と一緒に悩もうとひとまず保留にする。

「ああ、アタシもアタシももうすぐだからあ、ねえ、合わせてよつ、浴びながらイキたいのお！」

最後の歩調を合わせるために動きをリヴァイスに任せて、ゆきかぜは彼の放出の時まで堪えることに集中する。長く続く辛抱ではなく、互いにより深くより満たされる絶頂を得るための――。

「ゆきかぜっ、射精るぞ！　合わせてっ！」

言われるまでもない。必死に押し留めていたアクメへの昂りを、ゆきかぜは一気に開放する。子宮に直接熱を浴びせかけられる感覚に言葉にならない声を上げて、いつてると自覚した途端意識が遠のき、喉に痛みを感じるほど叫んでいたと分かった瞬間、またオーガズムの波に飲み込まれていく。そんな中でも認識していたのは、リヴァイスの吐精が強く長く続いていたということ。だからこそ、子宮は悦びに震え続けて、ゆきかぜはずっと悦楽の果てから降りてこれなかったのだ。

「あーっ、ほんとアンタなんなのよ、ほんと何なのよお……」

確認すれば獣の雄叫びをずっと上げていたらしい。やつとアクメは引いたものの、中がまだヒクついているのが分かるし、軽く動けばあっさりぶっ飛ぶだろうというぐらいには興奮が収まっていない。

「同調して俺も相当引っ張られたみたいで……ごめんな。喉に回復の魔力当てておくからや」

器用なことをするものだと思いつつも、息を整えつつその回復を受けておく。やがて枯れていた声も回復し、興奮も幾分マシになっていた。

「凜子先輩が一発でハマるわけよね……望むようにイカせてくれて、ちゃんとタイミングを合わせること出来るし、荒々しいやり方もお姫様のような扱いもお手のもの

かあ。お母さん本気で仕込み過ぎでしょう、これ……」

「その、失望されたくなくてさ。必死で応えて身に着けていたら、いつの間にか幅が広がっていたと言いますか……」

つまり、母である不知火が悪い。ゆきかぜはそう結論付けた。というか、リヴァイスも母も年甲斐も無く、どれだけ相手のことが好きなのか。好き過ぎてがっかりされるのが嫌でお互いがお互いに必死に頑張るとか、青春そのものみたいなことをしている。

「中学生ももつと動機が不純というか……いや、やってることはしつかり不純だけでもつ」

母の受けた調教の苛烈さは自分の想定以上であろうし、その長い年月の絶望を振り払うための反動であるだろうから、責めるのは酷なのは理解できる。理解できるが、若い男にその性技の全てを伝授するのはどうなのだ。応えて受け入れ続けるリヴァイスもリヴァイスで、むしろ突っ撥ねた所で不知火の情愛が変わることはないだろう。

「ゆきかぜ……?」

対魔忍として復帰するのは既定路線だ。だが、母は戻らぬだろうし、凜子先輩もどうにも怪しい。即日ということは無いだろうというだけだ。となると、リヴァイスとの連絡手段は絶やすわけにはいかない。つまり、付き合いはどうであれ続いていくということだ。

「ねえ、アタシはアンタの女になるつもりはないんだけど、お母さんがアンタの女である以上、アンタとの付き合いつてのはこれからも長く続くと思うのよ」

「……ああ」

「でも、お父さんって呼ぶにはアンタは歳が近過ぎるし、実年齢は十も変わらないわけだから」

実際のところ、せいぜい五年以内の開きであるが、それは誤差の範囲でもある。

「だからね、兄さんかお兄ちゃんって呼ぶわ。アタシなりにアンタを認める区切りつてヤツ。どっちがしつくり来るかは使いながら考えるつてことで」

このどこか不安定な男を妹という立場からフオローぐらいはしてやろうと、ゆきかぜは自分の立ち位置を定めた。冗談が言い合える気安い関係の女性がいた方がいいと、ゆきかぜの感覚は捉えていたのだ。

「さて、お兄ちゃん？ 一時的かもしれないけど、妹の発情を大人しくさせるのに最後まで手伝つてくれるよね」

それはそれ、これはこれということ。ゆきかぜは心行くまで後背位の姿勢で子宮に精液が満ちて疼く余力も無くなるぐらいまで、とことん犯し続けてもらい、久方振りの安らかな睡眠を勝ち取ったのである。なお、リヴアイスも流石に精魂使い果たし、不知火達の介抱を受けることになったのであった。

天体観測

「ご機嫌ね、メイア。まあ、私もそうなんだけど……」

体力と精力を使ったリヴァイスはメイアの膝枕で熟睡中であつた。既にこの体勢になつてから二時間は経過しているというのに、メイアは疲れる様子を見せるどころか、BGM代わりの子守唄を飽きることなく口ずさんでいた。リヴァイスの髪を梳いてみたり、どこかあどけない寝顔を見ているだけだが、飽きることもないらしい。

真剣勝負のジャンケンによりこの権利を勝ち取つたメイアの邪魔をするわけには行かず、ナディアもメイアやリヴァイスの隣で寝そべつて大人しく彼の寝顔を眺めるに留めている。やはり飽きないらしい。

「ブラッドロードさんの足、痺れないのかしら」

「血液を自在に操るのなら、痺れとかむくみとかも何とかなるのではないか？」

「ベッドの上だから、足への負担は少ないとは思うのだけど……それに、ナディアさんの癒しの魔力が適度にリーズと一緒にメイアさんに注がれているもの」

声のトーンを抑えながら、身体をほぐしてみたり、忍術の発動に問題ないか確認を進めつつ、ゆきかぜや凜子達対魔忍達は脱出への準備を進めていた。

「ところでお母さん、それは戦闘用の服装？　なんか軍服っぽいというか。外套のマン
トも似合ってるね」

「対魔忍装束は拘束中にボロボロにされてしまったから、リーズと相談して衝撃に強い
素材は生かしつつ、試作品を作ってみたの」

入室してきた時の娼婦めいた服装とは異なり、今の不知火は以前の装束に近いレオ
タード型のボディスーツの上に、グレーを基調とした軍服調の服装を纏っていた。な
お、スカートの丈は動きの邪魔にならない程度には丈が長いものとなっている。

裏話として、不知火が身体のラインがそのまま出て肌の露出も多い対魔忍装束を着る
のはリヴァイスはあまりいい気分ではなく、不知火も既に『私が肌を見せる男はあなた
だけ』を地で行っているため、人間界でかつて放映されていた魔法もとい魔砲少女を題
材としたアニメシリーズに出てくるライバル的立ち位置のヒロインが、三作目で着てい
た衣装を元に、スカート丈や色合いを調整の上ラフを起こして不知火が縫製を担当した
一品だ。

……そもそもが、二人がコスプレプレイを楽しむ一環で見つけたモデル元であり、詳
細は徹底的にぼかすと決めた不知火であった。母の威厳を自分から全力で投げ捨てる
必要もないのだ。勘のいいゆきかぜにもうある程度見透かされて、威厳は半ば無くなっ
ているようなものではあるが。

「縫製がお母さんって、ええ、これプロの仕事じゃないの……」

「凝り性のリーズに影響を受けて、私もちよつと本腰を入れてしまったのよね。小さい頃はゆきかぜの服を全部作るぐらいには、裁縫が趣味だったし」

「ううむ、私も最低限の家事は出来るとはいえ、不知火さんに改めてしっかりと教えを請いたいところだな……やはり、グレイ殿の身の回りのお世話はきっちりこなせるようにならないければ」

この出来栄えでどこがちよつとなのか。というか、『本腰を入れる』技術を磨き直して向上させる』の間違いではないのか。母の常識も相当におかしくなって、いや、元から天然なところはあつたかと思ひ直す。必要に迫られない限りは細かいところを気にせず、おおらかに構えているところがあつたような記憶もある。仕事や任務となると意識が切り替わるのだろう、そんな母親の一面を思い出しつつ……。

「凜子先輩。教えを請うのは後にして、とりあえずお花畑思考から離れて。全部脱出してからの話でしょ」

「うっ、そうだが。ゆきかぜ、急に辛辣になっていないか？」

「アタシだって本来こういう役回りじゃないもん。すっかりしてよ、凜子先輩」

ゆきかぜとて自分が突っ込み役や宥め役に回るとは思っていないかった。恋愛脳に陥った尊敬する先輩がここまで脳内お花畑するとは予想の斜め上過ぎる。これまで彼

女には寄りかかれるような対象も、まして異性などいなかっただし、誰だって甘えたいとか自分を支えて欲しいって願望はあるものだが……。

「優しくして欲しいだけなら、他の男性をお勧めするわよ、凜子ちゃん」

そんな凜子に冷水を浴びせるのはリヴァイスのパートナー陣。不知火の言葉にナディアもメイアもウンウンと頷いていた。

「セックスの時間はとても優しいし、望まないかぎり酷いこともしないけれど……自分
のことは自分でが基本路線だから、普段は全然甘やかせてはくれないわよ？」

「だらしのないのも嫌いだから、オンオフの切り替えはキツチリしないと怒られちゃうし。私もメイアも何度もカミナリを落とされてるの」

「最初は生意気だから殺そうってしたのに、それでも私の杜撰さを見るに堪えないから
言い続けてやるって。痛い目にも合わせたけど、それでも引かなかったもの……ふふ、
今では感謝してるわ」

温厚だけど怠惰は許さないというところか。パートナーにも墮落ではなく自律を求
める辺り、さらに変な魔族の印象を強めたゆきかせだが、凜子は何やら勝手に衝撃を受
けたようで。

「なっ、なるほど……女として己を高め続ける意志が無ければ、グレイ殿の側に侍る資格
もないと……」

いや誰もそんなこと言ってますんよと、ゆきかぜは慣れぬツツコミに疲れ、心のなかで毒を吐くに留める。やがて、リヴァイスが身を起こし、ナディアも娼婦の格好から動きやすい軽装へと着替えて、全員が出立の用意を整えた。

「空蟬の術で最大1kmは跳べるんだったね？」

「ここに囚われてから鍛錬が出来ていないことや、この人数もあるし500mを限度に考えてもらうのが確実だと思う。空中に投げ出されても大丈夫というなら、跳ぶ位置の制御はあまり必要では無くなる分、700mぐらいは問題無い筈だ」

「十分。せっかくなら空中飛行を楽しもうじゃないか。ナディア母さんとメイア姉さんは……」

「違うわよ、リイズ？」

「うん。違うよね、リイズ」

保護者から彼へのパートナーへの立ち位置を変えた二人は今の呼び方を許容せず、笑顔でリヴァイスへと強い威圧を放つ。ゆきかぜと凜子は魔界の実力者たる二人の強さの一端に触れた思いで反射的に身震いしてしまうが、当のリヴァイスはバツ悪そうに頬をかくのみ。

「まだ慣れないんだよ、ナディア、メイア。……悪かった」

「羨は最初が肝心なもの。ふふ、怒ってるわけではないわ。ね、ナディア」

「ええ。鉄は熱いうちに打て、だっけ。そんな感じだから」

つまりは茶番ということである。不知火が悠然と構えていたのは、二人の心情がある程度察していたからだ。ともあれ、魔族であるナディアやメイアは魔力での浮遊が可能であり、翼と魔力の併用が可能なりヴァイスが不知火達三人を支えるという方向に決まる。

なお、不知火は念話で浮遊の練習を兼ねることをリヴァイスと打ち合わせを同時に終えていた。

「あとは跳ぶ前にここをぶっ潰していかないとな。メイアに手を出して俺に報復されたのにまだ懲りないっていうんだから……」

「あはっ、私もきつちり落とし前をつけないとね♪」

「凜子ちゃんも空蟬の術のために体力温存ね。私とナディアさんでフォロー、でいいかしら。ゆきかぜも暴れたいでしょう?」

まず、ゆきかぜの雷遁で電気系統を破壊。次いでリヴァイスは娼館の天井まで一気に魔力で風穴をあける。後は各々で暴れて、終わったら撤退と大まかに決めて、一同は動き出したのだが……。

「あははははっ! 私とリイズの新たな門出を鮮血のシャワーで祝いなさいな!」

「うふふっ。せめてあなた達の命を吸い上げ、私の力としてあげる♪ そして得た力を

またリイズに捧げないとね……ソウルステイルっ！」

幸せへの切符を手にした魔族二人が張り切った結果、殲滅戦の様相を呈し、娼館は短時間で更地と化しつつあった。かつてはメイアや不知火を、そしてゆきかぜや凜子の心身を弄んだ連中も全員、全身から血を吹き出しながらミイラのような屍を晒している。

普段は温厚なナディアであるが、メイアに手を出した輩どもへの慈悲はない。外道な連中は自分を通じてリヴァイスの糧になれば良いぐらいの感覚であった。

「私、これ出番くない？」

「ゆきかぜも病み上がりみたいなものだし、俺も最初に1発撃つただけだよ。お互いに余力を残したってことで。まあ、身体の治療の間にくらでも手合わせの機会はあるさ」

それにあの無双に割り込む勇氣はあるかと聞かれれば、ゆきかぜとって目に見える地雷は避けたいと考えてしまう。運良く二人組から撃ち漏れた連中を雷撃で仕留めるに留めていた。

射撃練習と思えばいいのではというリヴァイスの言葉にそう思うのが精神上も良さそうだとゆきかぜは支援射撃に徹するのであった。

そして、余計な連中が大挙して押し寄せてくる前に、リヴァイスの癒しの魔力を注がれている凜子の空蟬の術で無事脱出が終わり、一同は空中遊泳と洒落込んでいく。

「うっわあ〜！ すごいつ、こんなに星空が近いって、綺麗！」

「かなり高いところにいる筈なのに、水遁で寒さを遮るとは、なんとも贅沢な天体観測だな……」

「魔界の荒廃した空じゃこうはいかないもの。リーズに何度も連れられて、私も癖になつたの」

「冬だと寒さは増すけれどもつと綺麗に見えるわ。リーズ、また見に来ましようね」

「ああ、メイア。今度はどこかの山の頂上っていうのもいいかもしれないね。テントでも持ち込んでさ、泊りがけもいいな。寒さ暑さ対策は何とでも出来るわけだし」

「平和的な忍術の使い方よね。ふふ、でもこうしてゆきかぜともう一度星空を眺められるなんて夢みたいよ……」

凧子も継続回復が施されていたこともあり、強い疲労感を感じることもなく、夜空を楽しみながら移動を続ける。凧子とゆきかぜを抱き上げているリヴァイスに寄りかかる形を取る不知火は、魔力で浮くという感覚をおおむねつかんで、遊泳の途中からはリヴァイスの疲労を取るべく、ナディアの癒しの魔力と共に水遁の回復術を使う余裕すら見せていた。

「ワイバーンの背中に乗って魔界の景色を見ることになろうとは……：昨晩、見た夜景とまた違った趣きがあるな」

「達郎にはゼキナさんを通して言付けを頼めたしね。まずは身体を元に戻さないと……」

そして、東京キングダムofゼキナの元へと戻った一行は、ゲートを通過し魔界の空を飛んでいく。彼が手配したワイバーンの背中は全員が乗っても余裕があり、空中遊泳と違って安定した飛行となっている。風圧や気温の影響は水遁で変わらずカットしているため、全面ガラス張りの小型飛行機に乗っているような感覚であった。

「そつちに腕のいい魔科医がいるのは知っているから、すぐ戻るのも選択肢なんだけどね。ただ、俺もそういう伝手はあるし、不知火と一緒に過ごしてほしいとも思うからさ」

全身性感帯と発情体質にされただけではなく、魔界器具などによる洗脳で安易に悦楽を求める思考を植え付けられ、さらにどのような性行為であつても拒否すれば頭に激しい頭痛を巻き起こすマイクロチップの埋め込みを経て、ゆきかぜ達は通常の思考が出来る時間が著しく短くなっている。

この移動中もリヴァイスやナディアの癒しの魔力を注がれることにより、強制的な発情や悦楽欲求の遅延をはかりつつの移動であり、ゲート通過前にキングダムで一晩を過ごした際もリヴァイスに抱いてもらって鎮める始末であつた。

マイクロチップについては、娯館でメイアが血液の流れを確認した時に、リヴァイスが不知火の時と確認したのとほぼ同じ位置に澱みを感じたため、推測とはなるが、ゆき

かぜ達自身にも恐らくチップが埋め込まれていると説明を終えている。

また、彼女達の血液中にキメラ微生物が投与されていることもメイアは突き止めており、娼館崩壊前に血の女王たる彼女の手により無効化の上、既に体内から除去されていた。微生物の能力で血中濃度に干渉するようなシロモノのため、血液を自在に操るメイアにとっては造作もないことである。メイアの力を転写しているリヴァイスでも対応は可能だったはずだと彼女自身は嘯いていたが。

「発情体質や植え付けられた享樂的な思考は、俺やナディアの魔力を注いでいれば徐々に緩和されているけど……チップだけは取り除くなり機能停止させないと、ずっと思考を縛られるようなものだから」

リヴァイスによれば自宅に戻ればMRI装置があるため、それで確定診断ができるという。不知火の回復への過程で設置したものであるらしい。ただ、医者でもない彼がなぜ操作方法などを分かるのかと、ゆきかぜが聞けば色々あったのだと苦笑いしながら口を濁し、またナディアやメイアの機嫌が急降下したため、それ以上触れるのをやめる。直情猛進型であるゆきかぜであるが、病み上がりに近い身体で魔王を起こすような真似は流石に思い止まる。

「……ふふ、リイズ。少し休んだら？ また屋敷までは時間がかかるでしょう？」

また、女性陣の相手で物理的に一番睡眠時間が短いリヴァイスが疲れ気味なのも一因

は分かっており、大きなあくびをした彼を不知火が膝枕したことで、屋敷の位置を知るナディア、メイア、不知火が交代で方向誘導を担当しつつ、他の皆もリヴァイスの周りで昼寝と洒落込むのであった。なお、誘導担当は膝枕担当でもあり、ナディア達としてもどこか満足げであったという。

少女の葛藤

感度3, 000倍。不知火に施された、服と肌が擦れるだけで簡単にアクメしてしまうほどの肉体改造。ゆきかぜや凜子はまだ虜囚期間が短かったのが不幸中の幸いと言えたのかもしれない。なお、アサギは幾度もこの調教を受けつつも、強靱な精神力で今も現役の対魔忍というのだから、本当に別格である。

「ふふっ。リーズのお、お陰なんだからあゝ この一年弱の間、ずーっと癒しの魔力 たっぷりのザーメンを注いでくれたからあ、感度も何百倍ぐらいに落ち着いてきたんだものお♪」

長い虜囚生活の中で、感度を3, 000倍に引き上げられた不知火も精神力ならばアサギといい勝負ではあるが、眷属としての主人であり恋人となったりヴァイスに抱かれて、身体中を駆け巡る悦楽に逆らう必要もなく、むしろ自分の感度の良さを利用して心行くまでオーガズムに溺れる楽しみを覚えてしまっていた。

不知火が嬌声混じりに呟いたことも事実で、ゆえに異常にまで高まった感度を能動的に楽しんでいるところもある。リーズの伝手で感覚過敏について緩和する薬も入手できるのだが、不知火からすればこの数百倍の感度ならば恋人と楽しむためのエッセンス

に過ぎなかった。

「ああ、ゆきかぜに見られてるのにい、また私イってるのお！ リイズのザーメンミルクう、子宮でごくごく飲み込んで喜んでる悪い母親なおっ！」

ナディアやメリアも正式にリヴァイスの女になったことで、既存のものを入れ替えになった、三人は楽に並んで眠れるサイズのベッドの上で嘔きあげる母乳をリヴァイスの顔に吹きかけて、眼球が転がり白目を剥きながら、身体をガクガクと激しく震わせて、不知火は深いアクメをキメている。

娘の前に醜態を晒す羞恥心や罪悪感すら、不知火の身体は悦楽をより深く味わうための反応へと転換してしまうのだ。ただ、その様子を傍で見つめるゆきかぜの顔に嫌悪は浮かんでおらず、むしろ羨望の色を浮かべていた。

「あんっ、お母さん、あんなにおっぱい吹き出してえ、ものすごく気持ちいいんだね……ああ、私も早くお兄ちゃんのが欲しいよお」

ゆきかぜの声には男に媚びる色艶がたっぷりと込められている。最初は即墮ちヒロインと化した凜子を心の内で責めていたゆきかぜであったが、まず、不知火にも負けず劣らずの腕前となったリヴァイスの三食の食事でがっちり胃を捉まれてしまった。

また、広い屋敷の庭で家庭菜園を手広く手がけている彼は不知火と一緒に熱心に世話をしており、土に頬や服を汚しながらも、手入れをしている時の表情は充足感にあふれ

ていた。既に彼の忠犬と化した感のある凜子もその輪に加わり、ゆきかぜはナディアやメイアとお茶やタオルを差し入れる側に回ったのだが、前回よりも作物の実りが良かったなど嬉々として話す様子に、魔族の若手の実力者の評判との乖離に困惑しつつも、親しみを覚えたのも事実だ。

「うん、あとでちゃんと相手するからさ。もう少し待つてな、ゆきかぜ」

普段の接し方は優しい兄がいたらこんな感じだっただろうかと思わせてくれるもので、こんな淫らな時間であっても頭を撫でる手の動きは宝物を慈しむように優しい。

それを見て日々の鍛錬時は戦意を全身に漲らせて、容赦ない攻撃を叩きつけてくる厳しさを見せる一面があった。飴と鞭ではないが、優しさだけではなく厳しさを持ち合わせる点も、ゆきかぜからすれば評価できるポイントである。鍛錬で痛めつけられることすら、悦びに変えている節のある凜子のようにはなろうと思わなかったが。

リヴァイスと交わった際に自分の雷遁、凜子の空遁も彼に写し取られていたことを知ったが、その雷遁の使い方も、今までゆきかぜが考えもしなかった活用法をしてくる。身体や反応速度の向上、磁場の形成により、銃や不知火の薙刀、凜子の刀が地面に引き付けられて、持ち上げることすらままならなくなったりと、自分の戦い方の幅を広げることに繋がついていた。

「はあ、こゝろ」

何より娼館の機材に頼っていた調教師連中や自分を洗脳支配しようとした、成り上りを狙っていたアンダーエデンの生き残りの魔族達など比べようがないほど、リヴァイスの性技というのはズバ抜けていた。

身体や心の性感を強引に引き上げられたはずの自分が、初心な少女のように鳴かされながらも、全身が蕩ける感覚と快い倦怠感、さらに行為の後の幸福感や不思議な開放感を毎回経験されるに、抱かれる度に身体や心が力を取り戻す、相手に力を与えるセックスがあるのだと、リヴァイスから学んだのだ。いや、学ばされたというのが正しいか。

本人や不知火に言わせればまだまだ発展の余地があり、半分流れる淫魔の回復力に頼り過ぎている部分があるというが、不知火は本気になれば七日七晩ずっと交わり続けられる身体に変えられていると嘯っていたこともあり、母の肥大化させられてしまった性欲を受け止めて満たすとなれば、リヴァイスはそれこそ淫魔の王を名乗れるぐらいの性豪を目指すしかなかったのかもしれない。

「ああん♪ お兄ちゃん、遅いおちんちんが、また私の中に入ってきたあ♪」

痛みには歯を食い縛って抗える。だが、身体と心が気持ち良く、それも後遺症が残らない性質のものだと分かってしまえば——元々、纏の任務の経験などなかったゆきかぜだ。悦楽を受け入れるのでもなく、耐え忍ぶのでもなく、ただ『流す』には圧倒的に経

験が足りなかつた。

相手に自分への悪意——娼館のあの胸糞悪い連中のように——があれば、まだゆきかぜは抗い続けただろう。ただ、相手が自分をただただ慈しみ、力を取り戻させるために抱く毎日にどう闘えばいいのか分からぬまま……彼女は兄と慕うようになってしまった男の性戯に、心はともかく、身体は完全に籠絡されていた。

「あんつ、達郎もお、お兄ちゃんみたいに、強く、逞しくなつてくれるかなあ♪」

達郎への想いそのものは消えたわけではない。自分でもそう信じている。達郎のことを思えば、胸のうちが温かくなることに変わりもない。だが、父と呼ぶには若過ぎる彼を血の繋がりのない兄と認め、身体が正常に戻るまでは彼との情事に溺れるのも仕方がないのだと……思えるぐらいにはなつてしまっている。

彼限定ではあろうが、一気にマゾヒスト化が進んでいる凜子に、兄が頭を抱えている様子にもどことなく親しみを覚えてしまう。豹変した凜子に苦悩する仲間に近い意識もあつた。

「それは純粹な強さ？ それとも……」

「両方♪ 夜も逞しくなきや私が満足できないもんつ♪」

「うーん。戦闘力は対魔忍やれる以上、やりようでも何とでもなるとは思うんだけどな。夜はなあ……魔族になればある程度解決してしまうところはあんだけど、安易に人を捨て

るってのもどうかと思うし。人の身でとなると、ぱつと思いつくのは氣功術の活用とかになってくるのか……?」

問いかけてしまった自分が悪いのだが思考に埋没しかけるリヴァイスを、自分の臍内を埋めている彼の分身を子宮口で吸い付きつつヴァギナ全体で締め付けることで、彼の意識を自分へと戻しにかかる。また、悦楽に口元は緩み、瞳も潤んでいるものの、ゆきかぜは頬を膨らませて私は不満だという意思を分かりやすく示している。

「ごめん、ゆきかぜ。確かに今考え込むことじゃなかったな。今はゆきかぜに集中するよ」

不知火や凜子同様、彼の精を子宮で浴びて飲み干すことに完全に絆されてしまった身体を、どうしようもなく幸福感を感じてしまっていることをあえて分からない振りをして、ゆきかぜは治療の一環なのだからと男の愛撫に身を任せていく。日に焼けた褐色だった肌色も娼館での生活や魔界での療養期間を経て、随分と色が薄くなってきたのと反比例するかのようには、演技だったはずのお兄ちゃんという呼び方にすら、想い人の達郎のことを呼ぶのと同じくらいに愛おしさが込められてしまっていることに、彼女自身の自覚はまだなかった。

「ああん♪ 私い、お兄ちゃんの形、完全に覚えちゃったよお♪ 子宮ごりごり押し上げられるの、クセになっちゃってるのお♪ お兄ちゃんのオチンポで今日もイっちゃう、

「いつちやうんだからあつ！」

この後間を置かず、ゆきかぜも母親同様、子宮口にピタリと押し当てられた突端から子宮に直接ザーメンを浴びせかけられたことで、白目を剥きながら失禁アクメをキメて、深いオーガズムとともに強い解放感を得たわけだが、彼女の両脚はリヴァイスの腰にしつかりと回されて離そうとしなかった。

娼婦として自分の身体を通り過ぎた男達と決定的に違う、ゆきかぜ個人を欲して慈しんでくれる相手。まして、一度や二度では満足できなくなっている淫乱なこの身をちゃんと満たしてくれる精力と確かな技術。

ひよつとしたらもう、戻れないかもしれない。達郎の逸物で満足出来る自分が想像出来ない。物足りなさを感じて、結局は――。

「お兄ちゃんは苦笑いしながらも、きつと受け入れてくれるよね……」

情交のあと、ゆきかぜは中庭のベンチで一人物思いに耽っていた。仮に達郎の元へ戻り、そのあともう一度リヴァイスの側へと帰るような身勝手な選択をしても、それがゆきかぜが出した結論ならばと兄は受け入れてくれる確信がある。ただ、母やナディア達はその簡単に許しはしないだろう。

「どうした、ゆきかぜ。ため息をついて」

そんなゆきかぜに声を掛けるのはヴィクトリアン風のクラシカルメイド服が板につ

いてきた凜子であった。手には雑巾を縁に掛けたバケツを手にしており、外窓の掃除を終えたところの様子だ。

不知火やナディア達の正妻格を押し退けるには到底及ばないと判断した凜子は、まずはグレイ家の、ゆくゆくはリヴァイスの専属メイドとして側仕えにしてみようという結論を出したのだが、ゆきかぜには当然その思考は理解出来ないものであった。それでもまずは形から実践し、家事スキルについても不知火の指導の下、しっかりと基本を学び直し、ナディアやメイアにも身の回りの世話を任せられるに至っている。こうした碎けた言葉使いをするのもゆきかぜや、リヴァイスに余裕を奪われた時ぐらいになっており、凜子のメイドぶりはしっかりと板についてきていた。

なお、メイド服については不知火謹製のものであり、掃除などの作業に適するように動きやすく、また、ヘッドドレスやエプロンに施されたフリルなどのバランスも含め、可憐さもしっかりと引き出している。主人であるリヴァイスが思わずお手つきしたくなるような従順で働き者なメイドさんがコンセプトとかどうとか、不知火のみならずナディアやメイアも一緒にデザインを考えてくれたと、凜子から聞かされたゆきかぜは思わず真顔になったのは笑い話になるだろうか。

「凜子先輩には分からない悩みですよっ」と

自分の道を見定めてしまった凜子は落ち着きを増したように見える。大切な人達以

外への無関心さは元からそう変わらないが、自分の評判が我が主人であるリヴアイスの評価に直結すると認識してからはそのない対応が熟せるようになりつつあった。

自分も似たようなところがあるが、凜子もこうだと決めたら一直線なのだ。決めた以上は迷わないし突き進むのみ。まして経験豊富な年長者が周りにいて、明確な誤りがあれば正してもらえる安心感もある。

「おおよそ、達郎とご主人様を天秤に掛けてしまっているのだろうか？ 悩みぐらいなら、ご主人様にお願ひしてさつきと達郎に会えばいいものを。アイツにも一度抱かれてしまえば結論も出せるだろうさ」

「……それで、見切りをつけろっていうことですよ？ サイテーだよね、それって」
「仕方ないさ、より女を深く満たしてくれるご主人様を見つけてしまつてはな。私達を一晚で全員相手にしても、次の日は普通に動けるのだ。それでいて、紳士的で優しく誠実で……」

「そりゃ、吸血鬼なり淫魔の力があるからこそだからね。相手から精気を拝借するから、相手は脱力感も合わさつてより深く達してしまふし、俺は回復するつて寸法だから」
「うむ、それに増長などしないからこそご主人様は素晴らしいの……だ？」

ほんほん。凜子の頭を撫でるのはそのご主人様である。安全が確保されている屋敷の中庭ということもあり、ゆきかぜも凜子も気は緩んでいたのだろう。リヴアイスが少

し気配を薄くしており、害意を感じない相手でもあったことで接近に気づかなかつただ。

「凜子に褒められるのは嬉しいけど、あまり煽つても調子に乗るからね。ほどほどに頼むよ」

あつという間に顔を真っ赤に染めて俯きながらも、自分の言葉に何度も頷く凜子の頭をもう一度そつと撫でてから、リヴァイスはゆきかぜの隣に腰を下ろした。

「チップも摘出出来て、縫合の跡も目立たなくなつたことだ。体質や上がりすぎた感度の治療途中ではあるけど、そろそろ達郎くんと一度会つておくのも大事じゃないかな」

「お兄ちゃん、私がいなくなつてもいいってこと?」

自分から離れることを勧めるような口ぶりに、ゆきかぜは不満の色を隠せなかった。そんな自分の反応に嫌気が差して落ち込みかけたところに、リヴァイスの手がそつと彼女の髪を撫でる。

「ちよつと違う。ゆきかぜと一緒に暮らすのは楽しい。俺にも母違いの姉はいるって話、以前にしたよな?」

ただ、父親の愛情を独占したいがあまりにこちらを殺しかかってくるような姉に、魔族そのものを嫌悪していて、やつぱりこちらを仕留めにかかってくる姉しか知らないんだ。だから、兄だつて呼んでくれるゆきかぜはもう本当に妹みたいに思つてる。その妹と身体を重ねていて、何を言うつて感じだろうけどさ」

仮に肉体関係を解消したとしても、不知火が自分のパートナーであるのだから、ゆきかぜが家族であることに代わりはなく、距離を隔てたとしても、自分はこれからもゆきかぜの兄のつもりでいるのだと。

「父というのは勘弁だけだね。ゆきかぜが娘っていうには無理があり過ぎるよ」

ちよつと遠いけれどいつでも会いに来ればいいし、連絡をくれればこちらから迎えに行く。どのみち、五車町に戻った後もしばらくはゼキナ経由の定期連絡を習慣化するつもりだったとリヴァイスは口にする。

「魔界と人界と隔てていても即座に連絡が取れるような通信機も作りたいたんだ。『賢者の石』の欠片はあるから、空蟬の術を合わせてなんとかならないかと研究中だけど、実用化には時間がかかりそうだからさ」

「しれつととんでもないことを口にされませんでしたか、ご主人様？」

「必要でしょ？ 最終的には小型の携帯型『異界の門』発生機まで進めたいよね。そしてら、ゆきかぜが本格的に復帰しても、任務のない週末にこちらに泊まりに来ることも手軽に出来るじゃないか」

優しい兄ではあるが、変に拘ると止め処なく突っ走るのも変わりはなく、そんな部分も愛嬌だなど思えるぐらいにゆきかぜも絆されているため、くすりと笑みをこぼす程度のものだ。

「ま、そんな先の話は置いておくとしても、ゆきかぜと並び立って戦える力があって、背中を安心して預けられる存在は絶対に必要だと思う。それが今までは凜子だったわけだけど、凜子は復帰するつもりは無いだろ？」

「はい、ありません！ ご主人様の専属メイドとしてお仕えるために、私は日々修行を積むしかありませんから！」

鼻息荒く答える凜子に分かつてはいたものの、がくりと肩を落とすリヴァイス。凜子からすれば自分を捧げていいという男に初めて出会えたものの、ライバルの強力さに独り自路線でアピールする決心を固めたわけだが、これまで恋愛経験が無かったことが妙な方向へ走らせている。

「自分の男に他の女を宛がうって、どこの貴族社会や戦国時代の正室の話だっただよ……」

自業自得の一面が確かにあるものの、不憫さを感じるリヴァイスの肩を叩いて励ましつつ、ゆきかぜは達郎との再会を通して、自分の心の動きをしっかりと見定めようと決めるのだった。

轉換点

達郎は覚悟を決める。このままでは近い未来、淫蕩の果ての腹上死しかないと。

横でどこかだらしのない表情で満足そうに寝息を立てているゆきかぜ。だが。その下腹部付近には達郎から搾り取ったザーメンの跡が飛び散っている。再会して強引に迫られる形で一線を越えて数えて三日目の晩だろうか。時間の感覚が曖昧になり、頬が随分と痩ける程度には休むことなくゆきかぜとひたすら情交に耽っていた。記憶も断片的にしか残っておらず、意識が半分飛んだ状態で彼女にずっと犯されていたのが正しい表現とも言えよう。

他の男に破瓜を散らされ、高級娼婦として生きていけるぐらいまでにあらゆる技巧や肉体への感度改造、さらに苛烈、あるいは身もよだつ変態行為であろうが抵抗なく受け入れられる性行為そのものへの肯定感を刻まれたゆきかぜを、躊躇なく受け入れた彼の度量は人並み外れて大きいものであったが、精力においては人の範疇を大きく外れるものではなかった。一晚ならば何度でも男としての本懐を遂げることは出来る。だが、三日三晩休み無しというのは、彼に生命の危機を覚えさせるに十分であった。

二日目からは、精を吐き出せば力を失いすぐに勃たないはずのペニスは、ゆきかぜの

性技で回数数を数えるのも億劫になるほどに何度も奮い立たされ、短いスパンで何度もその役割を強制的に果たすことになった。精の放出量がほぼ無くなった頃、やっとゆきかぜは満足げに眠りについたのである。そんな恋人に身体を冷やさぬよう毛布をかけて、達郎は壁に半ば寄りかかりながら、部屋から何とか足を踏み出した。

「グレイさん……」

「達郎くん、お疲れ様。とりあえず身体を流そうか。凜子、その間に消化しやすい食べ物を用意してくれるかな」

「かしこまりました、ご主人様。……達郎、よく頑張ったな」

情交の臭いが強く残る部屋から出た達郎の身体が崩れそうになるのをリヴァイスがすぐに支えて、性行為の残り香が自分にも纏わりつくことも厭わず、そのまま浴室へと連れて行く。後ろからはバスタオルや風呂上がり羽織るためのバスローブを手にした凜子が慈愛に満ちた微笑みを見せながら付いてきていた。

この東京キングダムで三日前にゆきかぜ達に再会した達郎は、リヴァイスから救出からこれまでの大まかな流れを、ゆきかぜと凜子からはそれぞれの観点で今の状態と細かな部分の説明を受けていた。その際にゆきかぜは再会までに季節が進んだことを感じさせる、オフショルダーのニットセーターに短めの丈のタータンチェック柄スカートとといった格好で現れたが、凜子はヴィクトリアンメイド服姿で現れたのである。

なおその後、施されてしまった肉體改造の結果、定期的な強制発情により、ゆきかぜも凜子も定期的にリヴァイスに抱かれていることを知り、達郎は怒りの一撃をリヴァイスに見舞ったのだが……。

「グレイさん、話を聞いた最初に一発殴ってチャラだつてやりましたけど……すいません、ゆきかぜの体力とか色々見誤つて、ました」

「あの一発で後腐れなしつてしてくれた達郎くんが男前だつて。俺、刺されるぐらいの覚悟はし……」

「そんなことは私がさせま……もがっ」

話に割り込む悪いメイドさんの口元を水が覆う。達郎は姉をあつさり静かにさせた器用な術の使い方だと感心はするが、火遁にしても水遁にしても生活の便利グッズのように使われていることは見なかったことにしている。そもそも術の制御をきっちり出来なければ、こんな使い方など出来ない。

「刺されるぐらいの覚悟はしてたしね。ただ、ゆきかぜも大好きな君と繋がれたことが余計にハッスルするエネルギーになったんじゃないかな……」

「あ、なかったことにして話続けるんですね。でも、まあ、グレイさんの言うとおりにいうか、こ、今回だけなら大丈夫って思えますが……」

「うん……」ここまで盛り上がりは無くなるにしても、近いぐらいに求められるのは

続と思うよ」

実際、リヴァイスに向ける達郎の心情は複雑だ。姉や恋人を救い出し、適切な治療を施してくれた恩人でありつつ、姉や恋人を抱いた悪い男でもある。ともあれ、姉についてはむしろ任せられる相手が出来たという思いが強く、不知火から聞いた話でも、姉はすぐにでも彼の眷属となり魔族化することを強く望んでいるようだが、達郎に相談の上で時期は要検討と突っ撥ねられていると聞かされた。

「あの……なんで、ゆきかぜを俺の元へ帰そうと思ってくれたんですか」

「ん……その辺りはそうだね、お湯にでも漬かりながら話そうか」

凜子から身体を洗うためのタオル等を受け取り浴室に入った男二人はさっさと身体を洗い、浴槽に身を浸す。感嘆ともため息とも取れる声が喉から漏れるタイミングが揃っていたことで、二人はひとしきり笑った後に話を始めた。

「凜子やゆきかぜから聞いたように、俺は吸血鬼と淫魔のハーフなんだよ。ましてや、人と価値観がずれていることを認識している。俺の身の回りにいる女性の基本、俺と男女の仲だ。俺も求められれば拒まないし、相手もそれを望んでいる。外から見れば、俺が女を侍らせているようにしか見えないだろう」

不知火を救い出した経緯もゆきかぜや凜子から聞かされている。そして、彼女が対魔忍に戻ることはないことも。リヴァイスのパートナーとして生きることを選んだのだ

から。

達郎の後を付ける形で、任務として追いかけてきていた対魔忍の女性二人が彼女にあっさり無力化されたことも、不知火の心情を裏付けるものと思える。彼女達については別室で拘束されているとだけ聞かされていた。

「ただ、そんな俺にも優先順位っていうか、ずつと傍にいて一緒に生きて欲しいと思えた初めての女性が不知火なんだ。そうなるとき、いや、だからこそなのかな、不知火の大切な娘であるゆきかぜは俺にとつても大事な娘なんだよ。大切な家族だ。なら、家族が歪な幸せにのめり込むのは……なんか、嫌なんだよ。いいオンナなのは間違いないけど」

年が近いからか、父ではなく兄と慕ってくれるあの子が、妹という立ち位置でいて欲しいという身勝手なエゴなんだよな、結局。

リヴァイスの呟きを聞いた達郎は、人よりもよっぽど人間らしい魔族だと、そんな印象を強く抱いた。不知火への思いを吐露した時の表情は、不知火を誰よりも思っている男の顔で……自分がゆきかぜに向ける感情と同じだと思えた。

「ゆきかぜの身体に施された強制発情の治療はまだ途中だ。ともあれ、学園の魔科医に任せたくないという不知火や本人達の意向もある。となると、達郎君。しばらく俺の元に来い。ゆきかぜの発情を君が受け止めるんだ。そのための協力はするし、体力や精力

だけじゃなくて、あらゆる面で君を鍛え上げることはゆきかぜを守ることに繋がる」
リヴァイスは九郎隊に伝手があり、そちら経由で学園側には連絡を入れられるという。達郎は瞑目し呼吸を整えた上で、リヴァイスの手を取った。なぜか身体が震えたのは、ここが自分の分岐点になる——心のどこかで感じ取ったからだ、達郎は後に振り返ることになる。

「ああ、同世代じゃ敵無しぐらいには最低限なってもらうぞ。ゆきかぜや凜子二人同時にして勝ち切れるぐらいにはなってもらわないとな？ 厳しくいくけど、死にはしないから安心してくれ。治療体制は整ってるから」

「そのどこが安心なのか分からないですよっ!？」

「死ななきや安い。人間界の格言にもあるだろ？」

「それ格言じゃなくて、なんかのゲームネタですよねっ」

「お、達郎くん知ってるのか!? いやあ、今まで周りが女性ばかりでこんな話できる相手がいなくて」

決断を早まったかと焦る達郎に、急に砕けた態度に変わったリヴァイス。手早く食事の用意を済ませた凜子が更衣室近くまで戻ってきて、漏れ聞こえる二人の声を聞けば、気安い男同士のたわいもない日常会話を楽しんでいる様子が伝わってきた。

「ふふ。主人様と達郎は打ち解けたようだな。さて、冷めてもいかんから、少し出汁に

熱を入れるとしようか。うどんは伸びてしまうから、ふむ、雑炊に切り替えるとしよう」
静かにその場を立ち去る凜子の顔には微笑みが浮かぶ。メイド服が完全に板についた彼女は所作においても何処か品の良さを感じさせるものになりつつあった。なお、愛刀については必要時に空蟬の術で呼び出すようにしているもの、ほうきや食事用のナイフ、フライパンなどを使いこなしてこそメイドさんだと公言しているとかいえないとか。

「そんなわけで不知火さん、半分ずつ食べませんか？ 伸びたうどんをご主人様に出すわけにはいきませんでしたので……」

「あら、それなら頂くわ。ふふ、凜子ちゃんもメイドさんらしくなってきたわよね」

なお、達郎がゆきかぜから解放されるまでの間、無力化された対魔忍たち二人は追加で借り上げた別の客室に隔離され、下手な身動きが出来ないようにされていた。凜子が水分と液体栄養食を差し入れているが、頑なに口にしない者もいる。ゆえに目の前で食事をすれば少しは食べる気になるだろうという狙いもあった。

凜子からメモを渡された不知火は達郎が休息に入ったことを手早く確認したことで、目の前の対魔忍二人をどうするか思案に入る。リヴァイスの意向を踏まえるなら、対魔忍の戦力を削ぎすぎるのは望ましくない。ゆきかぜや凜子をすぐに眷属化しないことについては不知火の希望とはズレがあるものの、夫（挙式はまだだが）の考えを立てる

ことも妻の役目だと心得ていた。尽くしがいがあゝ、そんな風にも考えている。つまりはベタ惚れであるのだ。

「あのー、私も頂いていいかしら？」

「あ、高坂先生も食べられますか。拘束を外すわけにはいきませんから、私が食べさせることにはなりますが」

「お願いできる？ 固形物も食べたいと思つていたところだから。というか、拘束を解放してくれるのがありがたいのだけど」

拘束されている者の一人は花の対魔忍と呼ばれる高坂静流。木遁の術と多分野にわたる専門知識を活かし、隠密任務を主とする彼女なのだが……。

「高坂先生っ！ 魔族の食事に手を出すなど、何を考へているのですかっ！ 凜子ちゃん、貴女もお願いだから目を覚まして！ 貴女は誇り高き『斬鬼の対魔忍』でしょう!」

不知火の幻影陣による幻覚の影響下にあり、四肢が失われた達磨状態で叫ぶもう一人の若き対魔忍。元ふうま八将・紫藤頼母の孫娘であり、『対魔忍に二凜あり』と謳われる、紫藤凜花その人であつた。なお、彼女は本来、煙遁の術の使い手で自分の肉体の一部を煙化するのが得意なのだが、そこを逆手に取られて、四肢を煙化させたまま、不知火の幻術に囚われている状況だつた。

「紫藤さん……アナタつて子は」

「いいわ、高坂さん。……紫藤さんだったかしら、貴女は少し黙りなさい。この状況でその闘争心を持ち続けるのは立派だけれど、四肢を封じられた貴女の命は今、私や凜子ちゃんの手の中にあるということ踏まえて発言することね」

静流が呆れとも苛立ちとも取れる口調で呟いた直後、不知火は放たれた言葉と共に、同じ向きにいる静流にも、不知火のすぐ隣にいる凜子にも一切影響を及ぼさずに、精密な指向性を持たせた殺気を凜花一人へと叩きつける。

魔族の身となった不知火ではあるが、術の扱いに対する精密さや対応力の広さは損なわれることもなく、得意分野がより負担なく扱えるようになったと自認している。主でもあるリヴァイスの気質が影響しているのか、自覚の限りではあるが、元来の自分が変質することも無いように思う。

「凜子ちゃんからも報告を受けているけれど、随分とリイズのことを侮辱してくれたみたいね。私達があの人に従っているのは洗脳だ、マインドコントロールだ、薬物漬けにしたのだ……いい加減なことを言ってくれるものね」

不知火自身も分かっているが、元々、家族が絡むことになれば籠が外れやすいところはあったのだ。対魔忍という人々の平穏な生活を守ることへの誇りはあったけれど、それ以上に夫やゆきかぜという家族が大事だった。天秤に掛けられれば躊躇なく家族を取るぐらいに。

いまや、リヴァイスはゆきかぜと同等の、あるいはそれ以上の存在として、不知火の心へとしっかりと根を張っているのだ。リヴァイスへの侮辱は自分への辱めよりも強く怒りを覚えてしまう。

「あ、がつ……」

不知火の本気の殺意を一身に受ける凜花は、全身が硬直しもはや呼吸すら覚束ない。彼女は次代のエースと評されるがゆえに、自分より上位の実力者に圧を掛けられる経験が殆ど無かった。

「私も凜子ちゃんも自分の意思で彼に連れ添い、付き従うと決めたのよ。これ以上ふざけたことを口にするようなら、貴女を決して許さないわ」

一気に言い切り、圧を霧散させる。途端、脱力した凜花は力無く弱々しい呼吸音を繰り返すのみ。凜子の肩を軽く叩き、不知火は凜子に彼女の気付けを行うように短く指示を出して、再び静流へと向き直った。

「実力差を押し量ることも出来ない若手の優良株など、敵対組織に刈り取られるだけの学園での教育方針を見直すことを勧めるわ、高坂さん。といっても、一人ではなかなか変えられないでしょうけど」

「そうですね。不知火さんが戻ってきてくれたとしても、それでも難しいとは思いますが……はあ」

なにせ浄流は現役対魔忍時代の不知火を生徒として知っており、教えを請うこともあった。扱う術は違えど、力押し一辺倒ではなく、任務に対して様々な事前対策や情報収集の重要さを知る、貴重な教師だったのだから。

「ゆきかぜが現役の間は頑張つて欲しいものだけど……あら、リーズ？」

「あつ、ご主人様あ♪」

このタイミングでリヴァイスが入室してきた途端に、ガンっ！ と何かを打ち付けた音が響く。何のことはない、凜花を支えていた凜子がリヴァイスへと駆け寄るあまり、勢い良く頭を床に打ち付けた対魔忍がいたという話だ。

「彼女、呻いてるけど、大丈夫なのかい？」

「凜花はそんな柔な鍛え方をしておりませんから♪」

あるはずのない尻尾を全力でぶんぶん振っている幻覚がその場にいる凜子以外に見えているが、リヴァイスも自然と凜子の頭を撫でているあたり脊髄反射的な行動を取っており、どっちもどっちといったところである。

「リーズ、ゆきかぜ達は？」

「休息に入ったよ。ひとまず侵入阻害の結界も張つたし、使い魔に見てもらつてる。何かあれば空遁で呼び寄せればいいからね」

「さすがご主人様ですつ、もう私以上に使い熟しています」

嗚然とするのは、静流に痛みを堪える凜花だ。凜子が全力で媚びを売る姿など、今までの彼女を知る者達からすれば想像もつかない。

「この外道……凜子ちゃんやゆきかぜちゃんのお母さんの心を弄んで……！」

さらに観察能力の圧倒的不足により、己の感情に忠実に爆弾を躊躇なく投げ込んでしまふ——ある意味、いつも通りの行動を取ってしまふ凜花に対して、リヴアイスは不知火や凜子に手で制止のポーズを見せてから大きく息を一つ付いた。

「残念ながら、君は戦闘だけが得意なだけの本当の脳筋なのかな」

「なっ！ 言うに事欠いて、アンタはあ！」

「そもそも洗脳されてるって、何を持って断定してるのさ」

「そんなの見れば一目で分かるじゃない！ 魔族と仲良く話をして、まるで慕っている様子を見るだけで明らかだよ！」

凜花の怒りなど気にすることなく、凜子にリヴアイスはこれ幸いと人として生きる道を説きにかかる。同じ世界に生きる友人もこう言っているのだからと。

「……だつてさ、凜子。やつぱり学園に大人しく帰るほうがいいんじゃないか？ 体質の治療もあと一ヶ月もあればいけるだろうし」

「ご主人様の屋敷はそれこそ魔界の奥地なのに、学園に戻つてどうやってメイドの務めを果たせと仰るのですか？ 仮に通いのメイドになるとしても、ヨミハラ経由で門を通

るにしたところで簡単に通える距離ではありません。そもそも私は今の役目に満たされていきますし、従者としても剣士としてまだまだ至らぬところがたくさんあります。ですから、私はご主人様の傍を離れませんよ?」

につきり微笑む凜子の笑顔には無言の圧力がある。絶対に引かないし、男を離すことはないという女の情念を遺憾無く表していた。

「……何度も伝えただろう。俺は魔族で、凜子は人間だ。共に生きていくとなれば、凜子は人であることを辞めることになる。だから、色んな世界や、色んな人を知ってから結論を出しても遅くないんだ」

「嫌です」

「凜子……」

「私も何度でも言います。嫌です。私の幸せはご主人様の傍にありますから」

笑顔を全く崩すことなく、凜子も同じ言葉を繰り返すのみ。そして、先に引いたのはリヴァイスであるのもここ最近の定型のやり取りと言えた。

「あははっ、いや無理でしょこれ」

「高坂先生、何を言ってるんですか……?」

「少し考えれば分かることよ。今の感じだとむしろ魔族の彼はOKを出してもらえなくても、連れて帰るとしたら秋山さんは本気で抵抗しそうだもの。私じゃ無理無理。二

人掛かりでも一掃されそう」

静流は潜入任務を主にする関係上、今の組織の中で情報を重要視する稀な対魔忍と言える。だからこそ自分なりに観察眼は磨いてきたつもりであるし、ゆえにだろうか、多才な才女であるとの自覚から来るプライドの高さもへし折られるほどの実力差を感じ取れてしまっていた。凜子ですら敵わないと思いきや知らされるのに、不知火には子供に稽古をつけるように捻られてしまい、その主人となるリヴアイスから強者の気配を感じられないことが逆に彼の恐ろしさを際立たせていた。

実のところ、凜子もゆきかぜも実力の向上が見られている。不知火や不知火を制する実力のリヴアイス達と毎日立会いを行い、それぞれタイプの違う強者にどう戦うのか、試行錯誤を繰り返している。真摯に取り組む彼女達が素直に言葉を聞ける相手からの助言を受け入れ、戦いの幅も確実に広がっているのだ。

「自惚れと笑われるかもしれませんが、高坂先生や凜花を二人同時に相手するとしても、今の私が負けることはないかと思えます」

「慢心ではなく、確たる自信よね。断定はしないあたり、油断も無いってことでもあるし」

静流の言葉に微笑みを返す凜子。佇まいは主人に仕える従者のものに直っているが、立ち姿は落ち着きと余裕を感じさせるものだ。

「ご主人様を狙う不埒な輩は駆除をすれど消えて無くなることもありませぬので。ご主人様と同じく私も研鑽を積み続けるだけです」

「そうね、学園にいた時より強くなってるって何となく感じ取れるもの。うまく隠せるようにはなつたみたいだけど」

「うまく擬態するのも鍛錬の一つと教えられておりますが、ご主人様や不知火さんのようにはなかなかいきませぬね」

凜子は微笑みのままそう自嘲してみせたものの、静流からすれば彼女が殻を完全に破つて、さらなる強者の階へと登つたようにしか思えない。

「……秋山さんに今抜けられるのは痛いわ、ほんと」

「ふふ、高坂先生にそう言つて頂けると、少しは成長できたかと思ひます」

結果としてかもしれないが、メイドとしての立ち振る舞いを自分の日常とすることで、凜子は闘志は内に秘め、普段は穏やかに落ち着きを持って行動する癖がついてきている。

彼女の元来の気性においては、鍛錬時や夜のお務めの際にしつかりと解放させてもらえているため、自分の中でも無理なく切り替えができていた。

「何よお……さつさと女の幸せ見つけて、満たされた顔しちやつてさ。それで弛んでいゝるわけでもないって何よ。凜子ちゃんの裏切り者お……」

そんな凜子の変化を受け入れられず、どこか不貞腐れる様子すら見せ始めた者もあり、リヴァイスは不知火に二人の拘束の解放を指示した上で、凜子に彼女の友人の対応を託すのだった。

凜花という女

リヴァイスの許可を受けた後、一括で借り上げているフロアの一角にある小さな炊事場で、凜子は手早く何品か仕上げて、凜花との女子会と知れこんでいた。短い時間で作るレパートリーが増えたのも、不知火の薫陶を受けたことの一つである。

「うう、凜子ちゃんが操られてないってのは信じようと思うけど、本当に別人みたいなんだからね？」

「仕事中と意識すればそこまで難しいものでもないぞ？ 誰だつて外と内で見せる顔は違うものだ。そういう部分を意識して動くだけのことだからな」

凜子は素の顔に戻りつつも、リヴァイスに本気で惚れたからこそ、他のライバルの女性達に無い強みを持ちたいと願い、また、彼のために尽くすことそのものに、強く充足感を感じていることを伝えていく。

「胃が動いてないだろうからゆつくり食べてくれ。時間はあるから、気にすることはない」

「おいし……凜子ちゃん、料理まで腕上がってる……」

「ふふ、私よりご主人様の方が上手だけだな。不知火さんと一緒にキッチンに立つ時は、

「ご主人様のパートナーや私もゆきかぜも心躍らせながら、料理が出てくるのを待っているよ。彩りとか食器にも気を払っていてな、小料理屋に行っているような感じになるんだ」

「え？ 和食を普通に作れる魔族って、え？」

「うむ。変わり者と呼ばれるのは確かだ。まあ、だからこそ私も種族を超えて惹かれたのだからな」

自分より強いのは相手の男に求める最低限の要素であつたが、虜囚生活や救出後の療養生活の中で、自分でも自覚していなかつたことではあるが、他にも自分の恋人に求める要素がいくつもあることに凜子は気づかされたのだ。

「傲慢で強引なのは嫌だと分かつたし、どこか可愛らしいところが無いと駄目なんだな、私は。普段はしつかりしているものの、何かに集中しだすと他のことが急に疎かになつたりと、私がお世話出来る相手じゃないといけなかつたんだ」

「……凜子ちゃん、結構わがままだったのね？」

「強くて紳士的で、でもどこか可愛らしさがあつて、夜も遅しいのに欲望のままに振舞つたりしない。私はご主人様に出逢えたことが本当に運が良かったのだと感じているよ」

凜花もこうして二人だけで話すことで、凜子は自分の意思でしつかりと彼を選んだのだと分かつてきた。

魔族であるものの、殺戮と破壊、混沌を求めることもなく、むしろ平穩を重んじる氣質。また、自分を高めることに余念がなく、勤勉で鍛錬を厭わない。西洋系の整った顔立ちであるつり目の彼が自宅の庭で畑の手入れや土いじりを楽しそうにやっている様子を聞かされて、思わず嘖き出してしまふほどに。

ともあれ、これだけだと聖人君子のようで胡散臭さが漂うのだが、弱点もしつかりあり、それが親しみやすさにも繋がっているように聞こえてきた。聞かされた彼の悪癖というのが、何にしても凝り性であるため没頭し出すと時間を完全に忘れてしまうことだという。料理についてもそうだし、強くなるために鍛錬にも打ち込むのはいいのだが、今度は食事を忘れてしまったりする。倒れかけて気づくなんてことも良くある話と言われると、残念さが透けて見えてくる。

「凜子ちゃん、認めた相手にはほんと世話好きさんだもんね。その範囲が狭過ぎて気づかれないだけで」

相手を駄目人間にする典型的な女みたいな感じとも言われ、ガクリと肩を落とす凜子に、凜花からすれば凜子の本質は変わらず歪められてもいないのだと安堵する。となるとここまで彼女を惹きつける男のことは気になるもので。

「水城さんのお母さんって、あの有名だった幻影の対魔忍……だよ。それに凜子ちゃんにあと二人、あの魔族さんの女になってるんでしょ？ 不満とか、出ないの？」

「いや、ちゃんと手を抜くことなく全員の相手をしてくれるし、夜となればむしろ私達が先に白旗を上げるのが多い。不知火さんでやつといい勝負になるぐらいだからなあ……」

「は？　ぱつと見た感じ、全然ガツガツしてるように見えないのには?！」

「うむ。基本は受け身なんだ、ご主人様は。自分から強く求めてくる時は余程、心の内に抱えるものがある時だから、むしろ喜んでお応えするんだが。ただ、精力も回復技能も並外れたものをお持ちでな、皆の相手をして翌日はたいていケロッとされている。あと、ものすごく……上手だからな。簡単にイカされてしまうから、体力を奪われるのも早いというか」

「オークみたいに、媚薬とか強制的に発情させるみたいな力を使うんじゃないか?！」
「雰囲気は大事にする方だからな、魔の力でさつきと相手を絶頂させて終わらせるのは風情が無さ過ぎて論外なんだそうだ」

そういうえば、自分の拘束中に何度か様子を見に来た時に、慣れた手つきで湯呑を手に熱いお茶を口にしていたことをふと思いつく。日本の文化に詳しいというし、風流を解すると考えればそう変でもないのかと凜花は思い直した。

「むしろ、強すぎる発情を抑えるのに使ったりしているか。あ、後は集団相手の戦闘時に動きを一気に止める時とかには使ったりすると仰っていたが」

リヴァイス曰く人型相手であれば、男性女性問わず強制的に耐え難い性衝動を引き出すことで、最低でも行動を鈍らせることが可能で、女性と男性の混成相手だとそのまま戦闘終了になることもあるという。ただし、その場をさっさと去るか、止めを刺す必要が精神衛生上必要になるらしいが……。

「うわ、なにその対魔忍殺し。こっちの前線つてたい女の子がやるんだから、天敵よねそれ」

「うむ、敵対しないのが一番だな。ご主人様の性格を考えれば、案件によつては共闘すら可能だろう」

「でも、一緒に任務とかやったら、なんか手箒めにされちやいそうな感じ」

「自分から積極的に手を出す方ではないぞ?」

「ううん、違うわよ。取り込めるとか勘違いしたこちら側が調子に乗って、屈服するパターン」

「確かに! ちなみに按摩とかも上手だからな。子供の頃にメイア殿相手にいつもやらされてる内に上達したらしくてな、ほぐされてる内に心のガードも甘くなるというか……」

その後も女同士の秘め事トークにも花が咲き、盛り上がっていく二人はどこか羽目を外してしまっていたのだろう。トークにひと段落が付き、客室への訪問を受けたリヴァ

イスはまた困惑することになる羽目になるのであった。

「なあ、凜子。疲れてしまったのか？ 熱でもあるのか？」

「その御言葉は酷くありませんか、ご主人様？」

ヘッドドレスをふわりと揺らしながら首を傾げる凜子の姿は格好も合わさって愛らしさを醸し出しているのだが、凜花と共に客室へやってきた凜子の発言があまりにぶつ飛んでいたから、その仕草の可憐さを気に留める余裕もない。ちゃっかりリヴァイスと同室となつている不知火は、凜子のなりふり構わない攻勢に女として逞しくなつてきたと別の評価を与えているのだが。

「親友に自分のセックスを見てもらいたいわって言われたら、こうもなるだろ？」

頭を抱えたりヴァイスに、凜花は『あ、この男性倫理観は常識枠かも』と頭の中で評価を一段階上げていたりするわけだが、その彼から個人的な懸念がさらに告げられる。ゆきかぜと達郎が目覚ましたとのことで、着替えたらそちらに向かうと連絡があったという。

「……達郎に私の乱れる姿を……見て、もらえる？」

「なんで頬を真っ赤にしながら唾を飲み込んでるんだ、凜子お！」

「え、っ、凜子ちゃん、そこまで業が深かったの……？」

「凜子ちゃんも拗らせてるから仕方ないわよ、リイズ？」

周りにいる女性陣が性行為に奔放すぎるのだと凜花は察してしまう。思わず、哀れみの視線を彼に向けてしまうが、逆に疑問も覚えてしまう。複数の女を侍らせる男なのだから、自分の意向に従えと強く出ればいいのではないかと。

「お兄ちゃん、お待たせ〜。つてあれ？ 凜子先輩だけじゃなくて、紫藤先輩まで」「グレイさん、御邪魔します。皆さん勢ぞろいみたいで」

これ幸いとリヴァイスは凜子を止めるためにゆきかぜや達郎の力を借りようとするが、その希望もゆきかぜにばつさりと切り捨てられてしまう。

「あー、無理だよお兄ちゃん。凜子先輩は見せつけたいんだもの、紫藤先輩にさ」「……見せつけ、る？」

「こんなに身体も心も蕩けさせてくれる相手が私の男だって自慢したいんだよ。実際、私も達郎とずっと望んでいた関係になれて、とても幸せなんだけど……気持ち良さの比較でいったら、お兄ちゃんとはほんといい勝負なんだよね」

長年の恋心のブースト効果を足したとしても、快樂の度合いでいうならば似たようなものなのだと、ゆきかぜは突きつける。

「お兄ちゃんのベッドヤクザぶりは、ずっと一つになりたいと願っていた相手とのセックスと変わらないレベルなんだから。むしろもつと自覚してちようだいって感じ。ま、これに関してはお母さんも悪いんだけどね」

不知火は悪いと思うどころか、誇りに思つてすらいそうなあたりが性質が悪いとゆきかぜは感じてゐる。生娘や経験の少ない女であれば一夜で心からの隷属を誓わせるだろう、今の義兄ならば。だが、その技量を自分の欲望を満たすただけに使わないからこそ、ゆきかぜは共に暮らす短い月日で彼を兄として認めたのだ。

「だから、私も似たようなことお願いしようと思つたの。お兄ちゃんの力の使い方を、私と達郎の身体を通して体感できないかなつて。は、恥ずかしいのはもちろんんだけど、お兄ちゃんなら変な風にしなないつて分かつてるし」

「魔族の力ではあるので、そのままは無理だと思ふんですけど……房中術を身に着けるのに近い感覚を知つていれば、上達も早いかもと思つて。その、グレイさんになら一時の恥を飲んででもお願いするべきだと、ゆきかぜとも話して、同じ結論になりました」

「うん、それは屋敷に帰つてから、俺の魔力を流してみたりとか試さないかと提案しようとは思つていたけどな！ お前達が提案してゐることは、君達のセックスを露骨に俺に見られるつてことだからな!？」

手を繋いだ状態でもなく、身体を寄り添い合つた状態でもなく、セックスの真つ最中に手ほどきしてくれと言われてしまつたりヴァイスは憔悴の極みにある。ゆきかぜや達郎が羞恥心を飲み込んででも、必要なことだと判断して真面目に言い出している辺りが余計に洒落になつていない。

ゆきかぜは義兄のことを強く慕っているが、思考は明後日の方向にぶっ飛んでいる猛進系少女であり、その相手が務まる達郎も変におおらかな部分があり過ぎた。

「ねえ。あの、なんで怒らないの？ 俺の指示に従って命令すれば済むことじゃない。貴方はこの集団の中で、一番強くて決定権もあるんでしよう？」

思わず、凜花は話に割り込んでしまっていた。自分よりも強い不知火や凜子が信を置き、従う男。圧倒的強者の立場にある者が力を行使せず周りの自由な発言を許しているのが、どうにも自分が思う強き男の像とずれている。

「そうだね、確かに俺にはこの集団の行動決定権があるのは確かだ。でもさ、圧倒的な力で支配して、自分を押し殺した、主人に傳くばかりの『人形』をいくら周りに侍らせたとして——そのどこが楽しいのか聞きたいね」

ゆきかぜの快活さを、凜子の一本気なところを、不知火の母性の強さやどこか子供のよきな茶目つ気を、どうして押さえつけないといけないのか。そのどこに面白さがあるのか。人形を愛でるのなら、そいつのオナニーと変わらないとまでリヴァイスは言い切る。

「力で圧倒する悦楽を否定はしないし、出来はしないよ。そんな一面が自分の中にあるのは確かだ。ただ、それは敵対者に対して十二分に示してやればいいことだろう？ そのために自分を鍛えている部分だってあるんだから」

「あら、そうだったの？　リイズにそんな一面があるだなんて」

「不知火、茶化さないの。強さを誇示する自分に悦を感じることであってあるさ」

「ふふ、ごめんなさい。そうね。鍛錬を繰り返して以前の強さへ近づき、さらにそれを越えて強くなつていく自分に楽しさや喜びを感じないかといえ、それは嘘だもの。模擬戦で貴方をうまく追い込むことが出来た時なんて、思わず口元が緩んでしまうわ」

「悪い顔してるよ、不知火。ま、俺は負けてやるつもりはないけどな」

「それはそうよ。追い込んだといつても、リイズは手札を制限してのことだもの。もっと貴方の本気を引き出せるようになるから、期待しててちょうだい」

この不知火とのやり取りとてそうだ。魔族に転じたと聞かされたが、つい最近まで『対魔忍』だった彼女と、魔族である彼の軽妙な言葉の掛け合いは、会話の内容はいささか物騒なものではあるけれども、紫藤家ではありえなかつた『普通の家庭』の仲睦まじい夫婦のようではないか。

「むー！　私だつてお兄ちゃんに肉薄できるようになってやるんだからっ！　達郎、死ぬ気で鍛えるわよ！」

「ああ、ゆきかぜの背中俺が守れるぐらいになつてやるさ」

そして、そんな二人に絡んでいくゆきかぜと達郎が、二人の息子と娘に見えて……。

「……紫藤さん。俺も叱るべき時は叱るし、逆に謝るべき時はすぐに謝る。俺はね、家族

に飢えていた。そんな俺に不知火は夫婦になりたいと、家族になりたいと言ってくれたんだ。ゆきかぜだつてそうだ。この歳の近い義理の親父を兄として認めてくれた」

形は歪に見えるだろうし、人の世界でよくある形でもない。それでも、家族になろうと、家族でありたいと言つてくれる人達と一緒に家族になつていきたいし、全てを賭けて守るのだと思つているのだと――。

「凜子。改めて言つておくけど、お前は俺の家族だと思つているし、すぐに魔族になるなと言つてはいるが、いずれは共に長い年月を過ごして欲しいと思つているよ？」

凜子にもリヴァイスは再度告げる。魔族に変わるということは、今までの居場所、人間関係、そういうものを全て置いてくることになつてしまう。凜子の意思が固いのは分かっている。だから、せめて、例えば紫藤さんのような大切な友達と、このまま途切れるようなやり方はして欲しくなかったのだと。

「だからといえ、彼女を巻き込んでこちら側になし崩的に引き込もうというのは感心しないな。不知火あたりの入れ知恵だろう？ 紫藤さんも久し振りの再会で気分が盛り上がったままに、凜子に引きずられるのは危険だよ。もっと自分を大事にしなきゃ」

さて、紫藤凜花という少女は、凜子の親友でありライバルと自負している。同世代の中で飛び抜けた実力と合わせて、プライドについても人一倍高く、結果として高飛車な物言いが常であつた。悲しいかな、友人となれば凜子を含めて、本当に片手の指で数え

られる程度のもの。まして、対等に物を言い合えるとなれば、凜子は本当に希少な存在だった。幸か不幸か自信を折られる経験が殆ど無く、そんな彼女を強く諫める者もいなかった。

そんな彼女は自分の自覚以上に凜子の存在に寄りかかっているとどこかあるのだ。凜子の誘いに乗ってしまったのも、彼女との繋がりを切らすまいと強く無意識に求めてしまうがゆえ。

「私は、私にとつて大事なものは、凜子ちゃんの存在よ。大切な親友だし、ずっと競っていくライバル。だから、彼女には何においても負けたくないの」

この場に教師である高坂静流がいれば、彼女を止めただろう。だが、彼女はこの三日間の拘束から解かれ、不知火とリヴァイスの手による、消化が良く、栄養価と味にも優れた料理に舌鼓を打ち、ぐっすりと夢の世界で安眠中だった。熟睡状態のため、自分に危機でも迫らない限り翌朝まで目を覚ましはしない。

「それにね、対魔忍という仕事柄、いつ『初めて』を散らすかだなんて分からない。今回だって貴方がそのつもりなら、私はとつくに強引に犯されてもおかしくなかった。それに、あげてもいいって男にも今まで会うこともなかったしね。まあ、親は色々考えてるみたいだけど、それは別の話だし」

だから……凜子ちゃんの愛され方を見物するんじゃないなくて、自慢するぐらいの貴方

に、あげるわよ。私の初めて。こんな綺麗な女の子の初夜をもらえるのよ。忘れられない、素敵な夜にしてみらいますからね？

自分が勢いのまま、強引に押し付ける形になっているのを自覚しつつも、リヴァイスの唾然とした表情を引き出せたことで、やっと一撃を返せたという思いが凜花の内にはあった。

砕かれる自尊心

「突つ撥ねても良かったのに、お人好しよね貴方。魔族なのにお人好しつていうのも変だけど」

「真剣に乞われて、しかも男として初めての相手となれば嬉しいに決まつてるさ。初めては自分で惹かれた相手に捧げろと容赦なく突き返すほど、聖人になれるわけもない。そもそも、聖人もとい聖魔つて概念があるのかは知らないけどさ」

「魔族好しつて言葉も無いんだから、まあ気にしなくていいんじゃない？ 言葉遊びみたいなものだし」

少しは酒でも入れないとやつてられないと、リヴァイスはホテル内の売店で手に入れた安価なワインを、ジンジャールやコーラ等と合わせて、飲みやすいカクテルに変えつつ、チーズをつまんでいた。なお、毒や異物の混入確認についても水遁の術は有効であり、それを聞いた凜花も隣でワインベースのカクテルを楽しんでいる。

「ふふ、それにしても、本当は悪い男なんだよ。女の子を酔わせて抱くつもりなの？」
「そう言いながら、俺よりピッチが早いのつてどうなんだよ。いくら口当たりがいいからってさ」

凜花は上機嫌でリヴァイスを揶揄つて笑みすら浮かべている。多少の女のわがまは可愛げとして受け止めるのがリヴァイスの性格だと分かってくれば、これくらいの毒っ気で気分を害することはないと確信すら覚えていた。

「だって、家じゃこんなこと出来ないしね。かといって、任務中に堂々とお酒を口にする機会があるわけでもないし」

凜花の『私の初めてを奪いなさい』発言後、まず、ゆきかぜと達郎が即座に戦略的撤退を選び、さっさと自分達に宛がわれた客室で二人の時間に戻っていった。ゆきかぜは無駄にいい笑顔でサムズアップを決めて、達郎は不知火から渡された強壮剤ドリンクを手で戦いへ赴く男の顔をしており、凜子がキュンとする一幕があつたりもした。

次に隣室で休むという不知火が凜子を引っ張っていった。なお、明日以降の動きも屋敷にいるナディア達と調整しておくし、その関連で当面、起きてもいるので何かあればすぐにテレパシーで呼べばいいと言い残して。

「で、凜子ちゃんに何をどうやったたら、如何わしい店のコスプレなんかじゃなくて、あんな本格的なハウスメイドさんになれるわけ？」

「凜子は不知火やナディア、メリアとの差別化を図りた……」

「ちよ、ちよつと待ちなさい！ いえ、その話はもちろん聞きたいんだけど、その前にさつきも不知火さんから名前が出たけど、ナディアやメリアって名前、もしかしてもし

かするわけ……?」

凜花は慌ててリヴァイスの声に割って入る。リヴァイスの口から出た名前は聞き逃すわけにはいかない名前だったからだ。魔族の中でも上位に位置づけられる脅威として必ず覚えさせられる名前だ。

「ああ、それぞれ魔界の踊り子、血の女王と呼ばれているね、二人は」

「対魔忍の間でも超有名な魔族の二人じゃないっ。その二人も自分の女だつて言うわけ!? それこそ、ノマドのエドウィン・ブラックと並ぶほどの……って、どうしたの？」

険しい顔しちやつて」

「ん? ああ、何でもないよ。些細なことさ、あのブラックに比べればどうだろうって思つて」

そんなことを考えた顔つきではないのは一目で分かる。魔族ならばノマドの創始者たる不死の王エドウィン・ブラックを知らないことは無いだろうが、明らかに何らかの強い感情を抱いているのが見て取れるのだから。

「ふーん、確かにブラックは有名すぎるものね。私たちの中でも最大の脅威であり、かつ最凶の敵と位置づけられているわ」

凜花は自分が認めた相手において、一定の敬意をしっかりと持っている。だから、彼の煩悶を今は指摘せずに流すと決めた。変わらぬ調子で話の先を求める風を装う。

飲み出す前に最後の確認とばかりに軽い手合わせを要望し、短い時間ながらリヴアイズと相対した凜花は、飛び紫煙を含めた自分の体術を初見で捌いてみせる技術や機敏な動きと共に、彼が本気を出していないことも思い知らされたのだ。魔族の恵まれた身体能力や魔力で圧倒する力押しの闘い方ではなく、確かな戦闘技法を身につけた、こちらの攻撃をいなしつつの的確な一撃——もちろん、寸止めではあったわけだけでも、凜花が自身を納得させるには十分なものだつた。

凜子との関係性を断つつもりが無い以上、彼と顔を合わす機会はこれからも巡ってくるわけで、今晚限りの関係性となるのか、あるいは別の付き合い方になるのかは見通せなくても、いずれ知る機会があると凜花は判断を下していた。

「それで、それほど有名な魔族まで自分の女にしてる貴方に対して、凜子ちゃんは自分だけの強みが欲しくてあんなっちゃったわけだ」

「ナディアは別としても、メイアは元々領地持ちだからな。従者の立ち振る舞いには元々詳しいから、その辺りは丁寧に助言したみたい。俺と一緒に住むようになって、屋敷のことを統括できる従者を育てたい狙いもあったって言ってたな。そこに肉付けするような形で、不知火が家事全般や所作を徹底的に教え込んで……」

「凜子ちゃん、こうと決めたらとことんだから……熱心に取り組んで余所見しないから、身に着けるのも早いよね」

「家のことは別に俺と不知火でやれるって言ってるんだけどね、メイアにすると家令や従者がいるのが『当たり前』だからって。まー、長年支配階級やってきてるからなんだろうけど。畑とか弄ってる時は絶対に近づいてこないしな」

自前の作物を育てていると無心になれるし、育つのを見るのも楽しい。あとは食べても美味しいと屈託なく笑うリヴァイス。

日本の文化に触れる中で米が大好きになったものの、魔界の土壌や水だと上手く育てられなくて、室内栽培に忍法を組み合わせて、屋外と似た生育環境が作れないか試しているのか。不知火の作る魚の煮付けが絶品で、真似してやろうと何度も自分で作るものの納得行く出来にならなくて、結局、得意とする洋食に逃げてしまふであつたりと、そんな日常の生活を楽しそうに話す彼に、凜花も警戒しているのがどんどん馬鹿らしく思えてくる。

「ふふ、ほんと変な魔族なのね、貴方。本気で自家菜園やってるとか、闘争を主とする魔族の枠からどれだけ外れてるわけ？」

凜花は座る位置を移動させて、リヴァイスに密着するように隣に腰掛ける。自分の柔らかな身体を意識させて、この後の主導権を少しでも自分に手繰り寄せるために。けれど、ふわりと彼の身体から漂う香りがどこもなく甘く、身体の芯に熱が灯るような感覚に囚われそうになり――。

「悪い、酒を入れたことで臭いが強くなってたか」

不意にその感覚が遠ざかる。まだ靄のかかる思考で彼の魔族としての魅了能力が漏れ出たと考えられたものの、その感覚にこのまま浸ってしまいたいと凜花は思い切って彼の胸へと顔を預けた。こちらを爰に操ろうとはしないという彼への信用も、彼女の内に芽生えていたから。

「あっ……♪」

戻ってくる。お腹の奥底に、女の芯の部分に、熱く、強く何かを求める感覚が。これが媚薬を飲まされたのに近い身体反応だと、凜花は気づきつつ、受け入れると決めていた。

「ふっ……淫魔の力なんですよ？ 凜子ちゃんに聞いたわ、だから抑えようとしてる、貴方。でもね、私は今から貴方に抱かれるって決めてるのよ？ だったら、私を興奮させたところで責任取ってくればいいじゃない？」

意識が吹き飛ぶほどのものではなく、どこか感覚に浸っていたいと思うぐらいの柔らかな刺激。疼き始めた身体に考えが少しずつまとまらなくなっていく過程を、凜花は体感し始めている。

「さっきも言ったけれど……素敵な夜を、ちょうだい？」

それが合図となり、リヴァイスは凜花を抱え上げ、ベッドへと運んでいく。そつと凜

花の身体を横たえた後、まずは手の指先や足の甲から、彼の唇が、手が自分の熱を伝えるように触れ始めた。

キスの雨。指先を唇に含み、啄む。軽く手を重ねながら、優しくさするような動き。どこか擦ったいくらいの愛撫なのに、身体の熱は高まり、緊張していたはずの力が抜けていく。自分の口からこぼれ出る甘ったるい声に、自分がこんな声を出せるのだという小さな驚きを経て、その驚きごと熱に飲み込まれていくのだ。

「上手よ……貴方、力なんて使わなくても、私のもすごく身体が熱くなっている……あ、んっ……♪」

対魔忍スーツの下から、押し上げるように硬さを増して存在を主張する乳首が擦れる。触れて欲しいと思うのに、彼の手はその周りを——凜子に負けず劣らずの大きな膨らみを宥めるように手を動かす。

「あっ、く、う……」

焦らされている。気持ち良さよりもじれったさが、もつと強い刺激を求める身体の悲鳴が凜花の感覚を焼いていく。

「んぐっ！ んーっ！ ん、あむっ、じゆる、んーっ、あむっ、はあ……」

衝動に従って、凜花は動く。身体を起こし自分からリヴァイスの唇に自分のそれを重ねて無理やり舌を捻じ込み、彼の手を胸の突端へと導く。歯が軽くぶつかったことも意

に止めずに、凜花の積極的行動に応えたりヴァイスの舌の動きは、絡ませ方を凜花に教えるようなゆったりとした動きで、導かれた手も指で挟みこむこともなく、指の腹でそつと刺激を加えるだけ。それでも、望んだ刺激を自分から掴み取った凜花はその悦びに頭が短い時間ながら真っ白になる感覚を覚えていく。

「つ……い……あ、い、いまの……う？」

「うん、軽く達したんだよ、紫藤さんは。淫魔の力に最初から頼るのもどうかと思つて切つたつもりだったんだけど、抑えきれてなかつたのかな」

俺のミスだという言い方をするリヴァイスだが、力の影響が及んでいるかぐらゐ感じ取れない凜花でもない。自分の意思で絶頂を得ようと動いた結果なのだ。自分が思つた以上に興奮が高まつていることで、優しい刺激で登りつめてしまったのが予想外であつただけのこと。

身体をリヴァイスに預けて、息を整える。その間、彼の手の動きは止まり、凜花をそつと抱き止める姿勢で支えるのみ。

これは卑怯だ、そんな風に思う。男に女としてこゝも大切に扱われていれば、身体ばかりか心も開いてしまうではないか。

「変なだけじゃなくて、狡い男なんだ。女の誑し込み方をよく知ってるのね？」

息が落ち着いてきた凜花は、今度は啄むように触れるだけのキスを繰り返していく。

自分から触れることで、今夜は唇も含めて自由にしているのだと。彼の首に腕を回し、一緒にベッドのスプリングへと身体を投げ出して、抱き寄せたまま耳元で囁いてみせた。

「朝までは、凜花って呼ばばいいわ。それ以降は、貴方の頑張り次第。ただ、私はそう安くはないわよ?」

一度頷いたリヴアイスの手つきは優しき一辺倒ではなくなり、凜花の胸を、秘部を、髪を、唇を、臀部を……反応を探りながら、動きを徐々に強弱を入り交えたものへと変わっていく。

強がって余裕ぶつてみたものの、彼に反撃するには凜花は男性への責め手も知らず、ズボンの中で大きさを増した彼の生殖器を撫でるのが精一杯。声を上げて、欲に蕩けていくのは凜花ばかりであった。

「二度大きく達したほうが、繋がる時もない力が抜けて楽になるから……俺に任せきるのには癪かもしれないけどさ」

軽い絶頂の波に幾度か飲み込まれた凜花は、ふとひんやりとした空気を感じて、意識せぬ間にスーツの胸部がずらされ、豊かな膨らみと硬く張った突端が外気に晒されていると気づく。

衣服の上からではなく直接肌を刺激されて、刺激を欲して焦れていた箇所に触れられ

て、また意識が白に染まる。スーツの上から大きなシミの形となりハッキリと確認出来るほどに、既に秘部からはとめどなく愛液が溢れ出て止まらない。

リヴァイスの問い掛けにあえて答えないのが、凜花に出来るせめてもの抵抗だ。身体は彼の手だれに陥落していることに目を瞑りながら、簡単に屈していると認めるわけにはいかず、言の葉で敗北を安易に口にしてなるものかと、明らかに悦楽を感じている艶が多分に混じった嬌声を上げ続けながら、凜花は無謀な闘いを続けていた。

「触れるよ?」

彼の手がとうとうズボン下の下腹部へと潜り込み、陰核を撫でて軽く摘んだのが、彼女の限界となった。

「おほおほおほおほおほ!」

激しく身を震わせ、全身を海老反りの姿勢で硬直させながら、白目を剥きながらの絶頂。身体が待ち侘びていた箇所への刺激は、大量の失禁と共に味わうこととなった。

「あ、あああ、嘘、嘘よお、やあ、止まつ、止まらない……」

こぼれる声に嗚咽が重なる。オーガズム直後の放尿による原始的な気持ち良さに蕩けてしまっている自分と、止めたくても力が入らず成すがままに垂れ流すしかない惨めな自分。誰にも見られたくない情け無い姿を、初めて身体を重ねる男の前に晒している。

「いいんだよ、凜花。俺が刺激したんだから、凜花は悪くない。さあ、まずはシャワーを浴びよう。少しはスッキリするだろうから」

自分にも掛かったことを気にするでもなく、リヴァイスは凜花を抱き上げて、備え付けのシャワー室へと向かう。凜花は大人しく彼の胸に顔を埋めて、表情を見せようとしていない。両手が塞がっていても、そこは魔族の彼。水遁と風遁の合わせ技で寝台のクリーニングも進めてしまっていた。

「なんで、怒らないのよ。粹がってた癖にこんな体たらくなのにな」

「ここが戦場なら、冷静さを奪うためにわざと煽ったりはする。ただ、今の凜花と俺は一緒に一夜を楽しもうとしている同志つてとこだろ。相手が落ち込んでいるのに、自分だけ楽しむって言うのなら一人でマスを掻いてろつてな」

急に粗雑な言い方になったリヴァイスに小さな驚きと共に思わず顔を上げる凜花だが、当の彼はどこかバツが悪そうにするのみ。シャワー室へ入ると凜花をユニットバスの縁に腰掛けさせて、風遁で乾かせばいいとリヴァイスは服の上からノズルから出た温かい湯を掛けていく。

「素はこつちなんだよ。立場柄取り繕った物言いはナディアやメリアに叩き込まれたから。そのナディアやメリアは今でこそ俺の女だけけど、あの二人に引き取られた当時は俺も小さくてさ、それこそおねしょの始末とかまでしてもらってたんだぜ。向こうはずっ

と覚えてるわけでき、恥ずかしさって意味じゃ俺も相当だろ？」

「あはは、なるほどね。どこか鼻に付く部分があったってそういうところだったわけ。ふふ、そっちのほうが『らしい』感じがするわよ」

「ここまで来れば、凜花も開き直るしかない。自分から濡れて脱ぎにくくなっていた対魔忍の装束を強引に？がし、裸体をリヴァイスの前で披露する。

「ほら、貴方もさっさと脱ぐ。……なに？ 私の身体が綺麗だから見てしまうのは仕方がないけれど、呆けてないでこのスーツを約束通り乾かしておいてちょうだいね？」

実際、凜花の出る所は出て引き締まるところは引き締まっているメリハリのついた裸身に見惚れていたリヴァイスだったが、彼女の言葉に覚悟を決めるとどうにも自分以上に男前な行動を取る女性にどうにも縁があると思いつつ、彼も自分の纏っていた服を脱ぎ捨てていく。なお、脱いでる姿を見ている凜花の目の輝きが明らかに増していることに、濡れた服を脱ぐことに意識を向けていたため気づくことはなかった。

「……………!？」

「すごつ、私以上に鍛えてるっ。ああ、あのお腹の割れ方とか、素敵よね？ 元々の種族としての身体の頑強さに依存することなく、しっかり鍛え抜いているのね……。それに背中や肩に残る古傷の痕も、なんだろ、すごくサマになつてない？ 凜子ちゃん、なんで教えておいてくれなかったの！ って、ええええ、あれが男の人、違う、男魔族の

ソレ!? 教材で見たオークほどの大きさじゃないだけで、形の凶悪さは同じじゃない!
あれが今から私の中に、入る……の? 耳元でさつきみたいに甘い言葉を囁きながら、きつとゆつくりと押し広げられて……。

——凜花の心の揺れ動き方が、凜子の親友たるだけあるとまでは、リヴァイスが見通せるわけもなかったのである。

この部屋はしっかり監視されています

「あらあら。意外と積極的ね、紫藤さんたら」

「ご主人様への安心感と、開き直りの良さが出た感じでしょうか。しかし、この米連からの虫型ドローンはあれだけ小型なのに、映像も音声も鮮明ですね……」

「魔力や忍法だとかえって察知されやすいこともあるから、機械も使いようよ。対抗策をしっかり打つためにも、知ることは大事ね」

ナノマシンへの対応策など知覚が困難な攻撃方法への手立てとして、リヴァイスや不知火はその辺りの研究にも余念がない。むしろリヴァイスがのめり込み過ぎるのを不知火が性的に襲いかかることで止めることも数多い話なのだが……その研究の一環で鹵獲した米連製の機器も改造して使うぐらいのことは二人には日常の延長であった。

『おほう♪ あひい、またイツて、おほおおおおつ！ いまいじるのらめなお、おほっ♪』

しやああああ……。

なお、その技術の成果を使ってやっていることは、自分の男の情事を覗き見しているわけだが……残念ながら、ツツコミ役のゆきかぜは別の客室で達郎とヨロシクやっている

る最中である。

凜花のアへ顔やイキ声以外に、しつかり聞こえてくる放尿音。気位の高さで有名だった凜花を鑑みれば、見るに絶えない醜態を晒し続けている。そんなことを感じる余裕も無いほどに彼女は責め立てられ、悦楽の海に深く沈んでしまっていた。

「凜花は潮吹きしやすい体質だったのか……ご主人様は流石です。風呂場ならいくら責めても掃除の手間が省ける」

「クンニも初体験でしょうしね。壁を背に浴槽の縁に座らせたのはリーズの判断だけで、それでも彼女の身体が今にも崩れ落ちてしまいうね」

「……ご主人様の寵愛を頂いている時の私は、ああいう顔をしているのでしょうか」
「お互いさまよ。最近のリーズは本当に……本当に優秀な教え子だから、私も飲み込まれてしまうほどなもの」

救出された頃の自分は半ば淫魔化しかけていたこともあり、間の取り方や声の掛け方も含めた男女の営みに関する技法を徹底的に教え込んで、自分の渴きを満たしていた不知火だったが、ここ最近のリヴァイスの上達ぶりに逆に圧倒される日も出てきていた。不知火ですらそうなのだから、リヴァイスがその気になれば、凜子やナディア達は歓喜の雄叫びを上げ続ける発声装置と化してしまう。

「ご主人様が女性を組み敷いて悦に入るタイプで無くて良かったですよねえ……」

「ええ、痛感しているわ。以前は私の教えを吸収するのに必死なところがあつたけれど、最近はずいぶん自身に随分と楽しむ余裕が出てきているもの」

責め方の細かい強弱で、こちらの反応の違いを見て楽しんでる節すらある。いい意味で遊び心が出てきたのだ。ともあれ、その根底には女をより気持ち良くさせようという意思があるから大きく外すこともなく、受ける不知火達からすると、新しい性感帯を開発されているような一面すらある。

『はあ、はあ……夢、みたいね。自分が認められる強い男に、女として愛される。どこかで夢見てた、けど、私は対魔忍だから、多分無理だつて。割り切ったつもりでいたの』
『うん』

『ここまで蕩けさせられて、お腹の中がずっと啼いてる。……ねえ、貴方は最後まで、素敵な時間にしてくれる?』

『俺なりの、やり方になるけど』

『じゃあ、間違いないわね。いいわよ、私の初めてを奪ってちょうだい』

モニターに映る凜花の表情は、リヴァイスに愛され満ち足りる時の不知火や凜子の顔にそっくりになっている。

「ああ、凜花が完全に女の貌になっています。これは堕ちますね、明日からはご主人様の女ですよ」

即墮ち経験者の凜子がドヤ顔で呟くのを見て、不知火は対魔忍の業の深さを思わず省みてしまいながらも、画面の向こうの営みは続いている――。

幾度もアクメをキメさせられ続けて、それなりの体力と一緒に、身体の強張りも奪われ、程よく弛緩した状態の凜花はリヴァイスの両腕でベッドに運ばれるままになつていた。むしろ自分から彼の胸に頭を預けて、運びやすいように手助けまでしている。

「もう、まるでどこかのお姫様を扱うみたいね」

「……今晚だけはそんな感じでもいいんじゃないかな」

「責めは随分徹底してるみたいだね？」

こんな軽口を叩いても笑つて流してくれると分かる程度に、心の距離感は縮まつていた。自分より強い男であることを分かりやすく体現するかのような、鍛え抜かれた肉体。古傷が残っているのが厳しい戦いを潜り抜けてきた証のように見えて、凜花の鼓動は高鳴つたまま落ち着きを見せない。舞い上がっている自覚がある分、意識して普段どおりの自分を演じていた。普段どおりの自分を出来るだけ装っていないと、自分が一気に変わつてしまいそうな怖さも覚えてしまっている。

「そりゃ身体が強張つていたら、痛いだけで終わつてしまうから。俺とのセックスつて

いいな、気持ちいいもんなんだなって思わせたいんだ。だから必死なんだよ、わりと」
「ゆきかぜちゃんのお母さまや、凜子ちゃん、ナディアさん達だけじゃ足りずに、私まで本気で落とそうというわけ？ 強欲ね」

「ん？ 凜花はそこまで安い女じゃないだろ。まずは御眼鏡に叶うところまで行ければ御の字つてとこだ」

ううん、貴方の身体つきは私の好みど真ん中なのよ！ などと叫びかねない凜花はもういつそ恥も外聞も捨て去って、自分から貴方の女になる宣言をしまおうかぐらいには頭の中が錯乱していた。性格は魔族であることを疑うほどで十分に合格点、肉体的には満点の倍満である。一人ぐらい女が増えても何とでもしてみせる甲斐性もあるよ。うだし、別に働くのを苦にするわけでもない自分が稼ぎ頭になっても問題は——。

「何が稼ぎ頭なんだい？」

「え？ う、嘘、私、口に出して……」

とつくに普段どおりにすら出来ていない始末。凜花さん、大暴走中であつた。身体が茹つている以上に脳内がふやけてしまつている。

「落ち着いて、凜花。不快なら止めるから、言つていいんだぞ？」

耳元で囁かれた、低く落ち着いた声。凜子とまた違った方向性で残念な一面を隠し持つ凜花はどうとう勢いのままに、リヴァイスを押し倒し、目をぐるぐる回したまま、彼

の剛直に自分の股座の位置を合わせてしまう。

「逆よっ！ 私好みの身体つき過ぎて、もう我慢できないのよおっ！」

経験もなく、さらに混乱の極みである凜花が自らによる挿入がうまくできるわけもなく、二人の性器は繋がらずにするりと滑るばかり。その擦る感触もまた気持ち良さを生むのだが、待ち望むものではなく。

「凜花、大丈夫。ちゃんと一つになれるから」

声をかけるリヴァイスが自分の腰を支え、少し位置を合わせれば……。

「あ、ああああ、入って、きたあ……!? はうんっ！ あ、あれ、全然、い、痛く、ない？」

ぶつつと身体の中で千切れる音の後に、ズンつと一番深いところに伝わる振動。その衝撃に甘い声漏れるものの、覚悟していた痛みは襲ってこなかった。

「それでも淫魔の端くれだよ？ 痛みの感覚を鈍くすることぐらい出来るさ。力は極力使わないといっても、こういう使い方はしていかないとね」

奇しくも、騎乗するような体勢で自らの奥深くまで挿入された初めての男の生殖器。構えたはずの痛みが殆どなく、困惑の声が漏れてしまう。そんな凜花にリヴァイスはすぐに動くことなく、実際の痛みを疼きに似た感覚に変えているだけだからと、身体を起こしてキスや胸部への愛撫を続けていく。

「やあつ、こんなの、狡い、狡いわよお。最初にこんなに丁寧に優しくしてもらえたら、ずつとあなたのこと忘れられなくなるう」

「それが狙いだつて。ただ、動き過ぎると翌日の痛みが酷くなるから、あまり動かなくて、繋がったまま気持ち良くなれるようにするよ」

リヴァイスは身を起こして対面座位の姿勢となる。子宮への入口を軽く押し上げられつつ、円運動に近い動きで解されていく感覚を覚えながら、唇へ、首筋へ、乳房へ、乳首へ……リヴァイスの唇や手は休むことなく、柔らかな刺激を与え続けていく。凜花は自分の身体と心がどンドン堕ちていくような体感に囚われている。なのに、身体も心もこの状況から逃れることを考えようともしない。もつと深いところまで堕ちたいと望んでいるかのように。

「ひどいい、ひどいわよお、魔族つて本当にずるいい、ひゃん、ああん、いいの、いいのお♪」

「うん、俺のせいでもいいから、凜花。もつと気持ち良くなればいい。俺も凜花の中すごく締め付けてきて、とても、くっ、いいんだ」

「知らないんだからあ、ここまで蕩けさせて優しくしてえ、私を引き剥がすなんて、そんな身勝手なことさせないんだからあ、ねえ、ああん♪」

それは従属宣言に等しい。女として目の前の男のモノになると自ら誓いを立てるよ

うなものだ。場の雰囲気流されている部分があるのは否めないが、凜花が心のどこかで強く望むからこそその言葉。

「重たいんだからね、私だつて凜子ちゃんと似たようなものなんだからあ♪ やつと見つけた、私が認められる男を離してなんかあげないし、無理やり孕んで、産んだ子供と一緒に付きまとうぐらいするんだからあ！」

思考や人格を壊すような破壊的な快楽ではなく、気持ち良くなつて欲しいという相手の気持ちを感じ取れるやり方だから、凜花は構えることなく快楽に浸っている。やつと見つけた相手を離すものかと、熱に蕩けた脳が理屈を吹き飛ばして本能のままに叫んでいた。

「孕ませられるんじゃないやなくて、凜花が自分から孕むのか!? それは一生、最後まで俺の女でいるつてことだろ! 実に男冥利に尽きるなつ」

腰の動きを早めるリヴアイスに必死で合わせる凜花。言葉でも剥き出しの本音を休むことなくぶつけていく。

「だつてえ! あああん、学園で強い子はあ、ほとんど女の子ばかりでえ! 先生達も大半が女! たまに強いのがいても、性格最悪、はあん♪ だつたりするんだからあ! 男なんてつて、どこかでえ、ひゃん、思つてたあ!」

「親しくなつたばかりの、凜花を抱いてる、俺だつて!」

「本気で、私をお……気持ち良くしようとしてくれてるセックスだもん！ 女はそういうの、絶対に分かるんだからあ！ ああ、ああ、わかる？ ねえ、分かる!?」

絶頂の予兆。接合した男根へ精を吐き出せと本能の為せる強まっていく内部の締め付け。凜花は挿入で初めてのオルガズムを迎えようとしていた。

「貴方のおちんぽでイっちゃうからあ、私のオマンコ貴方のオチンポに堕ちちやうからあ！ 気持ちいいのっ、貴方とのセックス、もうやめられない、あ、あああああ、イクう、イグううううううううううっ!!!」

首を折れんがばかりに仰け反らせながら、潮を我慢することなく壮大に噴き出しつつ、凜花は挿入アクメをキメる。タイミングを合わせるように同時に始まるリヴァイスの吐精。その勢いと熱にさらに子宮が咽び泣き、いよいよ凜花はアクメから降りてこれなくなっていた。全身は激しく痙攣し、彼の首にしがみついていたはずの腕はだらりと垂れ下がり、彼に首筋や背中を支えられるがまま、ただただオルガズムの大波に飲まれ続ける。

——凜花が自分の身体の制御を取り戻したのは、彼の吐精が収まってから随分と経つてからのことだった。

「凜花、はい、白湯だよ。ゆっくりと飲んで」

彼から渡されたコップの水分を言われるがままに飲んで、一息をつき、やっと凜花の

思考が戻ってくる。淫魔の力を使われたのではないかと思うほどに深く長い絶頂。ただ、そうではないことを凜花が一番分かっていた。時間をかけて快感や絶頂の感覚に慣らされて、心を解放して全て相手に預けたことにより、身体も引つ張られる形になったのだと。

「もう……初夜の女の子にここまでセックスの気持ち良さを教え込んだら、本当に悪い男ね、貴方。ふふ、絶対に離れてあげないんだから、覚悟してちょうだいよ？」

繋がったまま、リヴァイスに寄りかかる形でベッドへ寝そべる体勢となった凜花は微笑む。その微笑みに凜子と同じような想いの強さを感じ取ったリヴァイスは親友同士、気質まで似る部分があるのかと苦笑いしてしまう。

「あはは、一晩で認めてもらえたのは予想外だけど、こうなった以上自分から凜花を手放すなんて考えられないな。ただ……」

「……ただ、なあに？」

リヴァイスの声に落ち込むものを感じた凜花は、硬さを取り戻しつつあるリヴァイスの下半身から与えられる気持ち良さを意識から極力取り払う。理性を手放すも引き寄せるも、今は彼女の制御下にある証拠だった。あとは彼女が『いい女』ムーブをしつかり決めたというカッコつけな一面があることも影響している。

「凜子に元の世界の繋がりをしつかり考えろと言ったのに、凜花に傍にいろっという

のも都合のいい話だよなって」

「ふふ、元は凜子ちゃんに、私も含めて人との繋がりを切るなって話でしょ？ だったらね、逆に考えちゃいませうよ。人は連れてきちゃえばいいんだって」

モニターの向こうで『凜花は天才か!?』と素に戻って一気にボルテージを上げるメイドさんの姿があることは二人からは見えないわけで、話はそのまま続いていく。

「際限なく引き抜いたら、対魔忍としての組織が弱体化してしまうけれど——そこは厳選すればいいし、貴方、敵も多いみたいだしね？ 足手まといになる子を連れてきても仕方ないもの。人間よりの魔族と提携して遂行する長期任務の体を取れば、長期間キングダムなり魔界で過ごすとしても任務だから、で通せる。というか、そういう任務に就いてる先輩方も多いうって聞くわ」

細かい部分はもちろん詰める必要はあるでしょうけど、ゆきかぜちゃんのお母さんがその辺り詳しくそうだからと凜花は話を結んだ。

「人を捨てて欲しくないと思っただから、ゆきかぜは達郎と共に元の世界へ戻すつもりだったんだ。凜子にも安易に魔族になることを選んで欲しくなかった。不知火は自分で覚悟を決めてくれたし、将来俺の子供を産むためにも魔族になることを選んでくれたけど……」

魔族として生きるからには、種族柄どうしても闘争と無縁とはいかないから。あと、

長い時を共に生きるっていうことを、その意味を何年か掛けて考えて欲しかったのだと。

「ただ、結局俺の覚悟が足りなかっただけか。俺の手で絶対に幸せにして、幸せなままでいさせるって覚悟を」

「うーん。確かにそれぐらいの気概は持っていてほしいけど……そうね、私も凜子ちゃんも相手に求める条件が多いの。この男だつて決めたら他への興味がすつと失せちゃう性質だつて、自分が一番良く分かつてるから」

だから、と凜花は続ける。一族の血を繋ぐための両親のどこかビジネスライクな関係性を見て、彼女はうんざりしていたのだ、十二分に。人だろうが魔だろうが、相手を見て相手を思える男ならば……。

「それで自分が見定めたのなら、その男とどうやってずつと幸せでいるかを考える感じ？ 最初の難しい条件をクリアしてるんだから、後は自分の努力次第っていうか。男をうまく輝かせられるのも『いい女』の条件だと思うのよね」

互いによくやろうとする努力や歩み寄りが出来なければ、仲睦まじい男女関係なんて無理でしょうと。

「……一緒に暮らすにしても、眷属になるかはゆつくり考えて欲しいな」

「まあ、ね。私もわりとややこしい家の生まれだし。でも、貴方以外の子種はいらないっ

ていうのは本気よ？ うーん、まだ父は子供が出来ない年齢でもないし、早めに生死不明扱いになつちやうのも一つかも」

「凜花もわりと過激思想なのな……」

「あら、自分にとつて一番大切なことは何かを常に見据えてるだけよ？ これからは貴方とその家族も含めて、になるけれど」

元々、割り切りと思い切りの良さを持ち合わせる凜花である。理想の男と親友がいるこの環境。邪魔する者を色んな意味で叩き潰せばいいと、至つてシンプルな結論に辿りついているのだった。

悪だくみの時間のようです

心地良い気怠さとお腹の中の鈍い痛みを感じながら、凜花は目を覚ました。正しくは、痛みを飲み込むような下腹部の疼きに身体が反応したからというべきだろうか。

「ふが、ふやはひょう……じゆる、じゅば……」

「あら、おはよう紫藤さん。ふう、随分と軽くなったわ。さ、リーズ。反対側のおっぱいもしっかり吸ってちょうだいね？」

そして、凜花の瞳に飛び込んでくる光景は酷く奇妙で淫らなモノ。メイド服が板にっいている親友の凜子がリヴァイスのペニスを咥え込んで、熱心な口内奉仕に励んでいると思えば、そのリヴァイスは頭部ごと抱き寄せられた姿勢のまま、不知火の胸に吸い付いている……というか、半ば顔が埋まってしまっている。

初夜の翌朝に関わらず、痛みや違和感よりも疼きが上回っているのは、性的に興奮しているリヴァイスから淫魔の力が滲み出ているからだ、凜花は靄がかかりそうになる頭を軽く振りながら、当たりをつけていた。昨晚で完全に覚えてしまった、あの甘くて身体に痺れが回るような香りだ。間違いはないだろう。

「えっと、これはどういう……」

「あら、昨晚は貴女がリイズを一人占めしたわけでしょう？ 私や凜子ちゃんはお預けをされたようなものだもの。だから、朝から相手をしてもらっているのよ」

「あ、えっと、そ、その、昨日はごめんなさい……あう、うう……」

反射的にお詫びの言葉を口にしたものの、昨晚の睦み事が脳裏に浮かんできて、頬が熱くなるのを自覚し、凜花は思わず両手で顔を覆い隠してしまう。あれだけ嫌憎の色を剥き出しにしながら、自分に噛み付いてきた昨日の彼女の様子は最早、身も形もない。

そんな豹変ぶりに思わず、小さな笑みをこぼした不知火だったが、リヴァイスが自分の腕をしきりにタップしているのに気づく。強く抱き寄せていた腕の力を幾分弱めながら、凜花への返事を軽く済ませつつ、リヴァイスへと小さな不満を乗せた甘えた声色を発していた。

「ええ、お詫びの気持ちはこれからの貴女の働きで示してちょうだい。……で、リイズ？ まだ重たいのだから、もっと吸って欲しいわ」

「息が出来ないぐらいに強く抱き寄せておいて、良く言うよ不知火。おっぱいで溺れ死にとか、別の意味で淫魔界で語り継がれることになってしまふ」

苦笑いしながら、奉仕を続ける凜子の髪をそつと撫でつつ、リヴァイスは大人しく（？）不知火の母乳を吸い出す作業に戻っていく。吸血の代替手段でかつ、常時母乳が出

る体質の不知火にとつても、乳腺炎を防ぐために大切な行為と聞かされて、凜花は困惑の渦中に落ちていく。

なにこれ。淫靡なはずなのに何だかとってもシユールなんだけど。私、何を見せられてるんだろう。

凜花の心の眩きは誰にも伝わることなく、朝の空気に溶けていくしか無かったのだつた。

「水城不知火さん。私の思い込みで、貴女の大切な方を侮辱するような失礼な発言の数々、大変申し訳ありませんでした」

「リーズが貴女を許し、自分の女にする以上は……私もその意思に従うだけよ。ただ、私が強い怒りを覚えたことは忘れないでちょうだい。年甲斐も無いと思うかもしれないけど、それだけリーズのことは本気なのよ」

そんな妙な朝の光景が過ぎ去った後。昨晩と今朝の交わりの痕を洗い流すための浴室で、改めて凜花は深く頭を下げるお詫びの姿勢を示し、不知火が釘を刺しながらも謝罪を受け入れ、二人の遺恨はひとまず収束する流れとなった。リヴァイスが自分への侮

辱はわりと頓着せず、自分の大切な人への無礼に怒る傾向が強く、不知火と凜花のやり取りは、リヴァイスの周りは不快に思っているという意味表示をする意味合いが込められている。

「凜花の物言いには私も相当カチンときていたからな。不知火さんが言いたいことは言ってくれたから、私からあえて言う必要は無かったが。あと、ナディア殿やメリア殿が聞いていたら、凜花とこうして話すことすら叶わなくなっていたからな……」

「ええ、本当に浅はかだったわ、私。凜子ちゃん、ごめんなさい。リヴァイスさんに寄り添って生きていきたいって気持ち、今の私はちゃんと分かるから」

「では、改めてヨロシクだな。凜花、頼りにしてるぞ」

ともあれ、同じ男性に惹かれて困い込むと決めた者同士、打ち解けるのも早い。寵愛を一人占めすれば、受け止めきれずに自分が潰れてしまう相手である以上、女性同士の緊密な連携は欠かせないものだという理解も早い。当のリヴァイスは相手側が満足しているならそれでいいという性質だが、女性側にも女としての矜持がある。惚れた、あるいは惚れ抜いた男を心身とも満足させることは、自分達の存在意義の肯定にも繋がっていた。

「不知火と凜花のわだかまりが解けたのはいいいことだと思っけど、入浴中に話す必要はあった？」

「高坂さんともう一度顔を合わす前に、リーズの女となる紫藤さんにだけ耳に入れておいてほしいこともあるもの。それに、リーズの精の匂いを身体につけたまま、歩き回るわけにもいかないでしょ？　こういう場所のほうが、少し対策するだけで音が外に漏れないから」

「昨晩は凜花に一人占めされてしまいましたし、早朝に乱入すると不知火さんと決めておりましたから」

つまりはそういうことだった。昨晩は痛みを誤認させたものの、下腹部の鈍痛が残る凜花は見学に戻ったものの、朝からしつかり寵愛を得た不知火や凜子にしても、残り香を匂わせたままというわけにもいかない。しつかりリヴァイスに身体を洗ってもらいつつ、女性三名は朝から妙な色艶を漂わせながらの入浴を済ませていく。

「へえ、凜子ちゃんはスキンケアのやつつてあれ使ってるんだ。わりとシンプルなタイプなのね」

「ふふふ、実はご主人様に愛された効果のお陰だな。繰り返しご寵愛をいただくことで、肌にしても日々、内側から整えていただけのから、化粧水や乳液にしても多くの効用を求めなくていい。朝にせよ夜にせよ、手入れの時間も短くなってイイコト尽くしだぞ」
「美容液いらすよ、私も。淫魔の力つて発情させるだけじゃなくて、吸い上げる獲物の精気をより美味に変えるのは知っていたけれど。こうして肌艶が毎日安定して調子が良

「だって、リーズのおかげね、ほんと」

「すごい……不知火さんの肌、以前の私よりみずみずしいし、ハリもツヤもいいです……」

「そういう貴女も、ほら」

「あれ？ 嘘つ、私の肌、こんなに調子いいわけ……えっ、これがそういうことなんですか……！」

虜囚の身であつた凜花も、話題で出てきた凜子や基礎化粧品の話から、自分の身も変化にも気づく。囚われの身でケアが出来ていなかったはずなのに、肌の状態が一気に上向いていると。

身体の内側から淫魔への良質な雌贄となるために、変化を促されているのだ。本来なら、そこに理性を溶かし尽くす常時発情状態に追い込まれているはずだが、リヴァイスが望まない以上、その効果は発動していない。

「私や凜子ちゃんは魔術で刻印を刻んでもらっているから、その分効果も高まっているわね。刻印の位置も自分で選ばせてくれるけれど……ね？」

「下腹部以外の選択肢などありませんから。ご主人様の夜伽を務めるメイドとしては当然のことです」

「別に腕や太ももの内側とか見えにくい場所でもいいのにさ。まあ、普段は自分の意思

で見えなくするようには出来るし、あと、その、なんだ……月のモノが来ても痛みが和らぐと聞くとなあ……」

淫魔の魔力はつまるところ身体と心を性交に常に適した状態にする力だ。下腹部への刻印——いわゆる『淫紋』はその効果を強める役割を果たすのだが、子宮の近くに淫紋を刻むことで、女性の例の周期が来た際にも性交に没頭するのには邪魔となりやすい痛みを自然と緩和してくれるという副効用があることに、不知火や凜子が気が付き、ナディアやメリアも飛びついたという話である。

「あ、凜花。一時的に刻んでもいいかな。痛みがずいぶんマシになると思うんだ」
「是非。というか、どうぞお願いしますっ」

「普段は見えないようにしているからね。対魔粒子が活性化すると反応してほんのり発光して見えるようになったらちゃう点は注意だね」

彼自体は意識しているわけではないが、理知的で情の深い淫魔の女になるといのは、女としては良いこと尽くしなのでは？ え？ 対魔忍に戻るメリットほぼ皆無じゃないこれ。入浴中に聞いた不知火さんの話だと、領地経営代行の収入に出稼ぎの傭兵稼業で生活基盤も問題なし。

屋敷も広いからまだまだメイドは必要だと凜子ちゃんも話してたし……うーん、高坂先生には悪いけど、このまま警備員を兼ねたメイドとして困ってもらうのが一番よね？

え？ あつすごいっ、もう痛みを感じなくなってる。というか、ほんのり温かい……もしかして、冷えの問題とかも気にしなくて良くなるやつじゃない。紳士な淫魔のグレイさん最高だわ……。

そんな思考を回す凜花に対して、凜子は彼女を逃す気などさらさらないとばかりに、形から体制を整えようと動き始める。

「凜花の着替えだが、任務用スーツは別として、とりあえず私の予備のメイド服を用意するでしょうか。……よろしいでしょうか、ご主人様」

「風遁で乾かしてあるけど……まあ、あの衣装のまま朝食というのもね」

「微調整はすぐに済ませてしまうわ、凜子ちゃんと紫藤さんの肩幅とかそこまで差は無いですよ。生地も持ち合わせてあるから」

入浴後、バスローブを仮に羽織った凜花にメイド服を当てて、寸法の誤差を測り直したと思えば、淀みない動きで縫い直していく不知火の手捌きに、思わず見惚れたり拍手したりしてしまう若手三人の姿が見られたりしたが、それはそれとして。

「すごい……本格的なメイドさんだわ、私……。それになんだろう、身体に合っていてとても動きやすい……」

「私達の仕事着であり、ご主人様に仕える身であることを衣服から示す意味合いもある。これから毎日着るのだから違和感も消えるさ。肩回りの動きも引つかかることも一切

なくて、動きやすさも重視されている。パンツタイプのペチコートもセットだから、突如戦闘になっても安心だぞ。凜花の場合は、格闘主体だから必須ともいえるな。今、私達が履いているストラップパンプスのヒールの高さも控えめだし、同じくローヒールタイプで、編み上げのショートブーツも用意されている」

不知火の嗜好もあり、凜子や凜花が着用しているヴィクトリアン風メイド服は日によつて少しでも気分を変えられるようにと、帽子タイプのモブキャップ、ヘッドドレスタイプのホワイトプリム、ジャボタイ等の小物も複数の色違いで用意されていたりする。肩口から足元近くまでを覆うロングエプロンについても、フリルが多めのもの、作業などの実用を重視したものなど、デザイン違いで何種か選べるようになっていた。

加えて、フリルが多めのエプロンかつ、メイド服等の成分に対魔忍スーツにも使われている素材を混ぜ合わせているという、戦闘服としても使い回せる代物に仕上がっている。仕事着というには行き過ぎの感があるものとして仕上がった凜子達のメイド服であるが、シャボタイに合わせて使うブローチやブレスレットの宝石に、空遁の術の転用で、彼女達の得物がすぐに呼び出せるような細工まであるのだが、そこまでは今の凜花が知る由はない。

『私達』つてナチュナルに私までメイド扱いなのね、凜子ちゃん？　まあ、それはそれで悪くないけど。仕え甲斐のあるご主人様ですし？」

「うむ。今はブーツは持つてきていないから、屋敷に戻ってから試し履きするといい。普段使いで黒系統のブーツがあればそれでもいいかもしれないが」

「あるといえはあるけど丈が長いから、メイド服には合わないかもね。こつそり取りに帰るというのも難しいだろうし、凜子ちゃんおすすめのブーツを試させてもらうとするわ」

「足形を取つておいて、ゾクトさん経由でオーダーメイドしてもらつてもいいと思うわ。数足作つてもらおうとしましょう」

女性が三名集まりファッションについて盛り上がつてしまえば、リヴァイスが入る余地はない。内容を聞いておいて、入り用になりそうな素材等を控えて、発注の用意をしておくぐらいのものである。その辺りはナディアやメイアとの付き合いも長く、十分に心得ていた。

「タイツにまで任務用スーツと同じ素材が使われているつて……なんというか、ものすごく贅沢な気が。加工も難しいと聞きますし……あれ？ 不知火さん、さつき縫い直してましたよね？」

「まあ、100%スーツと同じ素材というわけでもないから。ただ、裁断用ハサミや針や糸も特別製ね、一応。市販品だと生地負けちゃうもの」

凜花の困惑も無理はない。が、それは凜花に向けて苦笑いしているリヴァイスが既に

通り過ぎた過去であり、不知火や凜子はオシヤレと安全の両立には不可欠だと平然としている。

「あと、この衣服だが。ご主人様の防御魔術だったか、そういうものも組み込まれていてな、戦闘服としても実は優秀だったりするぞ」

凝り性のリヴァイスを普段は止める役割の不知火が、好きな裁縫関連で自分からはつちやけるとどうなるかという結果が、二人の服装に存分に反映されている。つまりはそういうことだった。

「屋敷に戻ったら、凜花ちゃん専用のメイド服もすぐに仕立てますからね。凜子ちゃん専用の服でもこれだけ似合っているんだもの。ふふふ、腕が鳴るわく♪」

「んく、キングダムでこうやって和の朝食を楽しめるなんて。なんだか不思議よね」
「調味料一式を持ち込んでるとは、流石に思わなかったよ。 그레이さん、すごい和食嗜好なんだな」

「朝は味噌汁を飲みたいんだよ。まあ、不知火と暮らし始めてから、完全に習慣になつてる」

「お母さんもずつと『朝は和食！』だよ。家は完全な洋館なのに、違和感を感じた時期もあったもん」

リヴァイス、不知火、メイド二名四人で手分けをすれば、持ち込んだ食材をもとに朝食の準備を進めるのも手際良く進むというものである。凜花も修練を積んだ凜子ほどではないにせよ、作業を分担して進める程度は問題ないぐらいの嗜みがあった。

そして、そのまま朝食の時間と洒落込むこととなったのだが、寝ている間に、生徒が魔族の男になる誓いを立てていたことを知った『花の対魔忍』こと静流は絶望をさらに煮詰めたような顔をしながら、それでも朝食をしっかりと味わっていた。

また、不知火やゆきかぜの自宅の話も出てきたため、リヴァイス達が墓参りに行く際に泊まる等といった話にまで展開して、彼女の表情は殊更暗くなる一方である。不知火お手製の作務衣姿のリヴァイスと不知火に、うきうきとした表情でメイド服に身を包んでいる凜子や凜花を見れば、ため息の数はひたすらに増えるばかりであった。

「そちらの希望通り、通信は送りましたよ、確かに。『行方不明となっていたゆきかぜちゃん、凜子ちゃんと、独断先行した達郎くんを発見。潜伏先近郊の協力者にて保護されていたが、身体や精神異常を生じており、協力依頼の上、一ヶ月を目安として治療を継続中。最低でも週に一度は通信にて報告を行う』……電波状況悪い振りして、強引に押し切りましたからね？」

「助かります。こちらからも伝手を使ってフォローしましたので。貴方の力で、良質なアロマオイルを作れそうな植物の種も頂けましたし、しっかりお礼はさせてもらいますよ」

「貴方と伝手が出来たのが唯一の成果と思います。お互いに益のある関係にしたいですね。というか、お願いします、してくださいね……紫藤さんまで帰るつもりが無いなんて、本当に勘弁してください……」

ゆきかぜや凜子の治療が絡んでいる、リヴァイス宅への滞在延長は彼の力を警戒しつつも、朝からずっと瞳から光を失っている静流の判断(?)により難なくまとまった。定例通信については週に一度で押し切ったお陰で、リヴァイス達の本拠地から半日もあればヨミハラやキングダムとの往復は可能であり対応も可能だ。なお緊急性があれば九郎隊とゼキナの伝手も活用し、数時間の遅れは出るものの、本拠にいても連絡は取れる手はずは整えている。

なお、九郎隊で通信対応したのは先日、温泉街で会った副隊長格だったため、話自体はスムーズに進み、リヴァイスへの貸し一回で手打ちにするというお話になったのは余談であろう。

「今回のことも考えると出来るだけ早く、魔界にいても直接人間界と連絡が取れる常設の通信手段を用意しないとなあ……」

眷属同士の念話による通信ならばゲート越えも可能だが、そのために不知火と離れ離れなど真つ平である。ナディアやメイアの治める土地の代官業務を考えると、本拠を人間界と行き来するゲートの近くへ移すわけにも行かなかつた。むしろ、代官業務をフォローする秘書としても不知火は既に欠かせない状態であり……。

「ナディアやメイアは君臨すれど統治せず、だし。俺がいなくても回るように制度を整えるにしても、馴染ませるには段階的にやらないと駄目だし、そう考えると百年単位で考える必要はあるしなあ……」

目の前で思考の脱線をされても困つてしまう静流であるが、どう聞いても眩いている内容が洒落にならない内容に聞こえてくる。領地持ちである支配階級で、著名な魔族達の代官を務める若手の実力者。むしろ友好な関係性を維持する以外の選択肢が無いと感じるのだが、自分の所属する組織の『魔族・即・攻撃！（ただし、倒せるとは言っていない）』を地で行く脳筋思考に眩暈がしてくる。

「あつ、申し訳ありません。どうも考え出すと話が逸れてしまつていけませんね。お互いに思い悩むことは尽きないようで、あはは……」

「いえ、ひとえに組織運営といつても、私の場合は幹部の立場というわけではありませんし」

個人的に好感触なのが、過剰に性衝動を誘発させる豊満すぎる乳房とお尻が静流自身

の悩みの種なのだが、その身体にまとわりつき舐め尽くすような性的視線をあまり感じないことだ。自分の胸付近へ目が向く時が全く無いわけでもないし、視線を極力口元のあたりに固定しようとしている様子が見られて、こちらの性的魅力は認識しつつ、不快感を感じさせないように務めている様子が微笑ましく感じたのだ。加えて――。

ぎゆうつ。

「ごっつ」

彼が自分と話す時にはたいてい『あの』水城先生が彼の傍にいて、彼の視線がこちら
の胸のあたりへと向く度に、お仕置きとばかりにお尻を力いっぱい摘み上げるものだから、かつての恩師の嫉妬深い一面であるとか、女として自分を脅威に感じているという、
ちよつとした優越感を感じて、何とも悪くはない時間であったのだ。

それからほどなく、最近頻繁に利用している感のあるワイバーンで彼らの本拠へと移動する行程を経て、本当に畑を耕している様子を見たり、あのナディアやメイアがリ
ヴァイスと仲睦まじくしている場面にも遭遇し、少なくとも個人的にでも友好的関係を
堅持しようと、静流は心に誓っていた。

義父の影響を強く受けた母娘の行動結果

「うーん、いいわね♪ 凜子ちゃんと凜花ちゃんが並ぶと本当に華になるわ。メイアさんもドレスがとても似合うし、三人並べばそのまま絵になるもの♪」

「不知火……私は貴女の着せ替え人形になった覚えはないのだ、け、ど、ね！ ……まったく、どこまでも私にフィットする造りなのが忌々しいわ。可憐さと動きやすさをここまで整えられてしまうとね」

「はいはい、メイアも素直じゃないんだから、もう」

屋敷への帰還後、不知火は瞳を輝かせながら、凜花用のメイド服の量産体制に入った。リヴァイス達と細かい擦り合わせも行うために短期間という縛りはあるものの、花の対魔忍である高坂静流も同行しており、魔界産の植物の種を報酬に不知火の作業に巻き込まれていた。

『お母さん、そんな凝り性になるところまでお兄ちゃんを真似なくていいんだから！』
ゆきかぜのカミナリが不知火に落ちるといふ珍しい一幕もあったりしたが、静流としてもいい息抜きになったのか、楽しい時間を過ごした様子である。

なお、苦々しい表情を浮かべながらも、少し前から不知火お手製の衣服を日常的に着

用するようになったメイアは強く反発するわけでもない。まだそれほど長い付き合いでもないのに、メイアの衣服に関しての嗜好を完全に掌握してしまっている不知火は、自分の好みのデザインばかりを生み出していくのだから。そんなメイアを宥めるナディアにしても浴衣姿となっているから、不知火が普段着を仕立てるのは最早日常と化していた。

「お母さん、ほんと楽しそうよね。まー、私の好みとお母さんの好みがかげ離れてるから、余計に今はつちやけてるのかも。たまに着るのにはいいんだけどねー。私や達郎まで同じ仕様でメイド服や執事服まで仕立ててもらっちゃったし」

不知火のやり切った感のある満足気な表情を横目で見ながら、幼き頃は不知火お手製の可愛い系の洋服を毎日着せられていた実娘のゆきかぜは、矛先が三人に向いていることに深く安堵しているのだった。

「あら？ ゆきかぜは昔も今も変わらず可愛い服が似合うわよ。お母さんが保証するわ」

「はいはい、だから一着作ってくれたじゃない、お母さんだって。それに、畏まった場となればお願いすることはいくらでもあると思うもん」

「そう？ いつでも言ってくれたらすぐに仕立てるから、相談してちょうだいね」

凜花もブーツのフィッティングを済ませて、日が経つごとにメイド服で過ごす生活に

慣れてきている。凜子と並び、凜とした佇まいが似合う女性であり、ヴィクトリアン調の服装を見事に着こなしていた。

「凜子はもちろんだけど、凜花も本当に似合うよね。どこにでも安心して連れていける従者さんだ」

「あ、ありがとう、旦那様。でも、屋敷内とはいええ、本当にこんな砕けた話し方でいいのかしら」

「お仕事とか公的な場でしつかり使い分けてくれればいいんだよ。凜子はとことん俺に對してメイドを徹底することに拘りが強いみたいだけども」

今は砕けた口調でありながら、普段の呼び方は旦那様呼びが定着したあたり、凜花の敬意は確固たるものになっていた。リヴァイスが代官として業務にあたり、その補助を行う際には言葉遣いも完全に従者のそれに切り替わるため、メリア達も特に問題視はしていない。

というのも、夜の営みにおいてまだまだ初心さがついて回る凜花に、メリア達にとつて凜花は姉妹の末っ子のような立ち位置に落ち着きつつあり、凜花にしても自分より明らかな強者であるナディアやメリアに對してしつかり敬意を払う態度を見せているため、新たに加わった屋敷の仲間はずスムーズに受け入れられていたのである。

「たあ〜つう〜ろお〜? いつまでも紫藤先輩に見蕩れてるんじゃないわよっ!」

「いづづつ！ 耳引つ張るなよ、ゆきかぜっ！ 見蕩れてなんかいな……いや、すぐく穩やかな笑顔に引き付けられたから、そうなるのか……？」

「ふふ、ごめんなさいね、達郎くん。もし、私がそんな表情を見せているとしても、それは旦那様のお陰だから」

「うわあ、紫藤先輩、 그레이さんにべた惚れだあ……学園でその表情したらヤバいことになりますよ」

「確かに、あの微笑みは普段とのギャップでやられて、突撃する連中がいそうね……」

変化が著しい凜花の表情や態度に、元から凜子を通じて知人となっている達郎が見蕩れてしまい、ゆきかぜが怒りを示してしまうが、そんな二人の反応への、凜花は柔らかな微笑みを浮かべたまま。そして、息抜きできたはずの静流の表情はまた曇るのであった。

「学園に戻れば、旦那様が傍にいるわけではないから、その辺りの切り替えは大丈夫と思うのよね」

「うむ、ご主人様が傍にいないければ、私も従前の私に切り替わるだろうさ。さつき、ご主人様が仰られた公的な場みたいなもの、学園での私の振る舞いをするだけだな。まあ、そもそも戻るつもりもないが」

「うん、凜子ちゃんの言う通り、学園に戻ったとしても公の場としての振る舞いをする感

覚だと思わね。使い分けを無理なく自然にできるようにしておかないとね」

凜花自身の感覚も目を重ねるごとに、メイドの格好でリヴァイスの補助なり屋敷の管理作業を行うのが、少し前まで学生服を着て学園に通っていた自分から変化した自分の『当たり前』になりつつある。また、毎日設けられるリヴァイスや不知火たちとの訓練や立ち合いの時間を通じて、さらなる強さが確実に身に付き始めている実感もあり、また、メイド服が戦闘服としても問題ない造りであることも体感していた。

旦那様や不知火さんからお願ひされている、共同墓地への墓参りへの手筈は高坂先生に協力してもらって、手早く整えるとして、学園での滞在期間をできるだけ短くしないとね……。というか、早くこっちの生活にもつと馴染んでいきたいもの。乱戦形式の模擬戦だと全然うまく立ち回れていないから、もつと対複数の戦い方も磨いていかないといけないし、強くなるだけではなくて、色んな戦場を想定した経験も積みたいわ。旦那様は傭兵稼業もやっていると聞いているから、一緒に参加させてもらって……。

まあ、その前にまずは私が一旦戻るときに、凜花ちゃんも五車に連れて行って学園への報告はさせないと。任せきりだったら即座に抜け忍になりそうだし、できる限り長期潜入任務の格好に持っていきたいわね。旦那様が傭兵協力している八津さんの部隊の人とも顔合わせがあるって聞いているし、その時は従者として動くわけだから、制服も持って行かないと——。

考えることが増えていくものの、理想と思える男性を主人と仰ぎその家族達と過ごす、穏やかでありながら、より魅力的な女性へと互いに切磋琢磨する、充実している日々。

気位の高さゆえに学園では気難しい表情でいることも多かつた凜花も、自然と柔らかな表情をしている時間も増え、何も知らぬ学園側からすれば同姓同名の別人、またはクローン、あるいは洗脳による人格書き換え済としか考えられないような変質ぶりだったのである。

「秋山さんも紫藤さんも短期間で変わり過ぎよお……絶対に敵対組織の洗脳を受けているって思われるわ……」

「静流って言ったっけ、アンタも苦労してるのね……。まあ、不知火を娶った後のリーズって自重を止めてるから、自分に興味を示した女はフツーに墮としにかかるような言動をするし、パートナーになるって決めたあの子達もそりや変化もするわよ」

「分からなくはないですよ？ 一生の伴侶となる男性を見つけて、取り繕った自分を捨てていいんだってなれば、ああもなりますよ？ でも、私達の組織としては大打撃過ぎますよ……」

「リーズがやってる傭兵契約だっけ？ あれを部隊単位でやつてもらったら？ いくら訓練や模擬戦で鍛えたって、リーズも実戦での連携とか経験に勝るものはないって言う

てるもの。お金はかかるけど、確実に成果が望める部隊が動けるって計算ができるって前向きに考えるしかないと思うわよ」

ただ、メイアが気まぐれを起こしてフォローに入るぐらいには、静流の消沈度合いは増すばかりであった――。

その後も順調にゆきかぜや凜子の体質改善は進む。同時にリヴァイスの淫魔としての力や不知火の水遁の幻影を利用した、洗脳等への対精神攻撃への耐性を込めた刻印――淫紋の亜種のようなものだ――を、五車へ戻るゆきかぜと達郎に刻む措置も施していた。なお、一時的であったはずの凜花の刻印は恒常化することとなった。ある意味当然とも言える。

「この刻印は凜子や凜花は別としても、高坂さんや他の学園の人には知られないようにね。不可視化はしてあるけど、対魔粒子が活性化するとどうしても隠し切れないから。あと、過信も禁物。俺や不知火の影響下にあることで、他の精神干渉を受け入れられないような術式だけど、絶対的なものではないからね」

「うん、ありがとうお兄ちゃん。デザインも達郎と対になっていて、お気に入りなんだよ

ね」

「その辺りは不知火のセンスに感謝してくれ。下腹部に刻むって言われて、俺は目隠しの上で不知火の誘導で刻んでるんだから、ゆきかぜのは実際に見ていないわけだし。まあ、達郎くんのは見えてもらったから、合わせ絵の完成図はなんとなくわかるけど」

「だって、女の子にとつては冷えは大敵だもん。任務用のスーツは最低限覆われてるけど、だといつても、やっぱり、いつでもほんのり温かいのは助かるよ。月のモノが来ても、痛みが抑えられるってすつごく大事なだからね！」

「うん、力説ありがとう。ただ、生々しい話を彼氏の前で義理の兄にするのはどうかと思う」

「あはは……。でも、姉さんもありがたみを熱く語ってましたから、よほどのことなんですよ、グレイさん」

「洗脳防止が目的だけど、女性陣にとつては痛みの緩和とか冷え防止の副産物のほうが大事なのがよく伝わったよ」

屋敷に戻つてからは二人の懇願に押し負ける形で、リヴァイスが心を無にしながら、結合した状態の二人に淫気を操り、互いの気脈を行き渡らせる感覚を覚えさせていた。二人が薄つすらと感覚をつかめた後は、日常の合間合間にゆきかぜと達郎が手を組み合わせた状態で、ナディアが補助を行うことでその感覚の強化を促していく。

ゆきかぜや凜子の治療の終わりが見えた頃には、達郎とゆきかぜは集中さえすれば、まだ細くゆったりとしたものであるが、二人だけでやり取りができるようになっていた。

いずれ、集中を必要とせずとも互いの気を行き交うことが可能なレベルまでいけば、二人の関係性は、リヴァイスと不知火の関係と変わらぬものへと到達するだろう。

「この刻印だけじゃありません。グレイさんやナディアさんのおかげで、ゆきかぜと互いの『気』を行き渡らせるのも少しずつ分かってきましたし、対魔粒子だともう少しやり易いので、練習にもなりますし自分の術の威力を高めるのにも役立つているので」

気脈よりも対魔粒子のほうがやり取りの感覚をつかみやすいのは、現役の対魔忍ゆえか。リヴァイスが淫魔の力を持つ魔族側のため、不知火を筆頭にパートナー達には気脈でのやり取りが馴染んではいる。

「ゆきかぜのほうがまだまだ粒子量は多いので、受け取る量の調整も練習ですね、受け取り過ぎると、許容量を超えてしまつて強い痛みになりますから」

細かな調整は達郎のほう得意としているため、二人の力のやり取りは達郎が主体になりつつある。いずれは二人で雷遁や風遁で、かの井川アサギを模した光速の動きを目標にしていくという。

「二人の粒子の親和性がもつと深まれば、ゆきかぜが風遁を、達郎くんが雷遁も使えるよ

うになるかもしれない。気脈だけではなくて、そちらも重要になってくるね」

身と心を幾度も重ね合い、互いの持つ力を受け入れられるベースが出来上がり、リヴァイスが刻んだ刻印が補助する。疑似的にリヴァイスの眷属化の状態にあることで、ゆきかぜと達郎は対魔忍としても互いが唯一無二の相棒になれる可能性が開けたのだ。

「まあね、気にしても粒子にしてもって結局生命力だからさ。健康な心身が力の活性化にも直結してくる。その感覚は忘れないように訓練は続けつつ、しっかりと睡眠は取ってくれと伝えておくぞ」

リヴァイスの苦笑いの意味が分からないゆきかぜや達郎でもない。潜入任務などとなれば、リヴァイスが懇意としているゼキナ等を経由して必ず知らせを飛ばすようにとの言葉も受けて、二人も義兄の助言に素直に頷いていた。

「そういえば、お兄ちゃん。静流先生にも淫紋シールを何枚か渡したんだっけ？」

「オブラートにもう少し包んでくれ……いや、そもそも淫紋シールじゃないから。そういうデザインなんかにしてないし、刻印シール、だから。張り付けたままなら2〜3日効果が見込める奴だし、お腹に貼る必要もないからね？」

「でも、冷え対策になるって聞いて、静流先生もやっぱりお腹かなって言ったよ。モニターになって有用だったら、生産体制が整い次第、自分が買占めてもいいとも言ってたし」

静流とも今後の有用な関係性を保てるように、身体に直接刻むことなく一定の効果が
見込める試作品を彼女には渡していた。シールタイプとはいえ、リヴァイスや不知火の
魔力を込められる素材でなければならぬため、早々量産できるものではなかったりす
る。あくまでテストの一環という域を超えないものだ。

なお、短期間で帰還するはずだった静流の滞在もゆきかぜ達との同時帰還へと日程が
延びている。元教え子である静流の消沈ぶりに、不知火がゼキナや九郎隊の伝手をたど
り対魔忍側に過労からの体調悪化を通達した上で、静流に戦力低下の代替まではいかず
とも、彼女の任務の成功率をより高めるための魔術つき忍具等を手配するようにしてい
た。

「その辺りはおいおい相談かな。素材がそもそも集まるのかという話でもあるし」

「お兄ちゃんの魔力を込めて耐えられる素材、素材かあ……ん〜」

「魔界の植物や高坂さんからもらった植物でも色々試してみるよ、これからね」

そんな未来への小さな投資も試行しつつ、リヴァイス達の五車町遠征の準備は確実に
進んでいくのだった。なお、不知火がどうしようもなくなってくればこちら側に来たら
いいと静流に誘いをかけていることを、パートナー陣とゆきかぜは聞かされており、知
らずはリヴァイスや達郎ばかりである。